

伏見城跡・福島太夫遺跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡・福島太夫遺跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



3区第2面全景（南西から）



1 3区第2面東壁断面（北西から）



2 3区第2面西壁断面（北東から）



1 1区全景（南西から）



2 6区南壁断面（北西から）



出土金箔瓦

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、学校整備工事に伴う伏見城跡・福島太夫遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

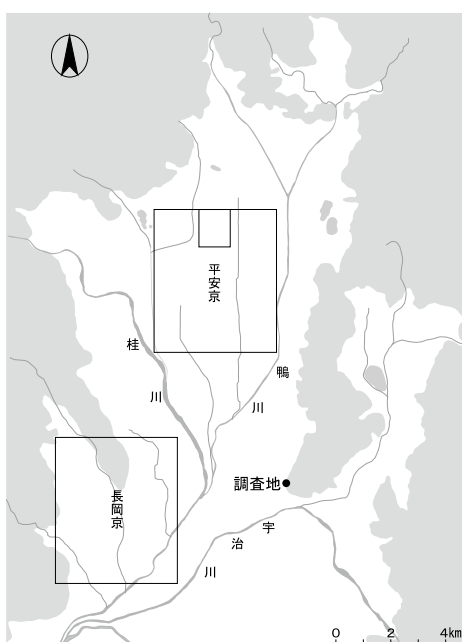
令和3年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡・福島太夫遺跡（京都市番号 19 F 791）
- 2 調査所在地 京都市伏見区桃山福島太夫北町52番地
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2020年10月5日～2021年4月30日
- 5 調査面積 1,460㎡
- 6 調査担当者 松吉祐希
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付けた。土器類は番号のみ、瓦類は「瓦」、金箔瓦は「金瓦」、銭貨は「銭」、金属製品は「金」、石製品は「石」をそれぞれ番号の前に付けた。写真番号も同一の番号とした。
- 13 本書作成 松吉祐希
付章：株式会社 古生態研究所
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



15 協 力 者

調査・整理にあたっては、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝いたします。

網 伸也（近畿大学）、市川 創（大阪府教育庁）、釜井俊孝（京都大学防災研究所）、北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所）、高田 徹（城郭史料研究会）、辻 康夫（パレオ・ラボ）、土井一生（京都大学防災研究所）、中居和志（京都府教育庁）、中西裕樹（高槻市）、中村武生（京都女子大学）、三好孝一（大阪府立弥生文化博物館）、森岡秀人（関西大学大学院）、森島康雄（京都府立丹後郷土資料館）、山田邦和（同志社女子大学）、横田冬彦（京都大学）

※ 敬称略・肩書は調査時

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 調査の方法と経過	2
2. 調査地の位置と環境	4
(1) 調査地の立地と歴史的環境	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 1・2区	7
(3) 3区	9
(4) 4区	13
(5) 5区	14
(6) 6区	16
(7) 7区	17
4. 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 土器類	19
(3) 瓦類	22
(4) 銭貨	25
(5) 金属製品	26
(6) 石製品	26
(7) 貝類	26
5. ま と め	27
(1) 調査地における土地利用の変遷	27
(2) 伏見城期の造成	29
付章 土坑524出土炭化材の分析	30

図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 3区第2面全景（南西から）
- 巻頭図版2 遺構 1 3区第2面東壁断面（北西から）
2 3区第2面西壁断面（北東から）
- 巻頭図版3 遺構 1 1区全景（南西から）
2 6区南壁断面（北西から）
- 巻頭図版4 遺物 出土金箔瓦
-
- 図版1 遺構 1区・2区平面図（1：200）
- 図版2 遺構 1区北壁断面図・オルソ画像1（1：80）
- 図版3 遺構 1区北壁断面図・オルソ画像2（1：80）
- 図版4 遺構 2区北壁・西壁断面図（1：80）
- 図版5 遺構 3区第2面平面図（1：200）
- 図版6 遺構 3区第1面平面図（1：200）
- 図版7 遺構 3区東壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版8 遺構 3区西壁断面図・オルソ画像1（1：80）
- 図版9 遺構 3区西壁断面図・オルソ画像2（1：80）
- 図版10 遺構 3区南壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版11 遺構 3区北壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版12 遺構 3区塀1・2実測図（1：50）
- 図版13 遺構 3区土坑10遺物出土状況平面図（1：20）、土坑37実測図（1：60）
- 図版14 遺構 3区土坑10・23・76・77・100実測図（1：50）
- 図版15 遺構 4・5区第2面平面図（1：200）
- 図版16 遺構 4・5区第1面平面図（1：200）
- 図版17 遺構 4区断割トレンチ西壁・北壁・試掘トレンチ南壁断面図（1：80）
- 図版18 遺構 5区北壁断面図（1：80）
- 図版19 遺構 5区南壁断面図（1：80）
- 図版20 遺構 4・5区塀3実測図（1：60）
- 図版21 遺構 6区平面図（1：200）、東壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版22 遺構 6区南壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版23 遺構 7区平面図（1：200）、北壁・東壁断面図・オルソ画像（1：80）
- 図版24 遺物 金箔瓦実測図（1：4）
- 図版25 遺物 瓦拓影及び実測図1（1：4）

- 図版26 遺物 瓦拓影及び実測図2 (1:4)
- 図版27 遺構 1 1区南壁断面(北西から)
2 1区土手状高まり1断割状況(北から)
- 図版28 遺構 1 2区第2面全景(南東から)
2 2区溝1掘削状況(北東から)
3 2区溝2掘削状況(北東から)
- 図版29 遺構 1 3区第2面東壁土手状高まり(北西から)
2 3区第1面全景(南から)
- 図版30 遺構 1 3区塀1検出状況(西から)
2 3区塀1完掘状況(西から)
3 3区塀2完掘状況(北から)
- 図版31 遺構 1 3区塀2柱穴284断面(西から)
2 3区土坑23金箔瓦出土状況(東から)
3 3区土坑37断面(南西から)
4 3区土坑37金箔瓦出土状況(南から)
5 3区土坑48遺物出土状況(南から)
6 3区土坑77東壁断面(西から)
7 3区土坑10(南西から)
8 3区土坑10遺物出土状況(南東から)
- 図版32 遺構 1 4区第2面全景(北東から)
2 4区第1面全景(北東から)
- 図版33 遺構 1 4区第1面の造成単位(北東から)
2 4区試掘トレンチ南壁断面(北東から)
- 図版34 遺構 1 4区伏見城期の造成土遺物出土状況(南から)
2 4区塀3柱穴407検出状況(東から)
3 4区塀3柱穴407掘削状況1(東から)
4 4区塀3柱穴407掘削状況2(東から)
5 4区塀3柱穴400検出状況(東から)
6 4区塀3柱穴400掘削状況(東から)
7 4区塀3柱穴418掘削状況(東から)
8 4区土坑415遺物出土状況(南から)
- 図版35 遺構 1 5区第2面全景(西から)
2 5区切土斜面500検出状況(北西から)
3 5区第1面全景(西から)
- 図版36 遺構 1 6区全景(北西から)

	2	6区東壁断面（西から）
	3	6区遺物出土状況（北から）
図版37 遺構	1	7区第2面全景（南西から）
	2	7区第2面石1・2検出状況（南西から）
	3	7区第1面全景（北西から）
図版38 遺物		土器類
図版39 遺物		瓦類
図版40 遺物		瓦類・金属製品・石製品

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	1・2区調査前全景（東から）	3
図4	3区作業状況（南から）	3
図5	4・5区調査前全景（北東から）	3
図6	5区重機掘削状況（北東から）	3
図7	6区調査前全景（西から）	3
図8	6区埋め戻し状況（北西から）	3
図9	7区調査前全景（西から）	3
図10	生徒の現場見学状況（北から）	3
図11	1・2区基本層序柱状図（1：100）	8
図12	1区南壁土手状高まり1断面図（1：50）	8
図13	3区基本層序柱状図（1：100）	9
図14	3区土坑323実測図（1：20）	10
図15	4・5区基本層序柱状図（1：100）	13
図16	5区土坑524実測図（1：20）	15
図17	6区基本層序柱状図（1：100）	16
図18	7区基本層序柱状図（1：100）	17
図19	土器実測図1（1：4）	19
図20	土器実測図2（1：4）	20
図21	土器実測図3（1：4）	21
図22	丸瓦拓影及び実測図（1：4）	24

図23	錢貨拓影（1：1）	25
図24	金属製品実測図（1：2、1：4）	25
図25	石製品実測図（1：4）	25
図26	伏見城期の遺構（1：1,000）	28

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	19
表3	貝類一覧表	26

伏見城跡・福島太夫遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の契機 (図1)

本調査は京都市立呉竹総合支援学校整備工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都市伏見区福島太夫北町52番地に位置し、伏見城跡の城下町及び福島太夫遺跡にあたる。

整備工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」とする）が試掘調査を行った結果、伏見城期の遺構や伏見城城下町の造成土が確認された。そのため、文化財保護課が原因者に対して埋蔵文化財調査の実施を指導し、調査が行われることとなった。調査は、委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、2面の遺構面を想定し、伏見城期の造成土上面（第1面）で伏見城期、基盤層上面（第2面）で古墳時代から中世の遺構・遺物を確認、調査地の歴史の変遷を明らかにすることを目的とした。

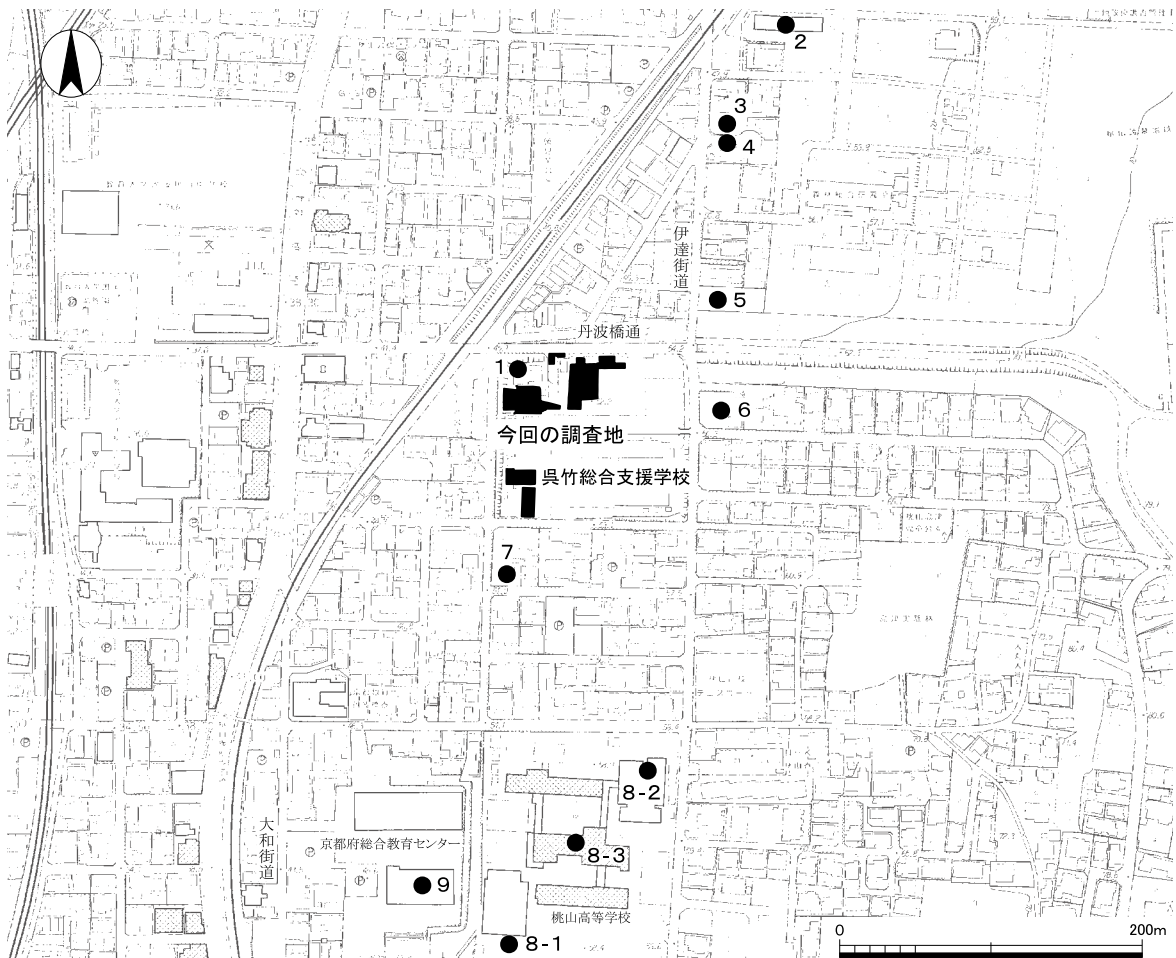


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

(2) 調査の方法と経過 (図2～10)

調査区は、文化財保護課の指導により、排土置き場や既存の水道管などの関係から、1～7区の7箇所に分けて行った。1区は356㎡、2区は131㎡、3区は516㎡、4区は152㎡、5区は171㎡、6区は104㎡、7区は30㎡で、調査総面積は1,460㎡である。

1区から順に調査を行い、4・5区は同時に調査を行った。学校建設に伴う現代の造成土は重機を用いて掘削し、第1面の遺構検出及び掘削は人力で行った。さらに、伏見城城下町造営に伴う整地層は第2面の基盤層上面まで重機で掘削し、遺構の検出及び掘削は人力で行った。検出した遺構については平面図及び土層断面図などを作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査後は重機により埋め戻しを行った。3・6・7区では、埋め戻し後に再び校庭または出入口として使用するために、埋め戻しの上層部分に真砂土を入れ、転圧作業を行った。調査期間は令和2年10月5日～令和3年4月30日である。

調査中は適宜、文化財保護課の指導及び、検証委員の龍谷大学の國下多美樹教授、同志社大学の浜中邦弘教授の視察を受けた。また、令和2年12月14～18日に、呉竹総合支援学校の生徒の見学を受け入れた。

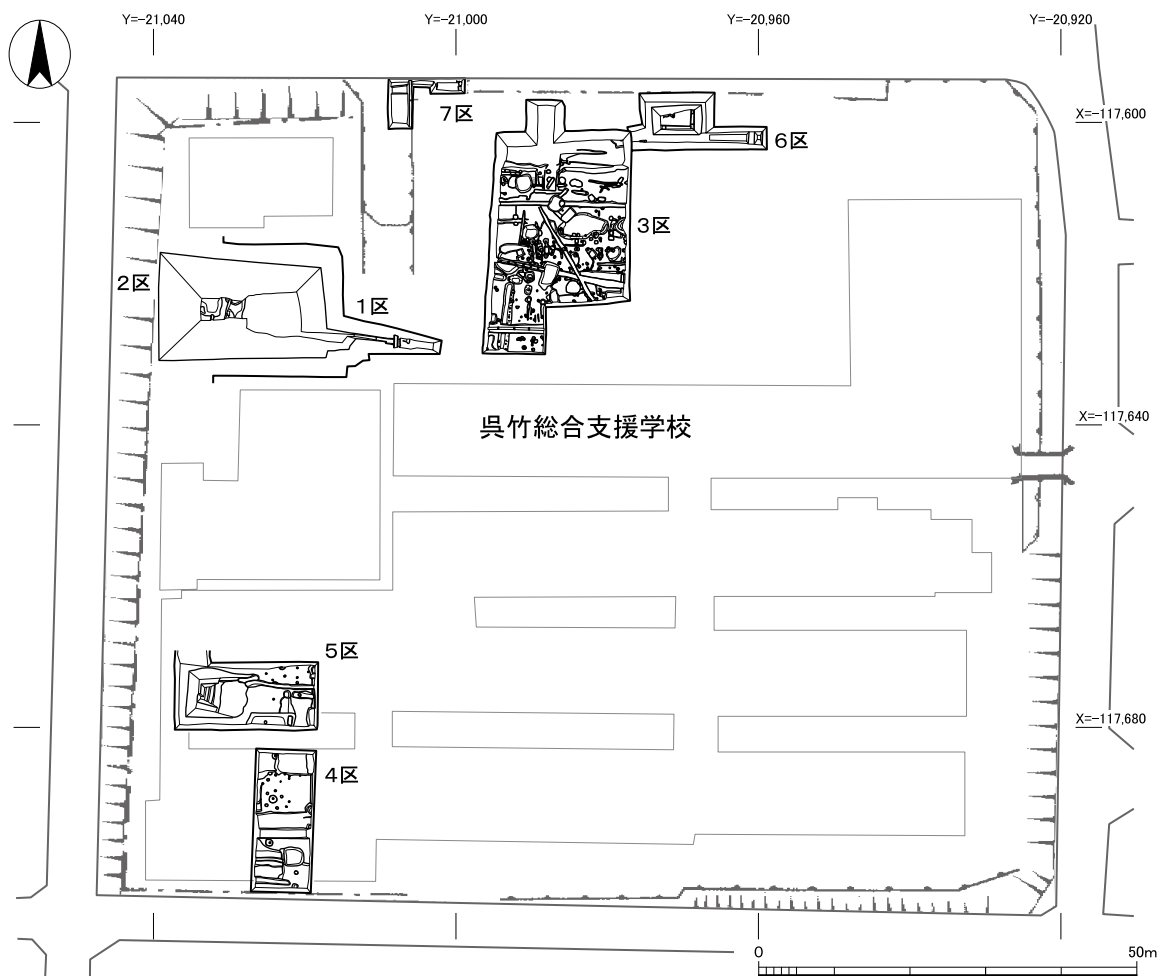


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 1・2区調査前全景（東から）



図4 3区作業状況（南から）



図5 4・5区調査前全景（北東から）



図6 5区重機掘削状況（北東から）



図7 6区調査前全景（西から）



図8 6区埋め戻し状況（北西から）



図9 7区調査前全景（西から）



図10 生徒の現場見学状況（北から）

2. 調査地の位置と環境

(1) 調査地の立地と歴史的環境

調査地は、東山・桃山丘陵南端の木幡山西麓に位置する。伏見城の築かれた木幡山頂上（標高105m）は調査地の南東にあたり、調査地周辺の地形は南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。

伏見城は、豊臣秀吉が築いた城で、その歴史は大きく以下の4時期に分けられる。文禄2年（1593）、指月の丘に隠居所を築いたⅠ期：指月屋敷期、文禄3年（1594）に指月屋敷を本格的な城郭として整備したⅡ期：指月城期、慶長元年（1596）の慶長伏見の大地震により倒壊した指月城から木幡山へ場所を移して新たに城を築くⅢ期：豊臣木幡山城期、慶長5年（1600）に関ヶ原の合戦で勝利した徳川家康が城を再建したⅣ期：徳川木幡山城期である。伏見城はその後、元和9年（1623）に廃城となった。

伏見城の周辺には城下町が整備され、調査地周辺の丘陵地には、大名屋敷が建てられた。調査地は丹波橋通の南、伊達街道の西に位置しており、『伏見御城柳井武家屋敷取之繪圖』から、筑後守田中吉政の屋敷地と考えられている。

伏見城廃城後は、調査地周辺は田畑となった。また、江戸時代前期には伏見城跡や大名屋敷跡地に桃が植えられ、元禄の頃には3万本の桃の木があったとされる。江戸時代後期には周辺は「桃山」と呼ばれるようになった。また、明治時代には梅の名所としても知られており、調査地周辺にも梅林があったようである¹⁾。この間、丘陵地では耕作も行われていた。

昭和25年（1950）には、調査地に京都学芸大学（現京都教育大学）附属中学校が建てられる。昭和33年（1958）4月に、中学校施設を改修して桃山小学校呉竹分校として開校され、同年10月に現在の呉竹総合支援学校の前身である呉竹養護学校（当時）となった。

(2) 周辺の調査（図1）

呉竹総合支援学校構内では、昭和25年（1950）に京都学芸大学（現京都教育大学）附属中学校の新築工事が行われたが、その際「伊達街道西方約二十メートルの地中に西面の高さ約一メートル半、延長約百メートルの石垣を発見し、その裏込栗石中から五六十枚の金瓦を発見した」とされている²⁾。

また、1976年には呉竹養護学校（当時）の増築・運動場整地工事の事前調査が伏見城研究会・龍谷大学考古学研究会により行われた（調査1）。この調査では、7つの調査区を設定しているが、安土桃山時代の顕著な遺構は検出しておらず、第3トレンチから、「ピット状遺構」、溝状遺構、焼土層、現代の野つぼを検出したのみであった。遺物としては、伏見城期とみられる瓦類（金箔瓦含む）、土器類や貝類が出土している。

調査地北方の調査2では、厚さ1.2～1.5mの伏見城期の造成土の下層で、埋没した古墳を検出している。この古墳墳丘上やその周辺からは多くの土師器・須恵器・円筒埴輪片が出土した。また、

調査地南の調査7でも、幅2mの土坑から古墳時代の須恵器杯身が出土した。

調査地の東に隣接して南北に走る伊達街道沿いでは、調査3～6が行われている。これらの調査では、伊達街道とその東側の屋敷地との境に石垣を確認している。屋敷地は伊達街道よりも少なくとも1.7mほど高く、石垣はひな段造成された屋敷地の縁辺部に構築されていた。さらに調査3では、石垣と伊達街道の間に設けられた犬走り³⁾と石組み溝を検出した。調査4では、伊達街道東側の屋敷地で掘立柱建物³⁾を検出した。

調査地南方の京都府立桃山高校では3回の調査が行われている（調査8）。調査8-2では、伊達街道に沿った南北方向の石組み溝、調査8-3では、屋敷地で掘立柱建物⁴⁾、土坑を検出した。

調査地南方の京都府総合教育センター（調査9）では、調査区西側の屋敷地で伏見城期の礎石建物や塀、土坑、溝などを検出した。

註

- 1) 加藤次郎『伏見桃山の文化史』1953年
- 2) 註1)に同じ。
- 3) 報告書には「礎石建物」と記述がある。しかし、「礎石」とされる石は柱穴掘形の底面に据えられており、石は完全に埋没していることから、この石は掘立柱の根固めの石である礎板石とみられる。このことから、建物は礎石建物でなく掘立柱建物と考えられる。
- 4) 註3)に同じ。

参考文献

和崎光太郎『図録 京都における特別支援教育のあゆみ』京都市学校歴史博物館 2016年
加藤次郎『伏見桃山の文化史』1953年
京都市『史料 京都の歴史 第16巻 伏見区』1991年

周辺調査の引用文献

- 調査1 伏見城研究会・龍谷大学考古学研究会「伏見城跡発掘調査現地説明会資料」1976年
調査2 「伏見城跡3」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
調査3 清水早織「IV 伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
調査4 久世康博「伏見城跡（FD32）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
久世康博「伏見城跡1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
調査5 山下大輝「伏見城跡・桃山古墳群」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
調査6 奥井智子「IX 伏見城跡・桃山古墳群」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年

調査7 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の二 伏見城』伏見城研究会 2006年

調査8

- 1 村尾政人「4 伏見城跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980 - 1）』京都府教育委員会 1980年

- 2 長谷川達「5. 伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第8冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年

- 3 岩松 保「3. 伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第59冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994年

調査9 柴 暁彦「3. 伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第44冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年

3. 遺 構

(1) 基本層序

基本層序は、上から学校建設に伴う現代造成土、近世から近代の耕作土、伏見城期の造成土、基盤層である。1・6区では、近世から近代の耕作土は確認できておらず、現代造成土の下層が、伏見城期の造成土であった。これらの土層の標高は、調査区により大きく異なっているため、詳細は調査区ごとに述べる。

調査では、伏見城期の造成土の上面を第1面、基盤層の上面を第2面として遺構検出を行った。1区・6区では第1面で遺構の存在を確認できなかったため、第2面のみ面的な調査を行った。第1面では、伏見城期と伏見城廃城以降の遺構を、第2面では、伏見城期の造成に伴う遺構と伏見城造成以前とみられる遺構を検出した。また壁断面の観察で、伏見城の城下町を造成する際の造成盛土の作業単位を確認した。以下、調査区ごとに遺構面の状況や検出遺構などを記す。

(2) 1・2区（巻頭図版3、図版1～4・27・28、図11・12）

1区は、学校構内北西部に位置する、東西18m、南北17.4mの調査区の南東隅に細長い台形状の凸部が付属する調査区で、面積は約356㎡である。調査区東端の基本層序は、上から現代造成土、伏見城期の造成土、基盤層である。調査区西端では、伏見城期の造成土が存在せず、現代盛土の直下が基盤層であった。また現代の造成土については、壁断面で2時期を確認した。上層の現代造成土2は、コンクリートや礫などを含んだ土で盛土していた。下層の現代造成土1は、標高の高い東から低い西に向って、砂や土を互層状に入れていた。呉竹総合支援学校では、1950年に前身の学校新築工事、1976年に運動場の整備工事が行われており、現代造成土1が前者、現代造成土2が後者の工事に伴うものとみられる¹⁾。

2区は、1区の西隣に位置する、東西7.5m、南北17.4mの調査区で、面積は131㎡である。基本層序は、上から現代造成土、近代の耕作土、基盤層となる。本調査区では伏見城期の造成土を確認していない。

基盤層上面を第2面として遺構検出を行った。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
伏見城期以前	土坑323・524	
伏見城造成時	土手状高まり1、段差1、切土斜面500、溝320・321・429・533・600、石1～3、造成盛土	
伏見城期	塀1～3、土坑10・23・37・76・77・84・100・130・133・215、ピット50・56・228、溝38	
伏見城廃城後	土坑48・415・514、ピット423、溝1・2、落ち込み1	

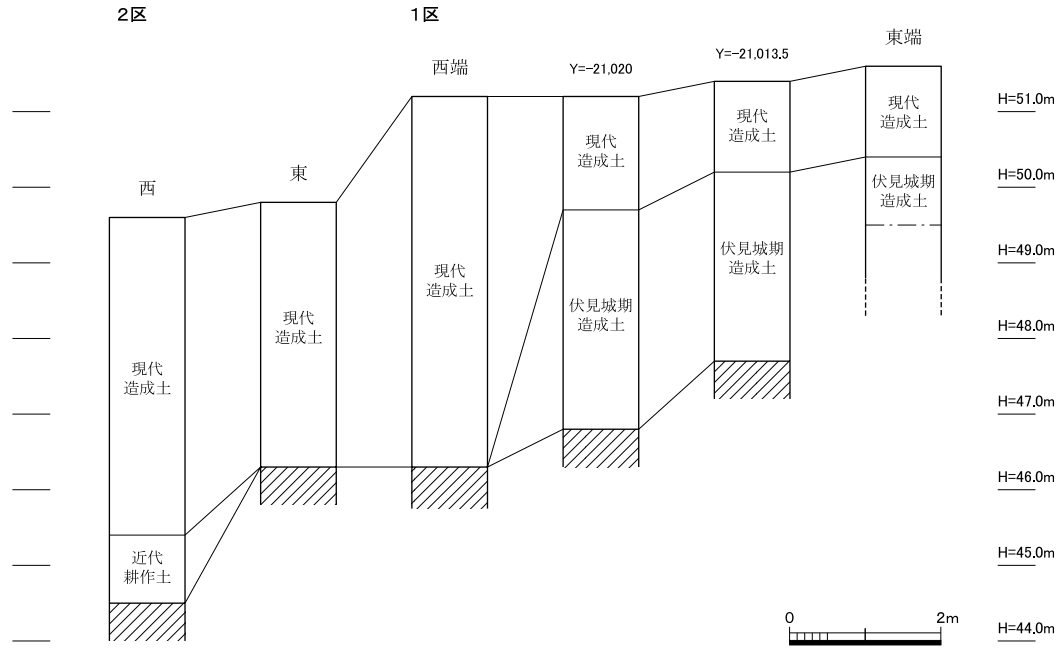


図11 1・2区基本層序柱状図（1：100）

第2面（巻頭図版3、図版1・28）

1区の基盤層の標高は、1区中央で47.7m、西端で46.3mであり、2区の基盤層の標高は、調査区東端で46.3m、調査区西端で44.5mであり、旧地形は全体的に南東から北西に向かって傾斜する。なお、1区の東半では、調査区が狭小であったために基盤層は確認できなかった。

第2面では、伏見城の城下町造成に伴う土手状高まりと落ち込み1、造成盛土を確認した。

土手状高まり1（図12、図版27） 調査区中央で南北に延びる土手状高まりを平面的に検出した。この高まりは、北端で西に折れ曲がり、西端は削平される。高まりの幅は1.0～1.5mで、高さは5～25cmほどが残存していた。この高まりは、基盤層の上に幅1.6～2.0m、厚さ2～4cmの粘土を敷き、その上に基盤層由来の赤褐色粘質土を積んで、作られていた。伏見城期の造成に伴うものとみられる。この高まりの西側は段差となることから、地形の変換点に設けた土手状高まりとみられる。

段差1 土手状高まり1の西側で20cmほどの段差を確認した。高まりの西側が低くなる。

造成盛土 基盤層の上に盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。盛土の厚さは2.5～2.9mである。

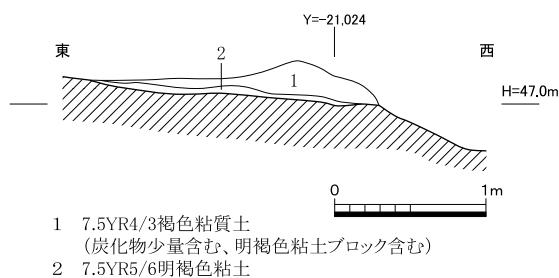


図12 1区南壁土手状高まり1断面図（1：50）

本調査区における造成の工程は、北壁の断面観察から、以下のように復元できる。①南東から北西に傾斜する基盤層に段差1をつけて、基盤層の傾斜を緩やかにする。②段差1の東側に土手状高まり1を作る。③土手状高まり1より東側は、黄橙色シルトブロック＋赤褐色粘質土ブロックの土〔以下、Aとする〕

を厚さ15～40cm敷く。このAを敷いた層の上面は、起伏をもたせており、凸凹がある。④標高の高い南東から、標高の低い北西へ土を斜め方向に入れる。盛土は、約1.6m幅ごとに2種類ほどの土を互層状に入れていた。盛土の土質は、基盤層由来の赤褐色粘質土〔B〕、Bに明黄褐色のシルトブロックを含んだ土（C）、明黄褐色のシルト～中砂（D）、にぶい黄褐色砂礫（E）と、Bに砂礫を含む土（F）、Cに砂礫を含む土（G）、Dに砂礫を含む土（H）の8種類に大別した²⁾。以下、シルトブロック及び斜め盛土の土質については、A～Hの記号を用いる。

この造成により形成された第1面の標高は、調査区東端で50.4mで、Y=-21,020付近で標高49.4mと西側に緩やかに傾斜するが、Y=-21,020以西では勾配が急となり、Y=-21,025.5では標高46.3mまで下がる。

落ち込み1 調査区西端で検出した落ち込みである。溝1の西側から調査区西端にかけて比較的急勾配で落ち込んでいた。溝1の西肩と調査区西端の比高は約0.9mである。土坑もしくは、伏見城城下町造成時に基盤層を切土して造られた斜面の一部である可能性もある。この落ち込みの埋土からは、金箔瓦を含む瓦が出土した。

溝1 (図版28) 調査区西側で検出した南北方向の素掘り溝である。幅2.2～2.5mで、南北2.7m分を検出した。溝の方向は北で東に約10度振れている。深さは0.7mほどで、底面は平坦でなく、凸凹があることから、土取り穴の可能性もある。落ち込み1を埋めた土の上面から掘り込まれていた。埋土から江戸時代後期の染付、施釉陶器や棧瓦が出土した。伏見城廃城後の遺構である。

溝2 (図版28) 調査区南西部で検出した南北方向の素掘り溝である。北半は削平される。幅0.4m、南北0.7m分を検出した。深さは0.2mである。落ち込み1を埋めた土の上面から掘り込まれていた。検出長は短い、溝1と同様に北で東にわずかに振れているようである。伏見城廃城後の遺構である。

(3) 3区 (巻頭図版1・2、図版5～14・29～31、図13)

学校構内中央北側に位置する、東西18m、南北23mの長方形の北側に東西10m、南北5mの凸部、南側に東西8.3m、南北6.3m

の凸部をもつ調査区で、面積は約516㎡である。第2面の調査は、掘削深度の関係から逆T字型に調査区を設定して行った。

基本層序は、上から現代造成土、伏見城期の造成土、基盤層である。調査区南西部では、現代造成土の下で近世から近代の耕作土とみられる層を一部確認した。

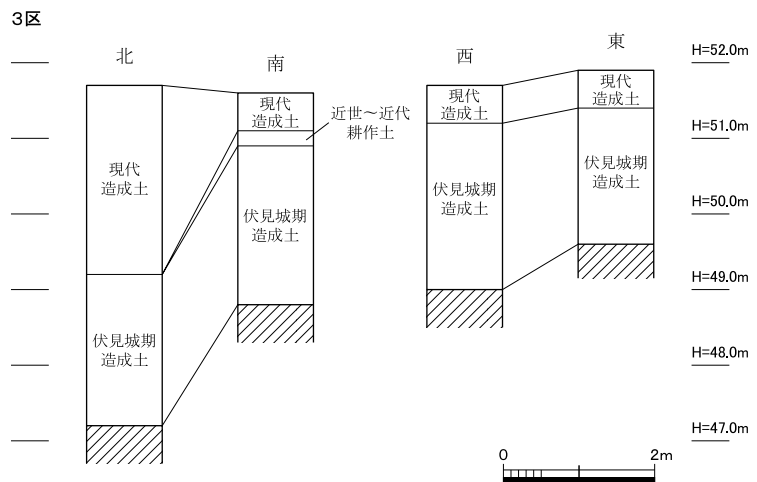


図13 3区基本層序柱状図 (1:100)

第2面 (巻頭図版1、図版5)

基盤層の標高は、調査区東南隅で49.6m、西南隅で49.0m、中央北で48.8m、中央南で47.2mであり、伏見城造成以前の旧地形は全体的に南東から北西に向かって傾斜する。

基盤層上面で土坑、溝、造成盛土を確認した。

土坑323 (図14) T字型の断ち割りトレンチの中央で検出した土坑。東西0.85m、南北1.1mの隅丸長方形を呈し、深さは0.85mである。出土遺物はなく、時期は不明である。

溝320 南北トレンチ北側で検出した東西方向の素掘り溝。幅0.95～1.3m、東西約2m分を検出した。深さは0.15～0.3mで、溝底の標高は東から西に向かって下がる。伏見城期の造成時に、排水のため設けられたとみられる³⁾。

溝321 南北トレンチ中央で検出した東西方向の素掘り溝。幅0.25～0.4m、東西約2m分を検出した。深さは0.15～0.25mで、底面に5～10cmの厚さで粘土を貼っていた。溝底の標高により東から西に向かって流れていた。伏見城期の造成時に、排水のため設けられたとみられる

造成盛土 (図版29) 基盤層の上に盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。盛土の厚さは1.8～3mである。

本調査区における造成の工程は、東壁の断面観察から以下のように復元できる。①南東から北西に傾斜する基盤層に複数の段差を設けることで、傾斜を緩やかにする。段差の高低差は10～30cm

ほどで、 $X=-117,603$ 、 $-117,608$ 、 $-117,614$ 、 $-117,618$ 付近で確認した。 $X=-117,618$ 付近の段差は、溝状に20～60cmの深さに掘り窪める。また、基盤層上面に排水のために東西溝(溝320・溝321)を掘削する。②基盤層の上面に、粘土や粘質土を10～15cmの厚さで水平に盛って平坦面を造る。③ $X=-117,618$ 付近の溝状に掘り窪めた上面に、基盤層由来の土を盛り上げて高さ約2.4mの土手状高まり(最高地点の標高50.1m)を造る。この土手状の高まりの位置は、基盤層上面の東西の高低差が最も大きい位置にあたる。④土手状高まりの内側(南東側)に、南東から北西に向かって斜めに土を入れ、埋め立てる。最終的には、土留めの役割をしていた土手状高まりも埋めて、標高50.5mほどで平坦面を作る。⑤土手状高まりの外側(北西側)に、Aを20～40cmの厚さで敷く。Aを敷いた層の上面は、多少の起伏をもたせている。⑥土手状高

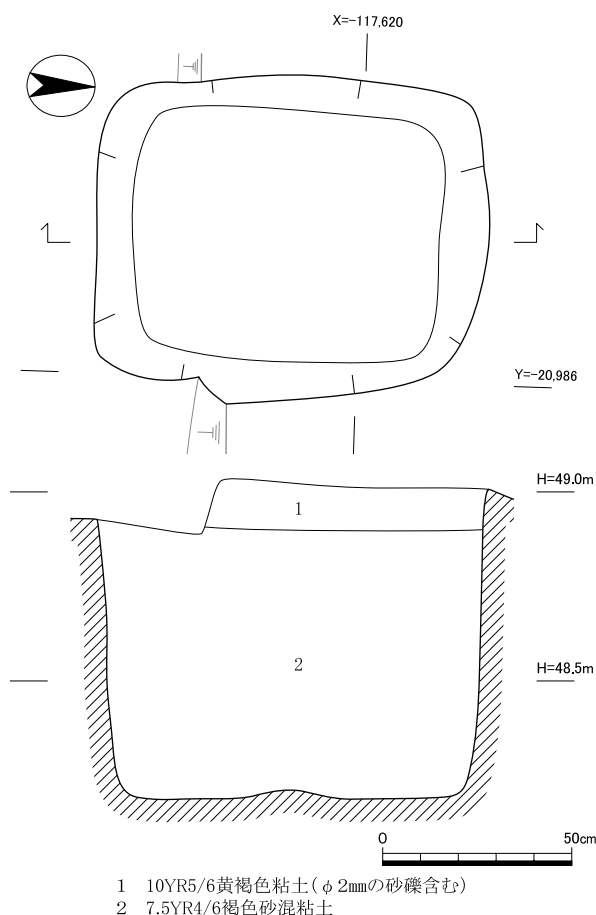


図14 3区土坑323実測図(1:20)

まりを埋めて造った平坦面から、標高の低い北西の方向へ向かって斜めに土を入れて埋め立てる。盛土の土は、1.2～1.7m幅ごとに、B～Hの土のうち2～3種類を互層状に非常に細かい単位で入っていた。こうして、標高50.5mほどの平坦面を広げていく。⑦その平坦面の上に、さらに斜めに土を入れ、標高51.0mほどの平坦面を再度造る。⑧その平坦面の外側にあたる調査区北端（X=-117,608以北）に、さらに斜めに土を入れ、より広く平坦面を造る。⑨斜めに土を入れた盛土上には、さらに水平に20～50cmほど土を盛り、仕上げる。

この造成により形成された伏見城期の遺構面の標高は、調査区南半で51.0～51.5m、X=-117,604付近から北に向かって徐々に遺構面は傾斜し、調査区北端では標高49.2mほどとなる。調査区全域で、現代の造成や攪乱がみられるものの、大きな削平は受けていないと考えられ⁴⁾、検出した遺構面は当時の屋敷地の地形をある程度反映しており、屋敷地北辺となる丹波橋通に向かって造成面の高さが低減していると推測する。

第1面（図版6・29）

塀、土坑、ピット、溝などを検出した。

塀1（図版12・30） 調査区中央で検出した東西方向の掘立柱塀。柱間は基本的に1.5m（5尺）で、7間分を検出した。柱穴の掘形は一辺0.45～0.7mの隅丸方形を呈し、深さは0.4～0.7mである。柱穴62・109以外は深さ0.6～0.7mと残存状態が良好であった。すべての柱穴で柱の痕跡を確認でき、いずれも15cmほどの円形であった。

塀2（図版12・30・31） 調査区西側で検出した南北方向の掘立柱塀。柱間1.5m（5尺）で、5間分を検出した。柱筋は、北で東に5度振れている。柱穴の掘形は直径0.5～0.6mの不正円形を呈し、深さはいずれも0.7mほどと残存状態が良好であった。柱穴122・232で柱痕跡を確認しており、直径15～20cmの円形である。塀2の北端の柱穴232と土坑100は、重複関係から柱穴232は土坑100より古い。

土坑10（図版13・14） 調査区中央で検出した土坑。東西2m以上、南北2.4mの円形を呈し、深さは0.35mである。現代の暗渠が、土坑を十字に貫く。土坑は、砂質土と中砂とを互層にして丁寧に埋め戻されていた。土坑の底面北部では、土師器皿がまとまって出土した。伏見城期の土師器、染付、金箔瓦、貝類が出土した。

土坑23（図版14・31） 調査区南西部で検出した土坑。東西1.7m、南北1.15mの楕円形を呈し、深さは1.2mである。レンズ状に埋め戻されていた。伏見城期の土師器、施釉陶器、金箔瓦や瓦、鉄さい、貝類が出土した。

土坑37（図版13・31） 調査区中央で検出した土坑。東西6.6m、南北3.45mの東西に長い不正円形を呈し、深さは0.3～0.4mである。埋土上層は、炭化物や焼土を大量に含んでいた。土坑西端に階段状を呈す4段の段差を確認したが、機能や性格は不明である。伏見城期の土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、金箔瓦や瓦、貝類が出土した。

土坑76（図版14） 調査区中央東端で検出した土坑。東西2m、南北2.2mの不定形を呈し、深さは0.9mである。厚さ10～15cmほどの細かい単位でレンズ状に埋め戻されていた。埋土上層は炭

化物や焼土を大量に含んでいた。図版14-11層からは、3枚ずつ重なった状態の宋銭が2セット出土した。この2セットの宋銭は南北に並んでおり、南側は上から皇宗通寶（裏向き）、元豊通寶（表向き）、不明（裏向き）、北側は上から熙寧元寶（表向き）、皇宗通寶（裏向き）、元豊通寶（表向き）であった。南側の3枚目は摩滅により不明であるが、セット関係から熙寧元寶である可能性が高い。埋土からは銭貨のほか、伏見城期の土師器、施釉陶器、染付、金箔瓦や瓦、貝類が出土した。

土坑77（図版14・31） 調査区中央東端で検出した土坑。東西1.8m、南北0.9mの隅丸長方形を呈し、深さは0.25mである。土坑76と重複しており、重複関係から土坑76が古く、土坑77が新しい。伏見城期の土師器、施釉陶器、瓦、貝類が出土した。

土坑84 調査区中央北側で検出した土坑。東西0.7m、南北0.8mの円形を呈し、深さは0.5mである。土坑10と重複しており、断面観察から土坑84が新しく、土坑10が古い。伏見城期の瓦が出土した。

土坑100（図版14・31） 調査区中央西側で検出した土坑。東西2.2m以上、南北2.4mの不正円形を呈し、深さ1.15mである。レンズ状に埋め戻されていた。埋土上層は炭化物や焼土を大量に含んでいた。伏見城期の土師器、金箔瓦や瓦、貝類が出土した。土坑76・77、土坑37・215、土坑100は塀1北側の南北2m（X=-117,612～-117,614）の間に並んで存在する。

土坑130 調査区中央西側で検出した土坑。東西1.1m以上、南北1.1mの不正円形を呈し、深さ0.6mである。土坑23と重複しており、平面の検出状況から土坑23が新しく、土坑130が古い。土坑の東半は現代の攪乱により削平されていた。伏見城期の金箔瓦が出土した。

土坑133 調査区中央南側で検出したピット土坑。東西0.8m、南北0.7mの円形を呈し、深さは0.8mである。伏見城期の瓦が出土した。

土坑215 調査区中央で検出した土坑。幅1.15m、長さ2mの長方形を呈し、深さは0.7mである。土坑37と重複しているが、平面の検出状況から土坑215が古く、土坑37が新しい。土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、瓦、金箔瓦や貝類が出土した。

ピット228 調査区中央で検出したピット。南半を後世の落ち込みに削平されており、北半のみ検出した。東西0.4m、南北0.25m以上の円形を呈し、深さは0.2mである。伏見城期の土師器、金箔瓦が出土した。

ピット50 調査区中央南側で検出したピット。東西0.3m、南北0.45mの南北にやや長い楕円形を呈し、深さは0.5mである。伏見城期の瓦が出土した。

ピット56 調査区中央南側で検出したピット。東西0.3m、南北0.35mの円形を呈し、深さは0.5mである。伏見城期の土師器が出土した。

溝38 調査区中央で検出した素掘り溝。幅0.1mで、ゆるやかにカーブを描いており、長さ2m分を検出した。深さは0.1mほどである。伏見城期の金箔瓦が出土した。

土坑48（図版31） 調査区中央南側で検出した土坑。東西1.9m、南北1.7mの不正円形を呈し、深さは0.5mである。土坑の底面中央には、施釉陶器の蓋が伏せて埋置されていた。埋土から江戸時代後期の施釉陶器、棧瓦などが出土した。伏見城廃城後の遺構である。

(4) 4区 (図版15～17・20・32～34、図15)

学校構内南西隅に位置する、東西8m、南北19mの調査区で、面積152㎡である。

基本層序は、上から現代造成土、近世から近代の耕作土、伏見城期の造成土、基盤層である。基盤層上面(第2面)の調査は、調査区東端に幅2mの断ち割りトレンチを設けて行った。なお、調査区中央には文化財保護課の試掘トレンチが横断している。

第2面 (図版15・32)

基盤層の標高は、調査区東北隅で50.6m、調査区南西隅で49.9mであり、伏見城造成以前の旧地形は北東から南西に向かって緩やかに傾斜する。

伏見城の城下町造成に伴う溝と造成盛土を確認した。

溝429 調査区北側で検出した東西方向の素掘り溝である。幅約1.5mで東西1.8m分を検出した。深さは0.3mである。伏見城期の造成初期段階に、排水のため設けられたとみられる。

造成盛土 (図版34) 基盤層の上に盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。盛土の厚さは0.5～0.9mである。

本調査区における造成の工程は、土層の状況から、以下のように復元できる。①基盤層に段差を設けて、基盤層の傾斜を緩やかにする。段差の高低差は10～15cmほどで、試掘トレンチ南壁のY = -21,021、-21,022、-21,024付近で確認した。基盤層上面には、排水のために溝429を掘削す

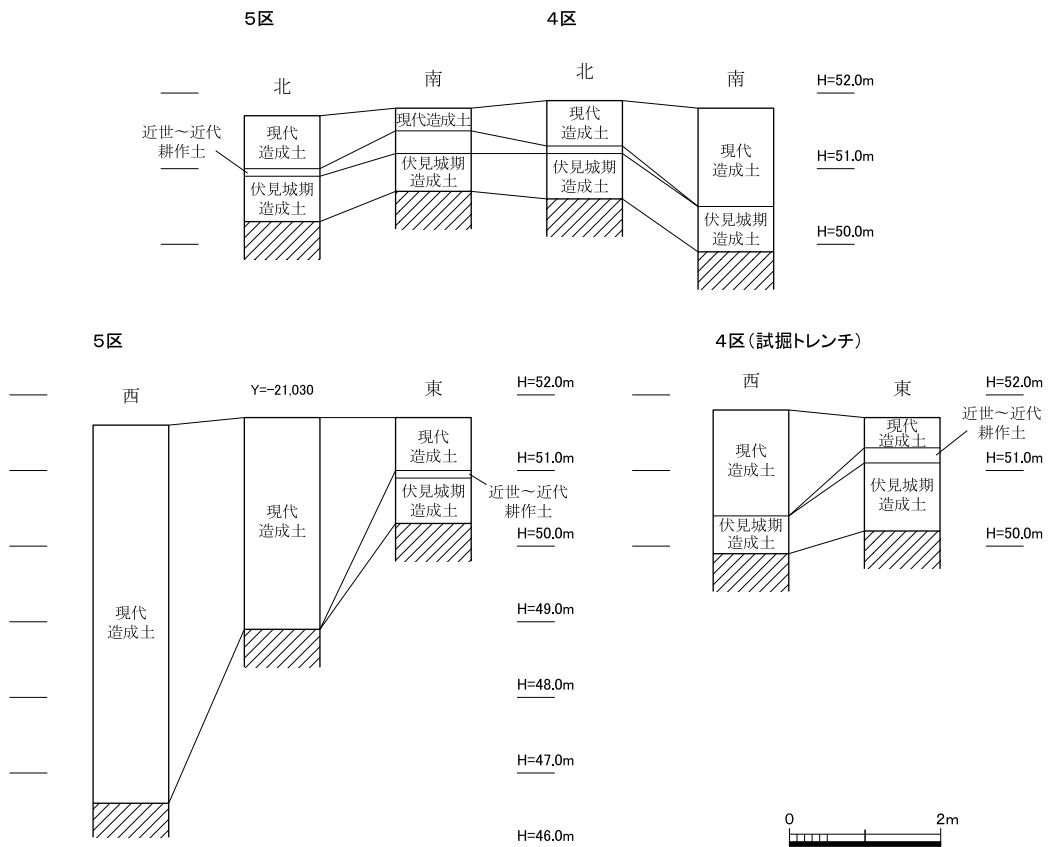


図15 4・5区基本層序柱状図 (1:100)

る。②基盤層の上面に、基盤層由来の赤褐色粘質土や褐色粘土等を厚さ10～20cmで水平に盛って平坦面を造る。③その平坦面の上に、細砂や礫の混じったAを部分的に敷く。④標高の高い北東から標高の低い南西に向かって斜めに土を入れる。なお、4区では、北東から南西に向かって造成土を流し入れた単位が円弧状に平面で確認できた。斜め盛土はB・C・Gの土に、DやEを筋状に入っていた。

この造成により形成された伏見城期の遺構面の標高は、調査区中央東で51.1m、北東で51.2m、中央西で50.4m、南東で50.5mであり、基盤層と同様に北東が高く南西がやや低い。

第1面（図版16・32）

塀3や土坑、ピットなどを検出した。

塀3（図版20・34） 調査区西側で検出した4・5区を縦貫する南北方向の掘立柱塀。柱間は5.8mで、4間分を検出した。柱筋は北で東に約5度振れる。柱穴の掘形は0.8～1.1mの不正円形で、深さは深いもので0.7mである。4区で検出した柱穴3基では、掘形底面で礎板石を検出した。この礎板石の大きさは、柱穴400が東西25cm、南北45cm、厚さ15cm、柱穴407が東西40cm、南北35cm、厚さ15cm、柱穴418が東西40cm、南北40cm、厚さ10cmである。柱穴407・418の検出状況から、柱には約20cm四方の角柱を用いたとみられる。柱穴の底面の標高は50.34～50.50mで、柱穴400と5区柱穴507の間の柱穴は、削平された可能性が高い。伏見城期の遺構とみられる。

土坑415（図版34） 調査区南側で検出した土坑。東西0.6m以上、南北2.1m以上の隅丸方形を呈するが、土坑東半は現代の攪乱により削平されていた。深さは0.4mである。江戸時代中期の香炉が出土した。伏見城廃城後の遺構である。

ピット423 調査区南部で検出したピット。直径0.5mの円形を呈し、深さは0.1mである。江戸時代中期の染付が出土した。伏見城廃城後の遺構である。

（5）5区（図版15・16・18～20・35、図15）

4区の北側に位置する、東西19m、南北9mの調査区で、面積171㎡である。基本層序は、上から現代造成土、近世から近代の耕作土、伏見城期の造成土、基盤層である。

第2面（図版15・35）

基盤層の標高は、調査区南東隅で50.7mから北東隅で50.3m、調査区中央で48.9m、調査区西端で46.6mであり、調査区の東端と西端で4mほどの標高差がある。詳細は後述するが、調査区西端の基盤層は伏見城期の造成時に切土され、急勾配の斜面地に造り替えられたと推測できることから、本来の地形はもう少し緩やかな傾斜であったとみられる。

土坑や溝、切土斜面、造成盛土を確認した。

土坑524（図16） 調査区中央西端で検出した土坑。南北0.95m、東西0.65mの隅丸方形を呈し、深さ約0.3mである。埋土下層にはとくに炭化物をよく含んでおり、土坑の壁面には被熱した痕跡が認められた。炭化物の自然科学分析（付章参照）の結果、樹種はマツ、暦年代は7世紀後半から8世紀後半を示すことが明らかとなった。

溝533 調査区中央で検出した南北方向の素掘り溝。幅0.9mで、南北約5m分を確認した。深さ0.4mである。調査区の北壁では確認できなかったため、 $X=-117,674$ 付近で途切れると考えられる。伏見城期の造成に伴う溝とみられる。

切土斜面500 (図版35) 調査区西端で確認した斜面である。調査区西半 ($Y=-21,030$ 以西) では造成土が確認できず、基盤層が削られた斜面地となっていた。調査区内の基盤層は $Y=-21,031.7$ ～ $-21,030$ より西側で約30度とやや緩やかな勾配で傾斜するが、 $Y=-21,033$ ～ $-21,031.7$ より西側では約45度と急勾配の傾斜となる。この斜面の下端西側は平坦面となっており、この面が調査地以西の遺構面とみられる。この平坦面の標高は46.6mで、本調査区東半の伏見城期の遺構面とは

4.3～4.6mの標高差がある。またこの斜面には、犬走り状の平坦面を2段設けていた。下方の面は斜面下端から0.3～0.4m上、上方の面は1.1m上にあり、幅はいずれも0.25mである。切土斜面の上端は、北で東に約10度振れていることから、調査区東半の屋敷地区画は正方位でなく東にやや振れていたとみられる。この斜面を埋めた土からは、江戸時代後期の染付、土師器、焼締陶器、施釉陶器、棧瓦を含む瓦が出土しており、江戸時代後期に埋め立てられたとみられる。

造成盛土 本調査区東半では、基盤層の上に厚さ0.5～0.6mの盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。

本調査区東半における造成の工程は、北壁の断面観察から、以下のように復元できる。①基盤層に段差を設けて、基盤層の傾斜を緩やかにする。段差の高低差は40cmほどで、 $Y=-21,025$ 付近で確認した。基盤層上面には、排水のために溝533を掘削する。②段差の東側に30cmほどの土手状高まりを造る。③高まりの東側に粘質土や砂を水平に厚さ0.2mほど盛って、平坦面を造る。④土手状高まりの西側に土を盛り、平坦面を広げる。⑤標高の高い北東から低い南西に向かって、斜めに土を入れる。5区でも、北東から南西に向かって造成土を流し入れた単位が円弧状に平面で確認できた。斜め盛土は、BやFの土にDを筋状に入れていた。

この造成により形成された伏見城期の遺構面の標高は、調査区北で50.9mから調査区南で51.2mである。

第1面 (図版16・35)

堀3の柱穴や土坑を検出した。

柱穴507 調査区東側北端で検出した柱穴。4区から続く南北方向の掘立柱堀3を構成する柱穴で、堀3については上述の通りである。柱穴の南半のみ検出しており、東西0.35m以上、南北

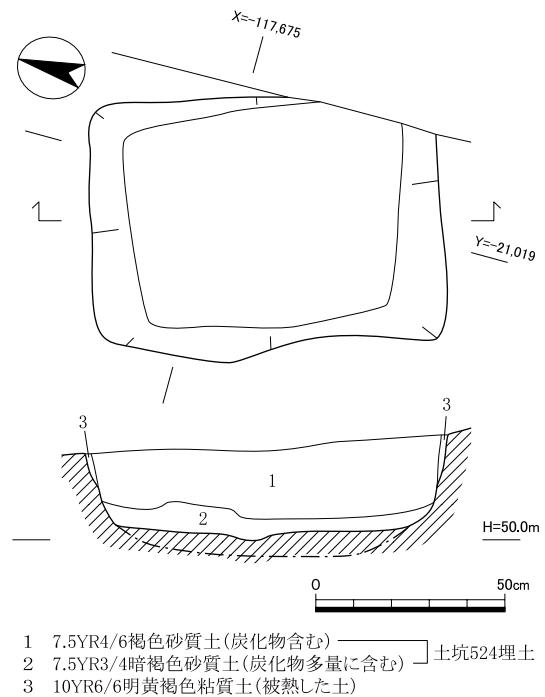


図16 5区土坑524実測図 (1:20)

0.85 mで、深さ0.2 mであった。

土坑514 調査区東側で検出した溝状の土坑。幅0.8～1.0 mで東西2.9 m分を検出した。深さは0.3 mである。江戸時代後期の施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦質土器、貝類が出土した。伏見城廃城後の遺構である。

(6) 6区 (巻頭図版3、図版21・22・36、図17)

3区の北東部から東に延びる調査区で、南北3 m、東西18 mの長方形の北側に東西10 m、南北5 mの凸部をもつ。面積は104 m²である。

基本層序は、上から現代盛土、伏見城期の造成土、基盤層である。

第2面 (図版21・36)

基盤層の標高は、調査区南東隅で49.6 m、北西隅48.0 mであり、伏見城造成以前の旧地形は南東から北西に向かって傾斜する。

溝、造成盛土を確認した。

溝600 調査区東端で検出した南北溝。南壁断面でのみ確認した。溝の幅は約0.5 mで、南北約0.2 m分を検出した。深さは0.4 mで、底面に0.15 mの厚さの粘土を敷く。実際に溝として機能した深さは0.25 mほどである。伏見城期の造成に伴う溝とみられる。

造成盛土 (図版36) 本調査区では、基盤層の上に盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。盛土の厚さは1.3～2.3 mである。

本調査区における造成の工程は、南壁の断面観察から、以下のように復元できる。①基盤層に段差を設けて、基盤層の傾斜を緩やかにする。段差の高低差は10 cmほどで、Y = -20,971付近で確認した。基盤層上面には、排水のために溝600を掘削する。②基盤層の上面に、基盤層由来の赤褐色粘質土や粘土等を厚さ10～15 cmで水平に盛って平坦面を造る。③その平坦面の上に、細砂や礫の混じったAを厚さ50～70 cm敷く。Aを敷いた層の上面は、多少の起伏をもたせている。④標高の高い南東から標高の低い北西に向かって、斜めに土を流し入れ、標高49.4～50.4 mほどの平坦地を造る。斜め盛土は、約1 m幅ごとにB・C・Fの土にDを筋状に入れていた。⑤その平坦地の上

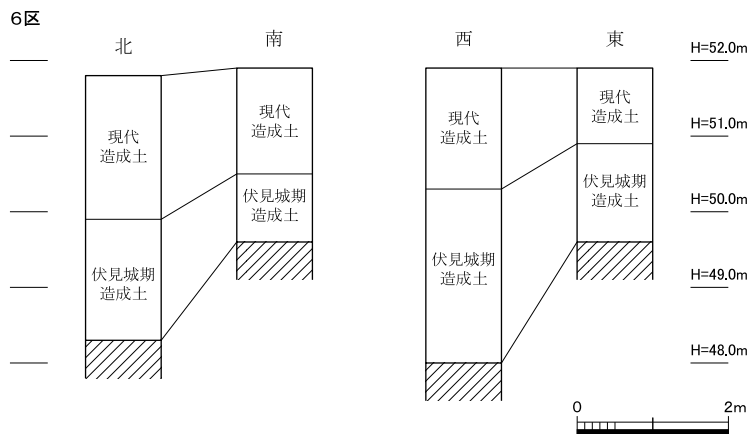


図17 6区基本層序柱状図 (1:100)

に、さらに斜めに土を入れる。約1.2～1.4 m幅ごとにC・D～F、Hの土を互層に入れていた。また調査区東側では、④の斜め造成を掘り込んで、再度土を入れ直す様子 (Y = -20,966付近) もみられた。

造成土中から、室町時代後期の一石五輪塔が出土した。

この造成により形成された伏

見城期の遺構面の標高は、調査区南端50.8m、北端49.9mで、南から北に向けて緩やかに傾斜する。

(7) 7区 (図版23・37、図18)

学校構内の北辺中央に位置する、東西10m、南北約2mの長方形の南西端に東西3m、南北4mの凸部をもつL字形の調査区で、面積は約30㎡である。

基本層序は、上から現代造成土、伏見城期の造成土、基盤層である。基盤層は調査区中央の断ち割りトレンチと調査区西側で確認した。調査区東端では、調査区が狭小なために掘削を一定深度で止めたことから、基盤層を確認できなかった。

第2面 (図版23・37)

基盤層の標高は、調査区中央で46.0m、調査区西端で45.2mであった。調査区東端では標高45.8mまで掘削したが、基盤層を確認できなかった。伏見城造成以前の旧地形は、調査区中央が一番高く、南に緩やかに落ち込む谷が存在したとみられる。

伏見城の城下町造成土中から石を3石と造成盛土を確認した。

造成盛土 基盤層の上に盛土をして、屋敷地の平坦面を造り出した状況を、調査区の壁面観察により確認した。盛土の厚さは0.8～1.4mである。

本調査区における造成の工程は、以下のように復元できる。①基盤層に段差を設けて、基盤層の傾斜を緩やかにする。段差の高低差は10cmほどで、X = -117,597付近で確認した。②基盤層の標高が低い調査区北側に、基盤層由来の土を厚さ10～20cm水平に盛って平坦面地を造る。③Aを20～30cmの厚さで部分的に敷く。④標高の高い北から、南に向かって土を斜めに入れ、標高45.6～45.9mで平坦面を造る。斜め盛土は、Fの土を用いる。⑤平坦面の上にAを20～30cmの厚さで部分的に敷く。⑥再度北から南に向かって土を斜めに入れていた。斜め盛土は、B・C・Eの土を互層状に入れていた。

この造成により形成された伏見城期の遺構面の標高は、調査区東端で46.7m、西端で46.4m、南端で46.4mと、東から南と西に向かって緩やかに傾斜する。

また造成土中から、石を3石検出した。石1は、調査区東端で検出した。石の東側は調査区の壁の一部入り込んでおり、全体を確認できなかった。石の大きさは、東西0.5m以上、南北0.8m、厚

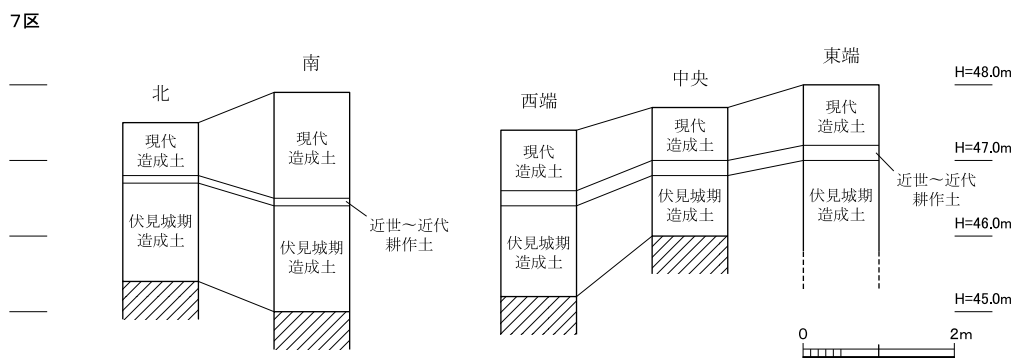


図18 7区基本層序柱状図 (1:100)

さ約0.4mである。石2は石1の下、約15cmで検出した。石1と石2は接していない。調査区が狭小なため、石2の上半しか確認できなかったが、石の大きさは東西30cm以上、南北40cm以上、厚さ30cm以上である。石3は調査区西端で検出した。基盤層の直上に位置していた。石の西側は調査区の壁に一部入り込んでおり、全体を確認できなかった。石の大きさは、東西60cm以上、南北95cm、厚さ55cmである。これらの石は、石を据えた掘形や抜き取り穴の痕跡は存在しなかったため、造成の際に埋没した石と考えられる。

註

- 1) 周山中学校の調査(李 銀眞『周山廃寺』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年)でも、現代造成土2に非常に似た盛土造成を確認しており、戦後すぐに行われた造成とされる。
- 2) A～Hの土質は以下の通りである。
 - A：10YR8/8黄橙色シルトブロック+赤褐色粘質土ブロック
 - B：5YR4/8赤褐色粘質土
 - C：5YR4/8赤褐色粘質土〔B〕に10YR6/8明黄褐色シルトブロック含む
 - D：10YR6/8明黄褐色シルト～中砂
 - E：10YR6/4にぶい黄褐色砂礫
 - F：5YR4/8赤褐色粘質土〔B〕に砂礫含む
 - G：5YR4/8赤褐色粘質土に10YR6/8明黄褐色シルトブロック含む〔C〕に砂礫含む
 - H：10YR6/8明黄褐色シルト～中砂〔D〕に砂礫含む
- 3) 溝の時期は不明であるが、伏見城期以前の遺構が周辺調査でもほとんど確認されていないこと、3区溝320・321、4区溝429の埋土が非常に類似していたことから、これらの溝は伏見城期の造成に伴う溝と考えた。
- 4) 第1面で検出した塀などの柱穴の掘形埋土は、深さ60～70cm残存していることから、遺構面の残存状態は良好と考えられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

今回の調査では、遺物整理用コンテナ33箱分の遺物が出土した。内訳は、土器・陶磁器類と瓦類31箱、石製品1箱、金属製品1箱である。

3区で検出した伏見城期から伏見城廃城以降の遺構から出土した遺物が大半を占める。伏見城期の造成土からはほとんど遺物は出土しなかった。その他に、古墳時代や平安時代の遺物も数点出土した。以下、主要遺構からの出土遺物を中心に概要を記す。

(2) 土器類 (図版38、図19～21)

古墳時代から平安時代の遺物 (図19、図版38)

1は須恵器高杯の杯部。脚部は欠損しているが、外面に透かし孔の切り込み線が残存する。底部内面に重ね焼きの際の粘土の痕跡がわずかに残る。3区土坑37から出土した。

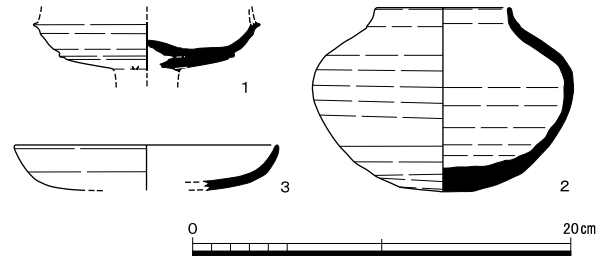


図19 土器実測図1 (1:4)

2は須恵器壺。口径7.0cm、器高9.7cm。口縁は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。体部内面から外面上半まで回転ナデ、外面体部から底部にかけて回転ケズリを施す。4区の伏見城造成土中から出土した。

3は土師器皿。口径は14.0cmに復元できる。器高は2.4cm。摩滅のため、調整は不明瞭である。3区溝320から出土した。

3は土師器皿。口径は14.0cmに復元できる。器高は2.4cm。摩滅のため、調整は不明瞭である。3区溝320から出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器		須恵器2点		
平安時代	土師器		土師器1点		
伏見城期	土師器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦類、石製品、金属製品、貝類		土師器18点、施釉陶器3点、焼締陶器2点、染付2点、軒丸瓦11点、軒平瓦8点、瓦類15点、金箔瓦19点、石製品1点、銭貨7点		
伏見城廃城後	施釉陶器、染付、磁器、金属製品、銭貨		施釉陶器4点、染付5点、磁器1点、金属製品2点、銭貨1点		
合計		42箱	109点 (9箱)	1箱	32箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

伏見城期の遺物 (図20、図版38)

4～12は土師器皿。外面体部から底部オサエ、外面口縁から内面体部にかけてヨコナデ、内面底部ナデを施す。12は内外面ともに煤が付着する。4～9は口径10.2～10.7cm、器高1.9～2.6cmの皿Sb。10～12は口径12.0～13.8cm、器高2.2～2.5cmの皿S。6・10は口縁部に油煙痕が付着しており、灯明皿とみられる。13・14は染付の皿。肥前系。13は底部内面に草花文を描く。14は高台に離れ砂が付着する。4～14は3区土坑10から出土した。

15は土師器皿S。口径13.8cm、器高2.3cm。口縁部に油煙痕が付着しており、灯明皿とみられる。3区土坑37から出土した。

16・17は土師器皿Sb。16は口径10.6cm、器高2.8cm、17は口径10.7cm、器高2.5cm。口縁部に油

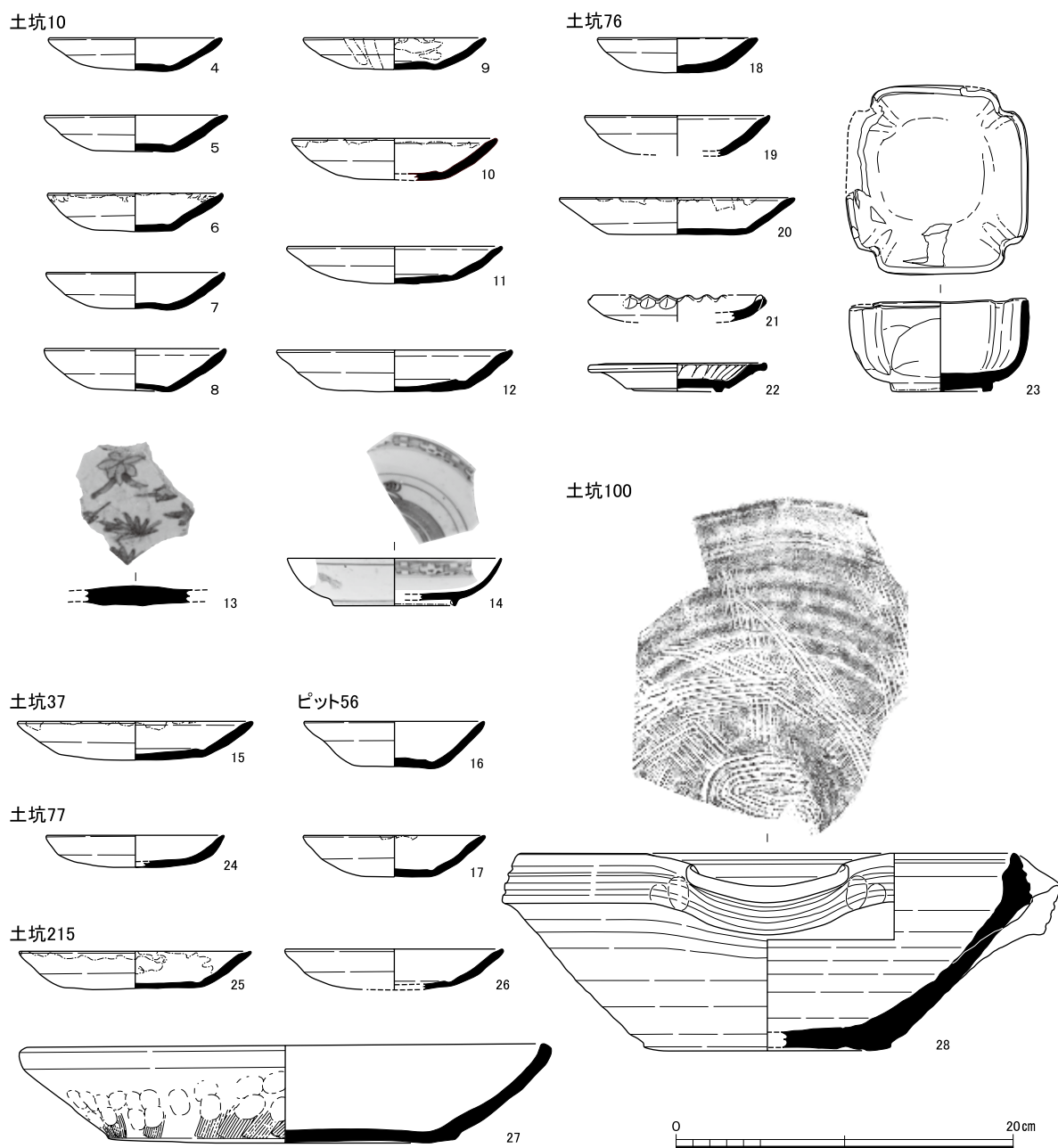


図20 土器実測図2 (1:4)

煙痕が付着しており、灯明皿とみられる。16・17は3区ピット56から出土した。

18・19は土師器皿Sb。18は口径9.4cm、器高2.1cm、19は口径10.9cm。20は土師器皿S。口径13.9cm、器高2.2cm。21は褐釉陶器ヒダ皿の口縁部。瀬戸美濃産。胎土はにぶい褐色、釉は褐色を呈する。22は灰釉折縁皿。瀬戸美濃産。口径10.3cm、器高1.7cm。体部内面にソギを施す。底部は削り出し高台。底部内外面に輪トチの痕跡が残る。胎土は灰白色、釉はオリーブ黄色を呈する。23は灰釉角向付。瀬戸美濃産。ロクロ成形後、型打ちして入隅四方形に成形する。削り出し高台、底部は露胎。胎土は灰白色、釉は灰オリーブ色を呈する。18～23は3区土坑76から出土した。なお、23には土坑76と土坑77、土坑215から出土した破片がある。

24は土師器皿Sb。口径10.5cm、器高1.9cm。3区土坑77から出土した。

25・26は土師器皿S。25は口径13.7cm、器高2.3cm。口縁部に油煙痕が付着しており、灯明皿とみられる。26は口径12.9cm、器高2.4cm。27は焼締陶器の鉢。底部内外面はナデ、体部内面から口縁部外面はヨコナデ、体部外面は上半がナデのちオサエ、下半がハケメのちオサエを施す。25～27は3区土坑215から出土した。

28は焼締陶器の播鉢。備前産。口縁は帯状に幅広く、外面に2本ないしは3本の沈線が入る。口縁部に片口がつく。3区土坑100から出土した。

江戸時代中後期の遺物 (図21)

29は染付椀の蓋。外面に5匹、内面中央に1匹の亀が描かれる。30は鉄釉陶器の徳利。京・信楽系か。底径9.9cm。外面に文字をイッチン描きしたとみられる。底部外面に離れ砂が付着する。29・30は2区溝1から出土した。

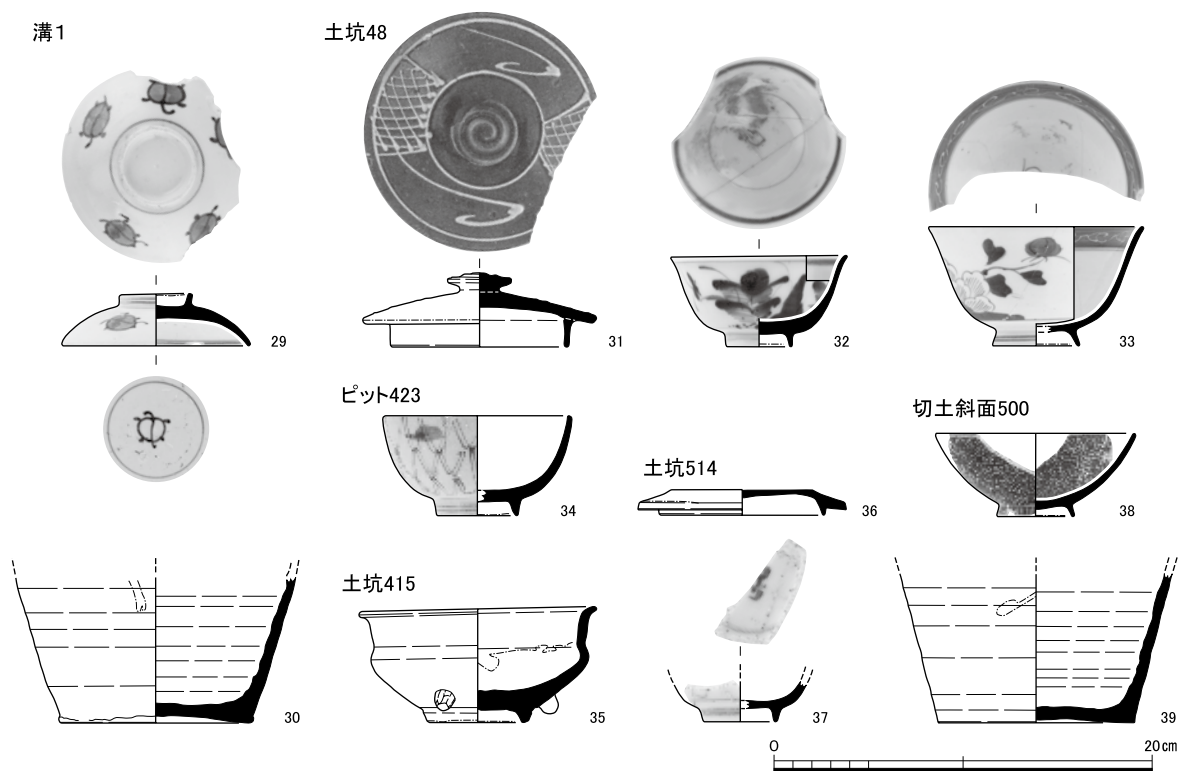


図21 土器実測図3 (1:4)

31は施釉陶器の蓋。京・信楽系。口径9.2cm。胎土はにぶい褐色、色調は暗オリーブ色。外面に格子目や蕨手状の文様をイッチン描きする。33は染付椀。肥前系。外面に草木が描かれる。32は染付椀。瀬戸美濃産。口径9.3cm、器高4.9cm。外面に草花や蝶の文様が描かれる。31～33は3区土坑48から出土した。

34は染付椀。肥前系。外面に二重の波状文様を3段分描く。4区ピット423から出土した。

35は青磁の三足香炉。完形である。口径12.3cm、器高6.1cm。胎土は灰白色、釉は明オリーブ灰色を呈する。高台は削り出し、離れ砂が付着する。4区土坑415から出土した。

36は施釉陶器の重ね鉢の蓋。京・信楽系。口径8.6cm、器高1.4cm。胎土は灰白色、釉は灰黄色を呈する。37は染付椀。縦方向に2本、横方向に1本の焼き継ぎの痕跡がみられる。36・37は5区土坑514から出土した。

38は染付椀。肥前系。39は鉄釉陶器の徳利。京・信楽系か。底径10.3cm。外面に文字をイッチン描きしたとみられる。38・39は5区切土斜面500の埋め立て土から出土した。

(3) 瓦類 (巻頭図版4、図版24～26・39・40、図22)

金箔瓦 (巻頭図版4、図版24)

金箔を施した瓦が19点出土した。

金瓦1は菊文の軒丸瓦。8弁二重で周縁はない。3区土坑37から出土した。

金瓦2は軒丸瓦の周縁のみ。文様は不明である。3区土坑100から出土した。

金瓦3は唐草文の軒平瓦。中心飾りは三葉。凸部に金箔が残る。3区土坑37から出土した。

金瓦4～6は円形の飾り瓦。金瓦4は金瓦5と似た花文を配す。金瓦5は花文を配す。金瓦6は桐文を配す。金瓦4は3区土坑100、金瓦5は3区土坑76、金瓦6は5区耕作土から出土した。

金瓦7～16は方形飾り瓦。金瓦7は¹⁾刺花菱文を配す。釘穴がある。金瓦8は花文、金瓦9・10は巴文を配す。金瓦10は小片であるが、巴文とみられる。金瓦11～14は花文を配しており、金瓦11は金瓦12と同一文様とみられる。この文様は伏見城下で出土事例がない。金瓦13は桃山高校の発掘調査(図1-調査8)で出土した角花文の方形飾り瓦と同一文様とみられる。金瓦14は菊文か。金瓦15・16は全体像は明らかでないが、後述の飾り瓦(瓦26・27)と同一文様とみられる。金瓦7は2区近世造成土、金瓦8・10は3区土坑23、金瓦9は7区現代盛土、金瓦11は3区土坑215、金瓦12・14は3区土坑76、金瓦13は3区溝38、金瓦15は3区土坑130、金瓦16は3区土坑100から出土した。

金瓦17は飾り瓦。文様や大きさ等は不明である。3区ピット228から出土した。

金瓦18は鯰瓦とみられる。3区土坑23から出土した。

金瓦19は熨斗瓦。青海波とみられる。一面のみ金箔が残る。3区土坑37から出土した。

軒丸瓦 (図版25・39)

15点出土した。珠文をもつ巴文10点、菊文1点、巴文をもつもの1点、珠文をもつもの1点、文様不明2点である。残存状態の良好な11点を図化した。

瓦1～10は珠文をもつ巴文。瓦1は右巻き3巴文。瓦当部は完存する。頭・尾ともに離れる。珠点13。軟質。瓦2は右巻き3巴文。丸瓦の接合した上半のみ残存する。巴文の頭は離れる。瓦3は右巻き巴文。瓦5は右巻き巴文。珠点が小さい。瓦6は右巻き3巴文。巴文の頭は離れる。瓦7は右巻き巴文。瓦8は右巻き巴文。丸瓦部は残存しないが、瓦当裏面に丸瓦接合のためのカキヤブリがみられる。瓦9は右巻き巴文。瓦10は右巻き3巴文。巴文の頭は離れ、尾はつながり、圏線となる。周縁の立ち上がりが高い。瓦1は3区土坑215、瓦2は7区現代の造成土、瓦3・6～8は3区土坑37、瓦4・9は3区土坑76、瓦5は2区近世造成土、瓦10は3区現代攪乱から出土した。

瓦11は8弁二重の菊文。周縁はない。瓦当裏面には丸瓦を接合した痕跡が残る。3区土坑84から出土した。

軒平瓦（図版25・39）

12点出土した。唐草文11点、文様不明1点である。残存状態の良好な8点を図化した。

瓦12～19はすべて唐草文。瓦12の中心飾りは中央の子葉の先端に3つの珠点を配す。瓦13の中心飾りは三子葉の中心に珠点を配す。瓦14～19は唐草文のみ残存する。瓦12は3区溝236、瓦13は7区現代の造成土、瓦15・18は3区土坑37、瓦16は4区現代攪乱、瓦17・19は2区溝1、瓦14は3区土坑100から出土した。

飾り瓦（図版26・39・40）

方形飾り瓦12点、円形飾り瓦3点、熨斗瓦1点、輪違瓦2点、獅子口瓦の脚部2点が出土した。残存状態の良好な13点を図化した。

瓦20～27は方形飾り瓦。瓦20～24は巴文を配す。全体のわかる資料は今回出土していないが、これまでの出土事例から、幅約15cm、長さ約18cm、厚さ1.2～1.8cmの長方形を呈し、四隅に釘穴を穿つとみられる。呉竹総合支援学校1次調査（図1－調査1）や、調査地東隣（図1－調査6）で同一文様の出土事例がある。瓦20は3区土坑34、瓦21・22は3区土坑76、瓦23は3区土坑100、瓦24は2区溝1から出土した。この他に、同一文様の方形飾り瓦が4点ある。

瓦25は格子文を配す。伏見城下では出土事例が未だないが、大坂城で出土する井桁の方形飾り瓦²⁾に類似している。1区現代攪乱から出土した。

瓦26・27は伏見城下では出土事例がなく、文様の全体像は明らかでない。今回出土した金箔瓦（金瓦15・16）とよく似る。瓦26は3区土坑37、瓦27は3区ピット133から出土した。

瓦28は円形の大型飾り瓦で、文様は判然としないが桐文の花部分か。5区耕作土から出土した。

瓦29は熨斗瓦。青海波とみられる。幅14.0cm、長さ16.1cm。3区土坑130から出土した。

瓦30・31は輪違瓦。瓦30は長さ13.2cm。凹面は摩滅のため不明瞭であるが、わずかに布目が残る。縁はケズリを施す。瓦31は長さ14.1cm。凹面に鉄線切りの痕跡が残る。縁と縁の内面を面取りする。瓦30は3区ピット50から、瓦31は3区第1面検出時に出土した。

瓦32は獅子口の脚部である。裏面は製作時に粘土を削った痕跡が明瞭に残る。3区土坑100から出土した。

丸瓦 (図22)

瓦33・34は丸瓦。瓦33は幅16.3cm。凹面には布目、吊り紐の痕跡が残る。両側縁と両側縁の内面を面取りする。玉縁部には縄タタキ、体部にはヘラ状道具による圧痕がある。凸面は縦方向のナデを施す。2区溝1から出土した。瓦34は幅13.4cm。凹面には鉄線切り、布目の痕跡が残る。両側縁と両側縁の内面を面取りした後、ナデを施す。凸面は縦方向のナデを施す。3区土坑37から出土した。

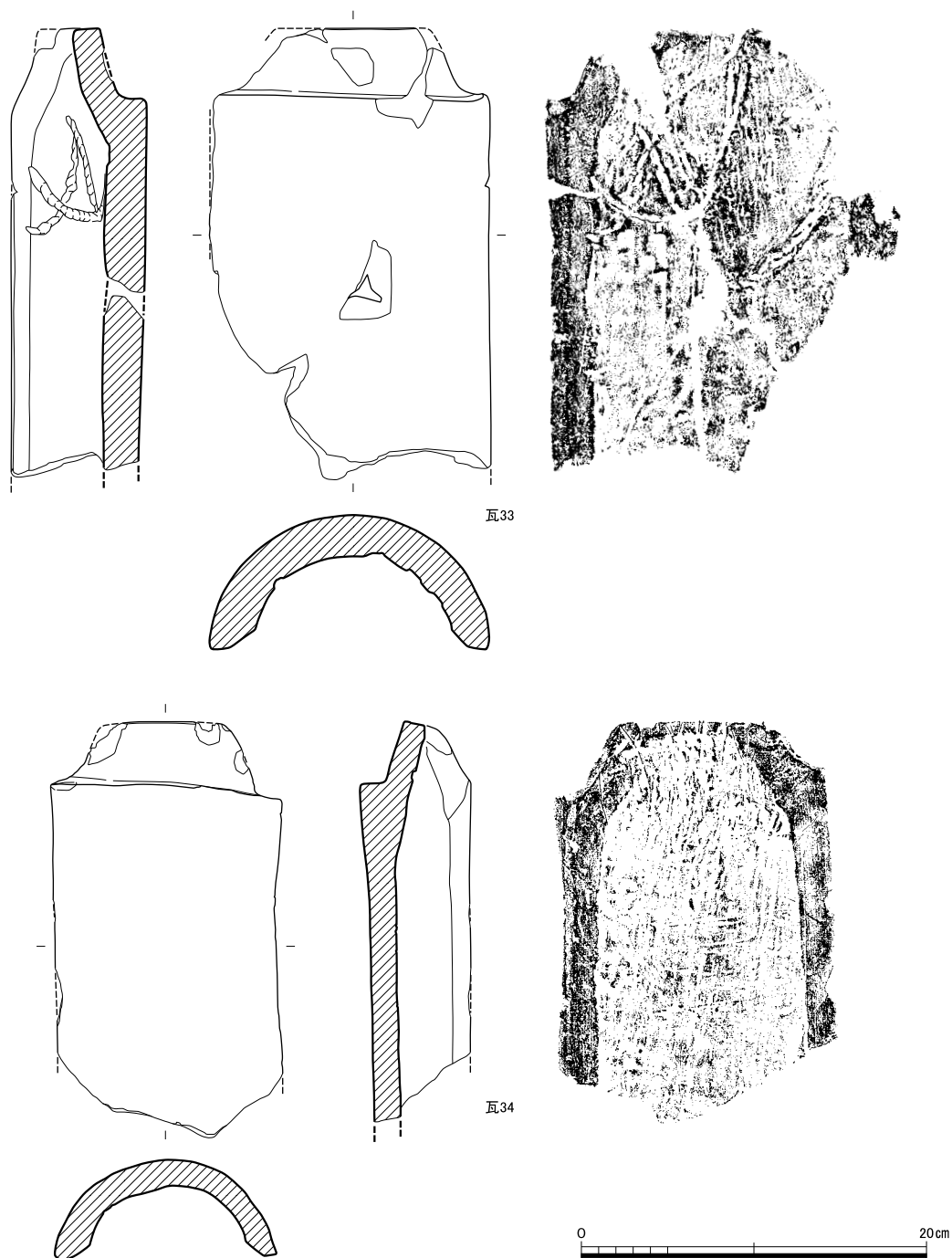


図22 丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

(4) 銭貨 (図23)

銭1は熙寧元寶。真書。北宋第6代皇帝・神宗の熙寧元年(1068)に鑄造された。銭2は皇宗通寶。真書か。北宋第4代皇帝・仁宗1039年に鑄造された。銭3は元豐通寶。篆書。北宋第6代皇帝・神宗の元豐元年(1078)に鑄造された。銭4は皇宗通寶。篆書。銭5は元豐通寶。真書。銭6は篆書の熙寧元寶か。摩滅が激しい。銭1～6は、3区土坑76から出土した。銭1～3は北側に、銭4～6は南側にそれぞれ3枚ずつ重なった状態で出土した。北側のセットは、上から銭1・銭2・銭3の順に、南側のセットは上から銭4・銭5・銭6順に重ねられていた。

銭7は熙寧元寶。篆書。3区土坑37から出土した。

銭8は寛永通寶。寛文8年(1668)以降に鑄造された新寛永。4区第1面検出時に出土した。

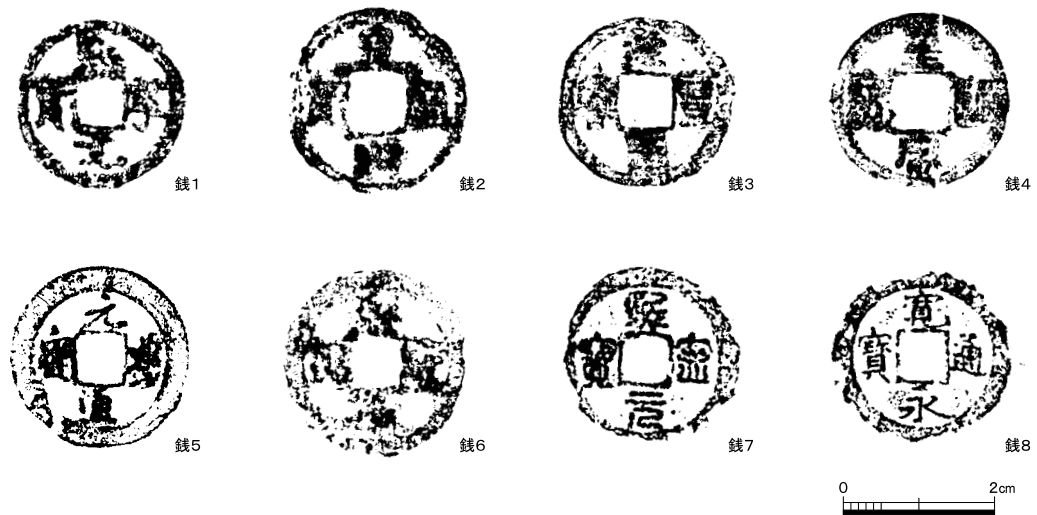


図23 銭貨拓影 (1:1)

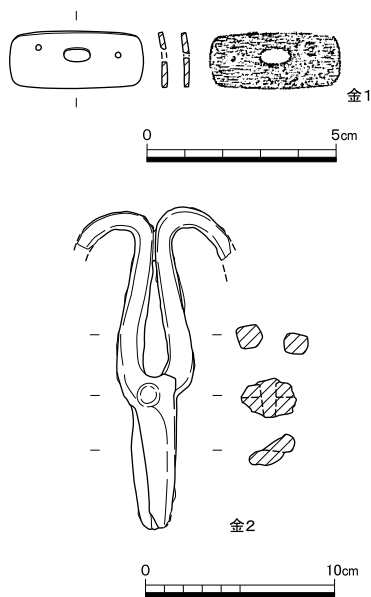


図24 金属製品実測図 (1:2、1:4)

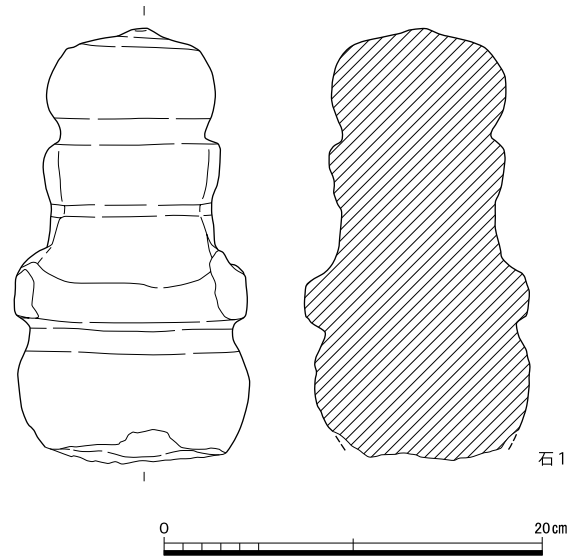


図25 石製品実測図 (1:4)

(5) 金属製品 (図版40、図24)

金1は銅製金具。幅1.5cm、長さ3.5cmの隅丸長方形を呈し、中央に長さ0.7cm、幅0.3cmの楕円形の孔、その左右に0.1cmの円形の孔を穿つ。左右の孔には銅線が残存する。伏見区総合庁舎の発掘調査でも、同様の遺物出土事例がある³⁾。5区の切土斜面500を埋め戻した土から出土した。

金2は鉄製の鋏。全長17.1cm。指穴の下半部が左右ともに欠損していた。4区土坑417から出土した。

(6) 石製品 (図版40、図25)

石1は一石五輪塔。火輪の軒口と下端部が欠損していた。石の表面が風化しており、文字の痕跡は確認できなかった。6区伏見城期の造成土中から出土した。

(7) 貝類 (表3)

表3 貝類一覧表

3・5区の伏見城期の土坑から貝類が出土した。

出土した貝の種類は、サザエ、アカニシ、ハマグリで、いずれも海水性の貝類である。サザエ39点、アカニシ6点、ハマグリ2点、不明1点と、サザエの出土点数が多い。

調査区	出土遺構	出土した貝の種類と点数			
		サザエ	アカニシ	ハマグリ	不明
3区	土坑10	1			
	土坑23	1	1		
	土坑37	14	1		
	土坑76	9		2	
	土坑77	2	1		
	土坑100		1		1
	土坑215	12			
5区	土坑514		2		

註

- 1) 『器瓦録想 其二 伏見城』(星野猷二・三木善則 伏見城研究会 2006年)の「9伏見区桃山町泰長老」に、同一文様の出土事例がある。
- 2) 『大坂城跡Ⅶ』(財団法人大阪市文化財協会 2003年)の第Ⅴ章「第2節 大阪市内出土の金箔瓦」図329-K345に、井桁を配した方形飾り瓦の出土事例がある。
- 3) 『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-27(財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年)の図55-金14に、墓の副葬品として出土した同様の遺物の出土事例がある。

5. まとめ

今回の調査では、伏見城期の造成土の上面（第1面）及び、基盤層の上面（第2面）において、伏見城造成以前、伏見城造成時、伏見城期、伏見城廃城以降の4時期の遺構を検出した。とくに伏見城造成時については伏見城期に木幡山の斜面地を平坦地に改変する大規模造成の方法が、伏見城期については大規模造成の上面で検出した遺構から城下町の様相が明らかとなった。

以下、今年度調査地における土地利用の変遷、伏見城城下町の造成方法について述べる。

（1）調査地における土地利用の変遷

伏見城造成以前

基盤層の上面で土坑323（3区）、土坑524（5区）を検出した。土坑323の詳細な時期は不明であるが、伏見城造成以前のものとする。土坑524は出土炭化材の自然科学分析の結果から、飛鳥～奈良時代に属するとみられる。木幡山では、当該時期の遺構は確認されていないが、古墳時代の古墳（図1－調査2）や、遺物出土事例（図1－調査7）は検出されており、古墳時代以降、土地利用がされてきたことが窺える。

伏見城造成期

安土桃山時代に調査地南東の木幡山山頂に伏見城が造営されることで、調査地周辺の様相は大きく変化する。木幡山の西麓にあたる調査地周辺では、伏見城城下町を整備するために、大規模な造成が行われる。本調査地では伏見城城下町の造成に伴う土手状高まり1（1区）、溝320・321（3区）、溝429（4区）、溝533（5区）、溝600（6区）を検出した。また、5区では切土斜面500、1・3～7区で造成盛土を確認した。造成は、標高の高い東南部に合わせるために、標高の低い西北部に盛土をすることで平坦地を造っていた。ただし7区では、他の調査区とは異なり、北から南に向かって斜め盛土を施していた。7区の北側には丹波橋通が存在することから、丹波橋通が先行して造られ、その後に大名屋敷地の造成が行われたと推定できる。

伏見城期（図26）

3・4・5区で伏見城期の遺構を検出した。3区では、堀1・2や土坑群やピット・溝を、4・5区では堀3を検出した。屋敷地の縁辺部にあたる1・2・6・7区では、遺構は確認できなかった。なお、この時期は、これまでの研究から、木幡山西麓の大規模造成を経て城下町が形成された木幡山伏見城であると考えられる。

3区で検出した遺構には重複関係があり、伏見城期は少なくとも新旧2時期に分けることができる。

伏見城I期（堀2・3） 堀2は屋敷地内を区画する南北堀とみられる。柱筋は北でやや東に振れており、この方位は、5区の切土斜面や、屋敷地の東側に存在する伊達街道の方位とおおむね一致する。伏見城城下町の屋敷地や道路を造営する際の方位とみられ、堀2は屋敷地の区画の方位に合わせて造られたと考えられる。また、4区で検出した南北堀3も切土斜面と平行に建てられてお

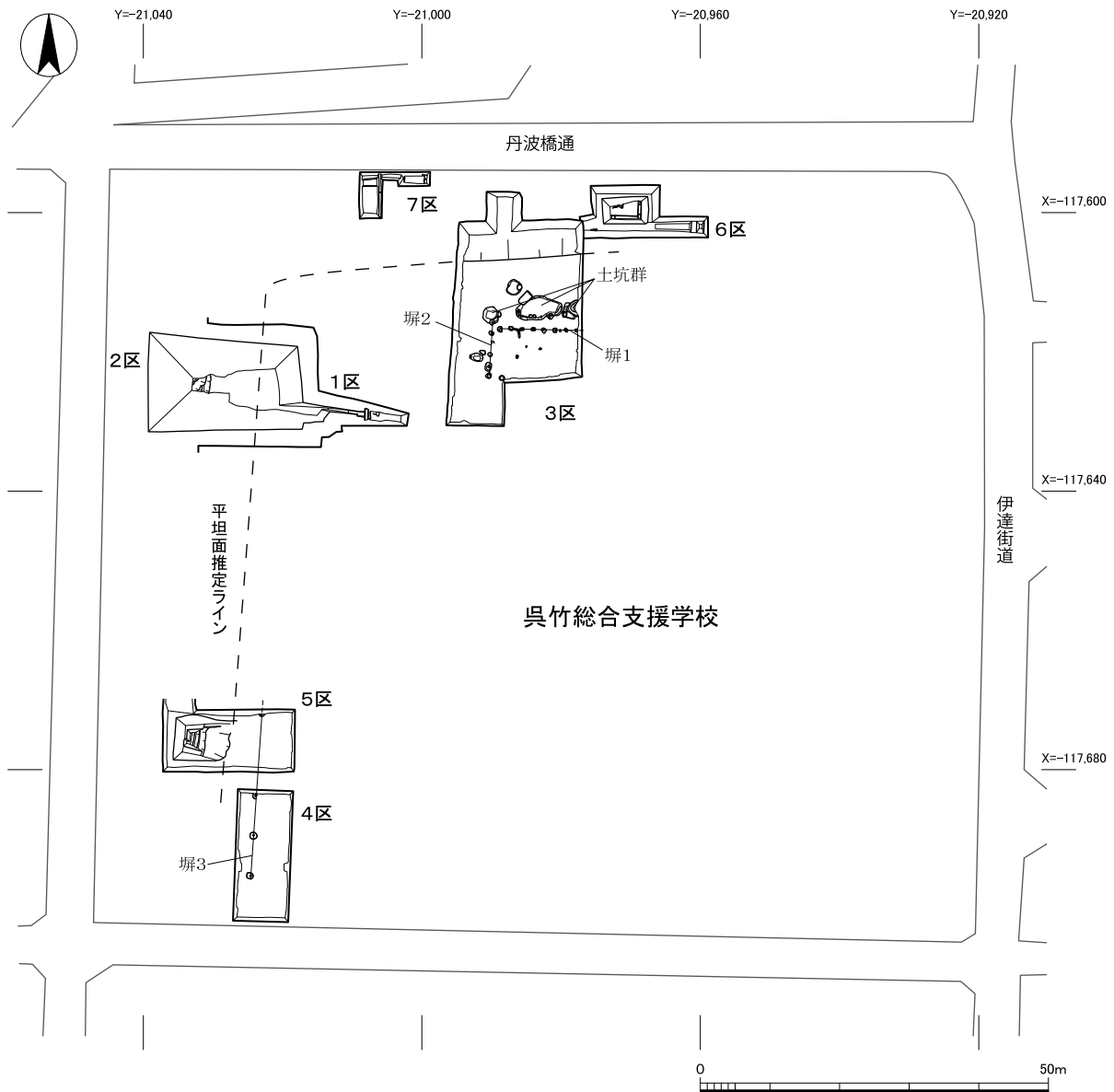


図26 伏見城期の遺構（1：1,000）

り、柱筋が北でやや東に振れる。塀3はその位置から、屋敷地の西側を区画する南北塀とみられる。塀3も塀2と同様の方位を示すことから、I期の遺構と考えられる。このI期は、木幡山伏見城の初期である豊臣期である可能性が高い。

伏見城II期（塀1、土坑37・76・77・100・215） 塀1はほぼ正方位の東西塀で、土坑群は塀1の北側に位置する。土坑群は東西に並んでおり、いずれもレンズ状に丁寧に埋め戻される。埋土からは食用とみられる貝殻や土器・瓦片が出土し、埋土上層には炭化物や焼土を多量に含んでいることから、この土坑群はいずれも廃棄土坑とみられる。塀1は屋敷地の北を画する区画塀と推測でき、廃棄土坑群は塀1の外側に掘削された。塀3は建て替えの痕跡がみられないことから、この時期にも存続していた可能性が考えられる。屋敷内の建物群は、塀1・3で区画された敷地に展開していたと推定できる。II期については、周辺の武家屋敷が被災し、その後に再建された関ヶ原の戦い以降の徳川期の可能性が考えられる。

伏見城廢城以降

江戸時代中期の土坑415（4区）、ピット423、江戸時代後期の溝1（1区）、土坑48（3区）、土坑514（5区）などを検出した。遺構の希薄さや各調査区の基本層序から、伏見城廢城から江戸時代中期頃までは調査地周辺では積極的な土地利用はなされなかったと推測できる。江戸時代後期になると切土斜面500を埋め立てる等、地形の改変を行っていることがわかった。全体的な土地改変としては、戦後に学校を建てる際、屋敷地北側と西側の緩やかに傾斜する地形を平坦地にするために、大規模な盛土造成を行っている。その様子は1・2・3・5・6区で確認でき、現在の地形はこの戦後の造成により、造り出されたことが明らかとなった。

（2）伏見城期の造成

1～7区の調査により、基盤層に盛土、切土をすることで、平坦地を造り出していることがわかった。1・3～7区では盛土、5区では切土の様子を確認することができた。

盛土の厚さは、場所により厚薄があるものの、造成の工程は基本的にはほぼ同一の方法を用いていた。本調査地における造成の工程は、おおよそ5段階に分けることができる。

① 基盤層に段差をつけて、基盤層の傾斜を緩やかにする。排水のための溝を掘削する。

② 基盤層の上面に、土を水平に盛って平坦面を造る。この時、①で設けた段差の、標高が高い方の端に土を盛り上げて土手状の高まりを造り、水平盛土の土留めとすることがある。

③ ②で造った平坦面の上に黄橙色シルトブロック+赤褐色粘質土ブロックの土を敷く。この層の上面は平坦に仕上げず、起伏をもたせている。

④ 標高の高い方から低い方へ向かって斜めに土を入れる。この時、土手状の高まりを造り、斜め盛土の土留めとすることもある。なお、この斜め盛土は、数種類の土を細かい単位で互層状に入れていた。斜め盛土の上に再度斜め盛土を行うこともある。

⑤ 斜め盛土の上に水平に土を盛り、仕上げる。

また5区では、基盤層の切土造成により、比高4m以上の斜面を造り出していた。この切土により、今回調査した屋敷地の西側の標高が低い区画を形成していた。斜面は、傾斜の角度が2段階あり、上方は約30度、下方は約45度の傾斜であった。

上記のような工程で盛土および切土造成を行うことで、屋敷地の区画を平坦地に整形していた。この平坦地が伏見城期の遺構面にあたるが、その標高は検出面で49.7～51.4mであった。なお、屋敷地の縁辺部は、徐々に傾斜し低くなっていた。

註

- 1) 森島康雄「伏見城城下町の成立過程」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室 1999年
森島康雄「伏見城城下町の考古学的調査」『ヒストリア第222号』大阪歴史学会 2010年

付章 土坑524出土炭化材の分析

株式会社 古生態研究所

はじめに

今回の分析調査では、調査区の伏見城の整地層直下で検出された土坑524の形成年代を把握することを目的として、埋土中の炭化材について樹種同定および放射性炭素年代測定を実施する。

(1) 試料

試料は、土坑524東壁埋土試料①・②の堆積物2点から抽出した炭化材片である。試料①・②から出土した炭化材片の樹種同定を実施した後、 ^{14}C 年代測定試料を選択した。

(2) 分析方法

1) 炭化材の樹種同定

炭化材を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する。走査型電子顕微鏡（低真空）で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にする。

2) 放射性炭素年代測定

試料は、メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除いた後、調製後、加速器質量分析計（NEC社製）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

結果は、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代（慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した値と、暦年較正に用いた下1桁を丸めていない値）、暦年較正年代結果を示した一覧表として示す。また、各試料の較正年代確率密度分布、Intcal較正曲線に配した較正年代確率密度分布図等を図示する。

なお、 ^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代で、 ^{14}C 年代 (yrBP) は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用して算出する。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。また、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(3) 結果

1) 樹種同定

土坑524東壁埋土①・②から出土した炭化材は、いずれも小径の芯持丸木であり、年輪数は5年である。樹皮は認められないが、外側に壊れた年輪が認められないことから、元は樹皮付の可能性はある。また、いずれも樹芯に随が認められることから、小径の枝に由来すると判断される。樹種は針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された（表1）。解剖学的特徴等を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～や

表1 5区土坑524出土炭化材の樹種同定結果

試料番号	形状	樹皮	年輪数	種類	備考
土坑524 東壁埋土①	芯持丸木(直径5mm×長さ20mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	AMS実施
	芯持丸木(直径6mm×長さ9mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
	芯持丸木(直径6.5mm×長さ8mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
土坑524 東壁埋土②	芯持丸木(直径5mm×長さ23mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
	芯持丸木(直径5mm×長さ15mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
	芯持丸木(直径5mm×長さ8mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
	芯持丸木(直径5mm×長さ7mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	
	芯持丸木(直径5mm×長さ6mm)	無	5年	マツ属複維管束亜属	

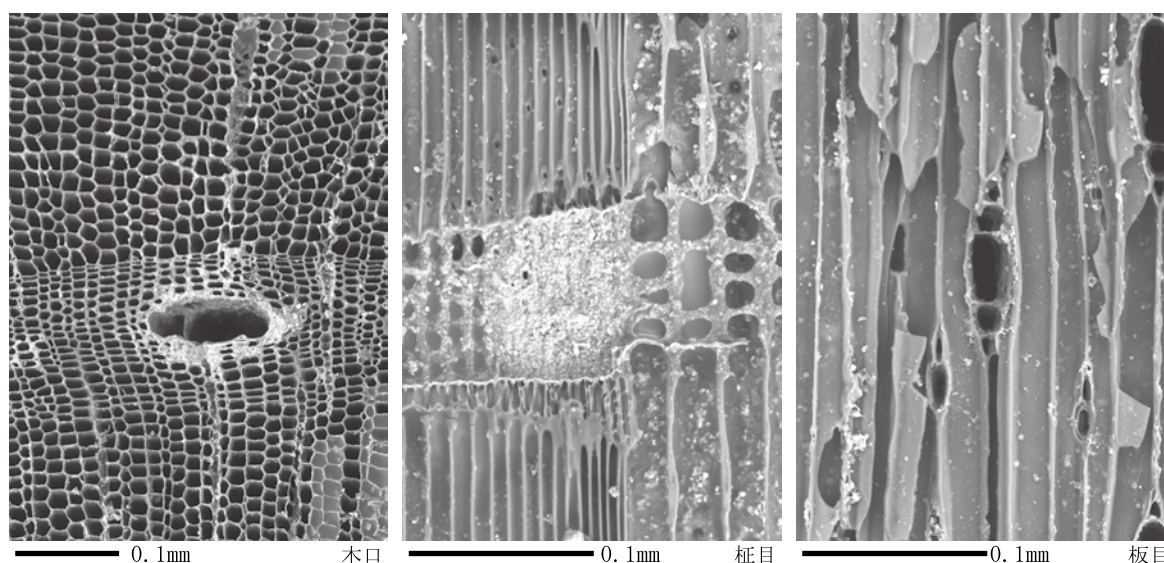


図1 マツ属複維管束亜属炭化材の走査型電子顕微鏡写真

表2 5区土坑524出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料状態	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C年代値 (yrBP)	暦年較正年代		code No
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	
土坑524 東壁埋土 ①	炭化材 (マツ属複維 管束亜属)	-28.12 \pm 0.26	1310 \pm 20 (1307 \pm 22)	667calAD - 687calAD (26.8%) 743calAD - 772calAD (41.5%)	660calAD - 708calAD (46.4%) 726calAD - 775calAD (49.0%)	IAAA- 210204

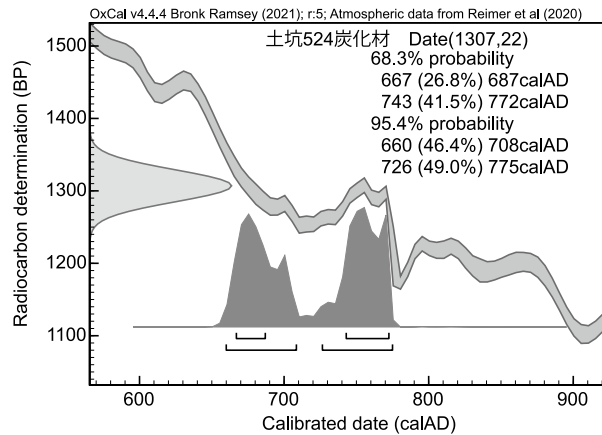


図2 土坑524出土炭化材の暦年較正年代確率密度分布

や緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

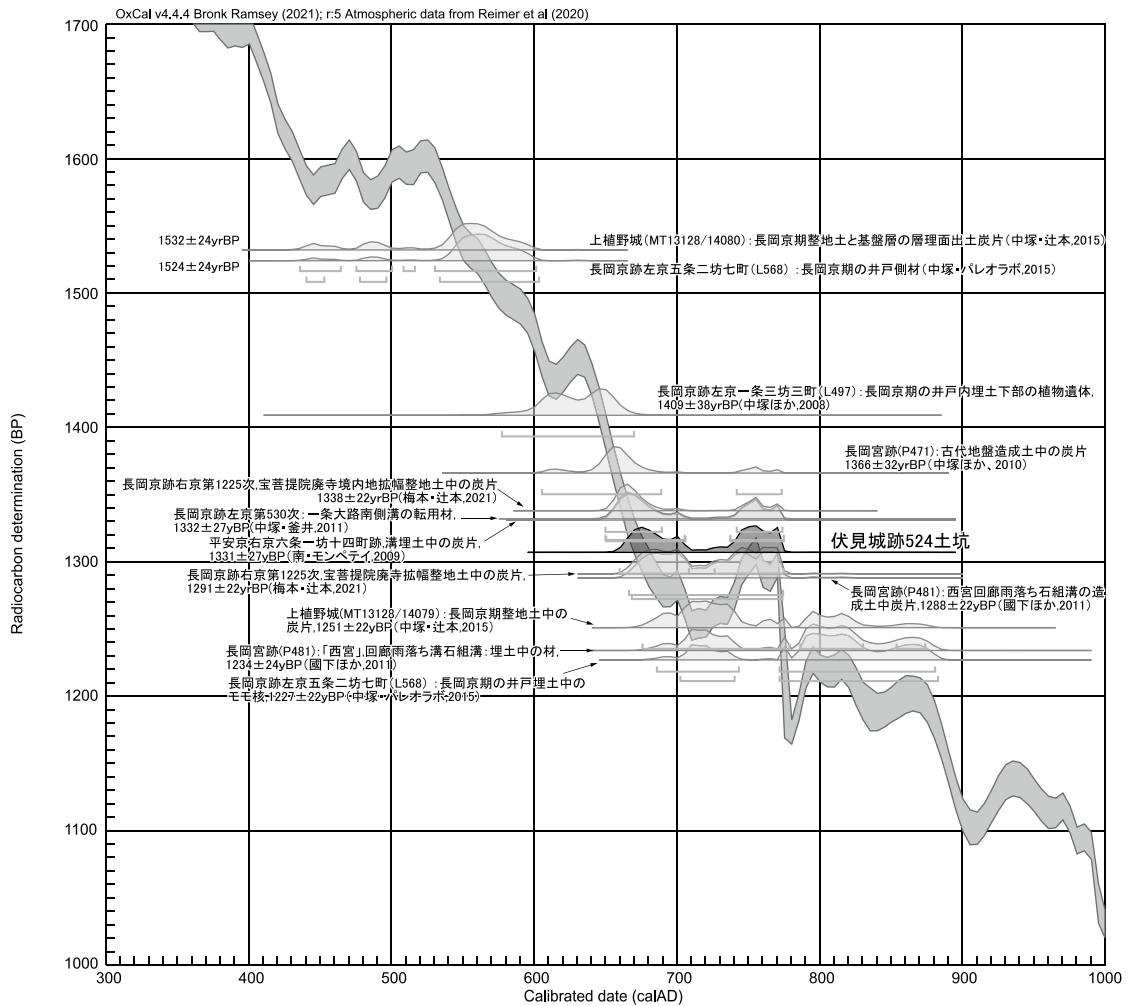
2) 放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定・暦年較正結果を表2に示す。各試料の暦年較正年代の確率密度分布図を図2、今回の結果を含む向日市周辺で得られているIntcal較正曲線に配した較正年代確率密度分布を図3に示す。以下に試料別の結果について述べる。

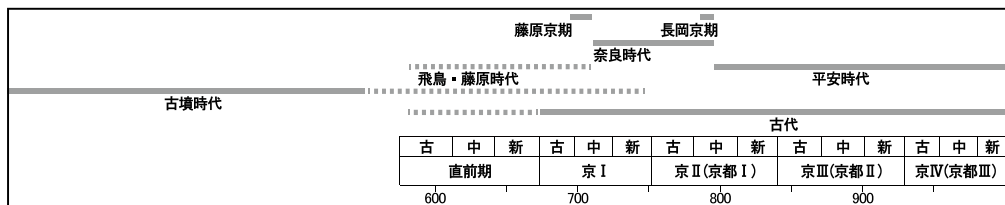
土坑524東壁埋土①の炭片の¹⁴C年代値は1310 \pm 20yrBPを示す。暦年較正年代(2 σ)はIntcal較正曲線の凹凸が著しい範囲にあたり絞り込むことが難しく、660calAD - 775calADと幅のある年代を示す。

(4) 考察

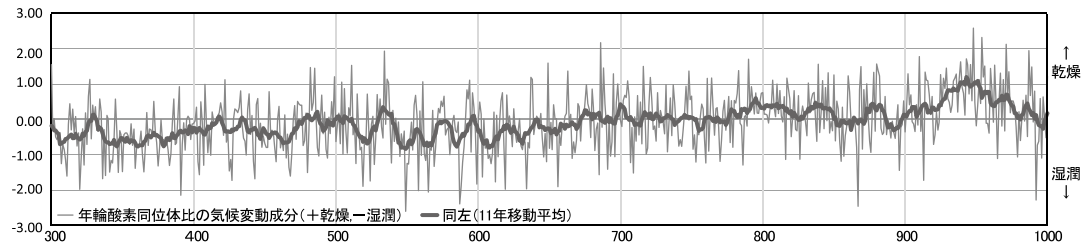
土坑524から出土した炭化材は、いずれもマツ属複維管束亜属の年輪数5年の小径の枝であった。現在日本に分布するマツ属複維管束亜属には、北海道南部から九州に分布するアカマツ (*Pinus densiflora*)、本州から琉球に分布するクロマツ (*Pinus thunbergii*)、琉球列島に分布するリュウキュウマツ (*Pinus Luchuensis*) がある。木材は軽軟な部類に入るが、強度と保存性は比較的高く、耐水性が高い。また松脂を多く含み、燃えると高温を発生するので燃料として優秀である。土坑524の機能・用途は不明であるが、明瞭な被熱痕と埋土中に土坑壁由来の被熱焼土ブロックが確認されていること、出土炭化材の種類がマツ属複維管束亜属一種からなることを踏まえると、高温焼



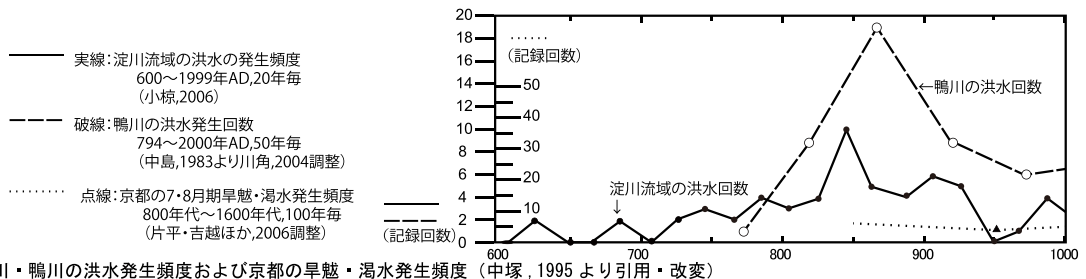
a) Intcal20 較正曲線に配した較正年代確率密度分布



b) 考古編年 (小森, 2005 より引用・抜粋)



c) 酸素同位体比による気候変動 (Nakatsuka et. al., 2020 より引用・加筆)



d) 淀川・鴨川の洪水発生頻度および京都の早魃・渇水発生頻度 (中塚, 1995 より引用・改変)

図3 較正年代総合図

成を目的とする焼成遺構であった可能性がある。また、マツ属複雑管束亜属のうち、アカマツは二次林の代表的な樹種であることから、当該期の調査地周辺の植生は二次林化が進行していた可能性がある。

炭化材の暦年代は、7世紀後半から8世紀後半を示した。測定対象とした炭化材が最外年輪を含む小枝であったことから、古木効果の影響を考慮する必要がなく、得られた年代値が土坑524の使用年代を示している可能性が高い。ただし、¹⁴C年代が対応する較正曲線の範囲は凹凸が著しく、暦年代を絞り込むことが難しく、100年程度の年代幅があり、飛鳥・藤原時代から奈良時代の範囲に対応する。

既存の京都盆地の考古遺跡の年代測定結果と、京都の土器編年考古編年（小森, 2005）および樹木年輪セルロースの酸素同位体比の気候学的成分の変動（Nakatuka et al, 2020）、淀川・鴨川の洪水と京都の旱魃・渇水頻度（中塚, 1995）を図3に示す。Intcal較正曲線に配した暦年代確率密度分布をみると、長岡京跡「西宮」の回廊雨落石組み溝の造成土と廃絶後の埋土中の炭化材の暦年代（國下ほか, 2011）、および長岡京跡左京五条二坊七町（L568）の長岡京期の井戸埋土中のモモ核の暦年代（中塚・パレオラボ, 2015）は、今回の年代よりやや新しい年代を示している。これに対して、長岡京跡左京五条二坊七町（L568）の長岡京期の井戸側材の暦年代（中塚・パレオラボ, 2015）、長岡京跡左京一条三坊三町（L497）の長岡京期井戸埋土下部の植物遺体の暦年代（中塚ほか, 2008）、長岡京跡左京第530次的一条大路南側溝の転用材（中塚・釜井, 2011）の転用材の暦年代、長岡京跡（P471）の古代地盤造成土中の炭片の暦年代（中塚ほか, 2010）は、今回の結果より古い、もしくはやや古い年代を示している。いずれも長岡京期の遺構とされることから、暦年代はそれより古い年代を示していることになる。長岡京跡左京一条三坊三町（L497）の井戸内埋土下部の植物遺体については不明であるが、それ以外の暦年代は測定対象が最外年輪の不明な炭片や転用材などの木材であることから、年輪による古木効果の影響とみなせる。したがって、今回の伏見城盛土直下の土坑456は、長岡京期まで新しくなる可能性は低く、先述したように飛鳥・藤原時代から奈良時代の範囲内に収まるものと推定される。また、伏見城跡の盛土形成期の人為的擾乱により破壊されている可能性もある。

なお、今回の暦年代が示す範囲の樹木年輪酸素同位体比の変動（Nakatuka et al, 2020）をみると、降水量の減少傾向が進行する時期に相当し、このような河川氾濫頻度・規模の縮小期に律令制が進行しており、地形形成環境の変動の影響を大きく受けていることが指摘されている（若林, 2020）。

引用文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757
- 伊東隆夫・山田昌久（編）, 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 444p.

小森俊寛,2005,京から出土する土器の編年的研究 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀.京都編集工房,432p

國下多美樹・松崎俊郎・中島信親・辻本裕也,2011,長岡宮推定「西宮」.向日市埋蔵文化財調査報告書第91集,財団法人向日市埋蔵文化財センター,136p.

南 孝雄・モンパティ恭代,2009,平安京右京六条一坊十四町跡.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-22,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,60p

中塚良,1995,コラム：古代宮都・長岡京の廃絶と自然条件の推移.吉野正敏・安田芳則 編「講座文明と環境 第6巻 歴史と気候」,朝倉書店,171-182.

中塚良・釜井俊孝2011,『長岡宮都図譜～都の自然景観と防災の考古学～』.株式会社図書印刷同朋舎,6p.

中塚良・國下多美樹・辻本裕也,2008,長岡京跡左京第497次(7ANDTK-12地区)～一条条間南小路、左京一条三坊三町、東土川西遺跡～発掘調査報告.向日市埋蔵文化財調査報告書第77集,財団法人向日市埋蔵文化財センター,117-166.

中塚良・佐藤ふみ・松田順一郎・パリノ・サーヴェイ株式会社,2010,長岡宮跡第471次(7ANPHD-5地区)～北辺官衙北部、宮内北一条条間南小路、殿長遺跡～発掘調査報告.向日市埋蔵文化財調査報告書第84集,51-88.

中塚良・パレオラボ,2016,第568次(7ANFTB-6地区)～左京五条二坊七町.鴨田遺跡～発掘調査報告.公益財団法人向日市埋蔵文化財センター第103集,71-90.

中塚良・辻本裕也,2015,向日市第13128・14078次(7ANFKZ地区)～長岡京左京三条一坊四町、西小路遺跡～詳細分布調査報告.向日市埋蔵文化財調査報告書第102集,151-178.

Nakatsuka, T., Sano, M., Li, Z., Xu, C., Tsushima, A., Shigeoka, Y., Sho, K., Ohnishi, K., Sakamoto, M., Ozaki, H., Higami, N., Nakao, N., Yokoyama, M., and Mitsutani, T. (2020): Reconstruction of multi-millennial summer climate variations in central Japan by integrating tree-ring cellulose oxygen and hydrogen isotope ratios, *Climate of the Past Discussion*, <https://doi.org/10.5194/cp-2020-6>.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

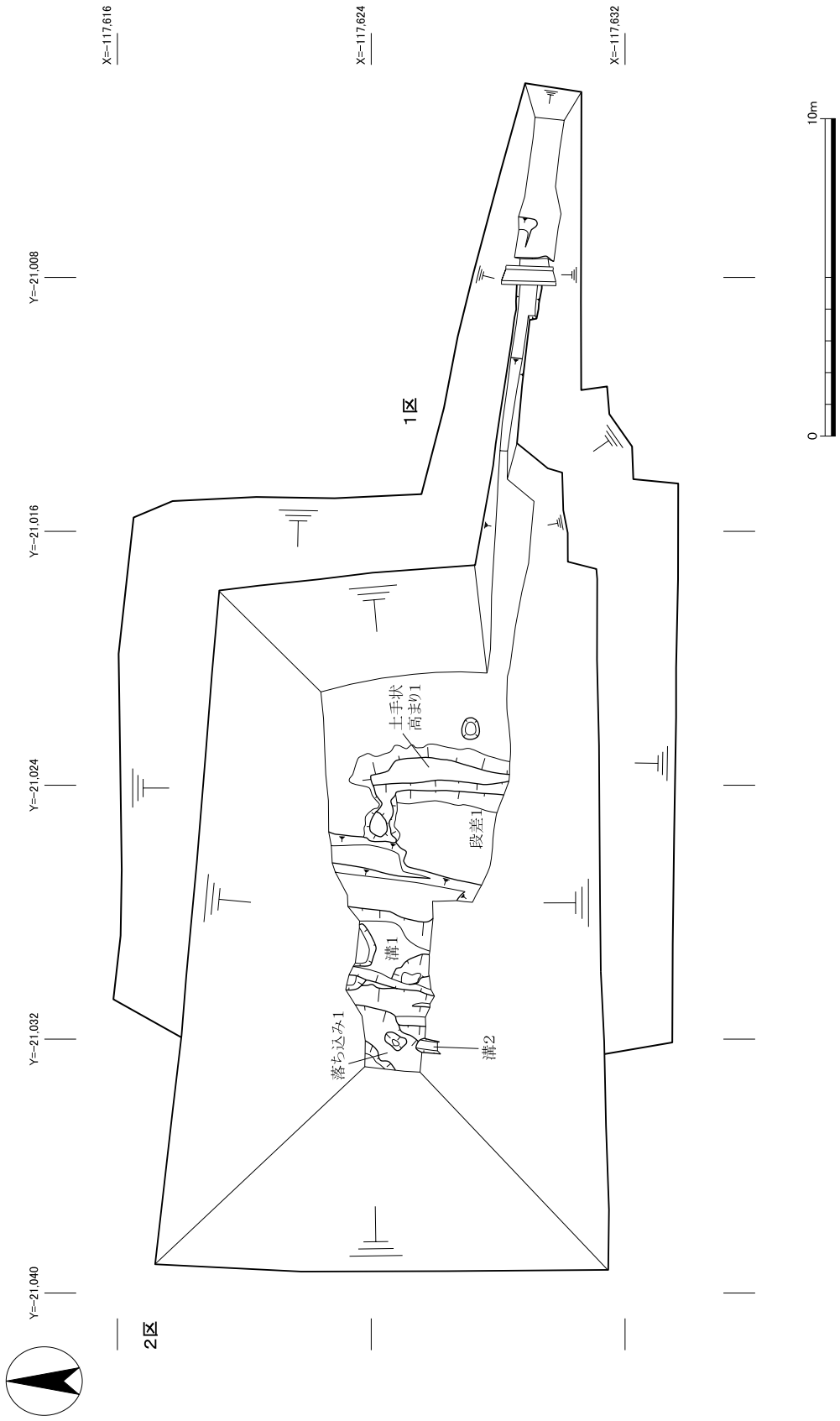
島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

梅本康広・辻本裕也,2021,長岡京跡右京第1225次(7ANBNO-14地区)～右京北一条二坊二町、宝菩提院廃寺～発掘調査報告.向日市埋蔵文化財調査報告書第120集,向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター,93-118.

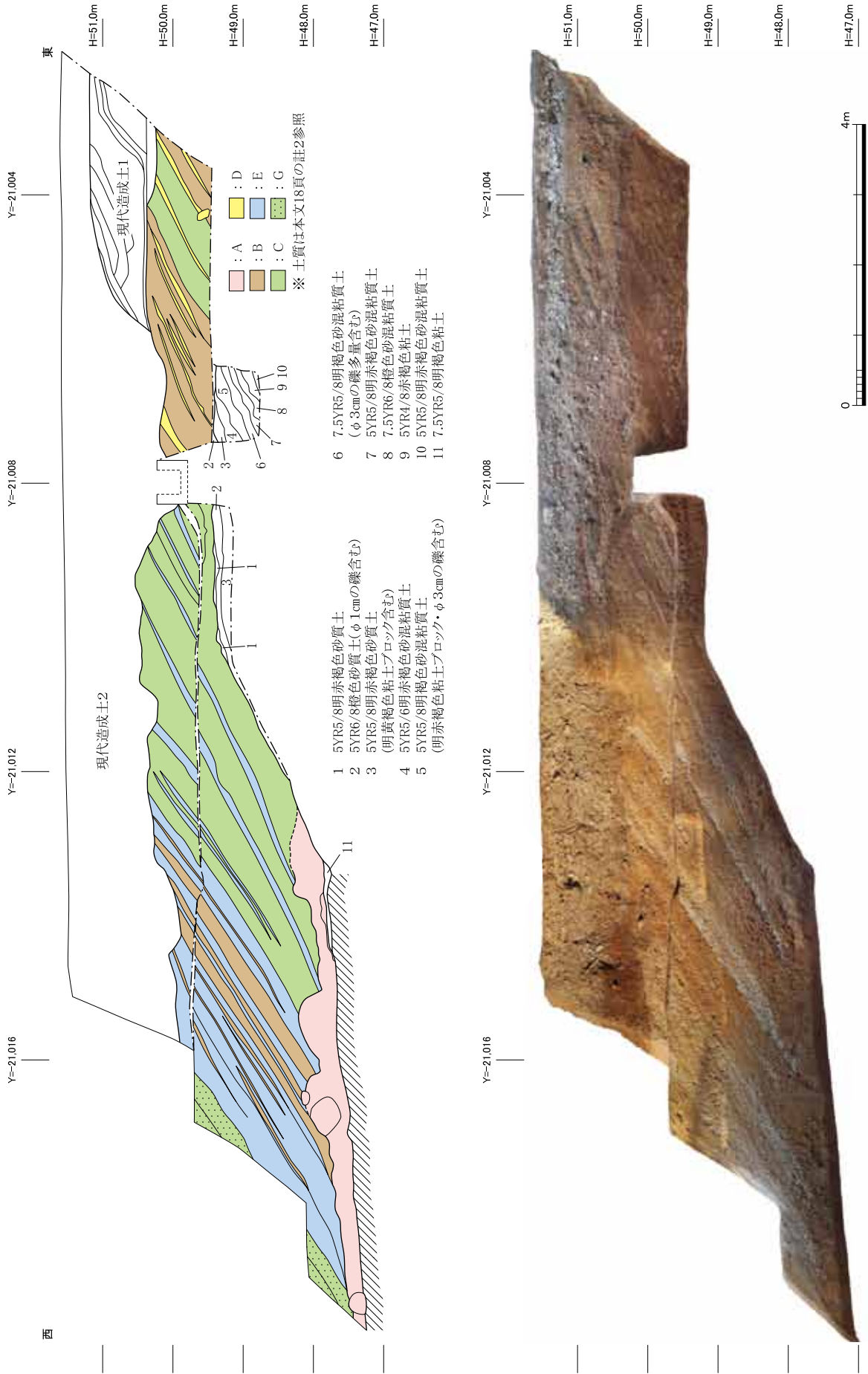
若林邦彦,2020,気候変動と古代国家形成・拡大期の地域社会構造変化の相関－降水量変動と遺跡動態から－.「気候変動から読みなおす日本史 第3巻 先史・古代の気候と社会変化」,中塚武監修,臨川書店,101-129

圖 版

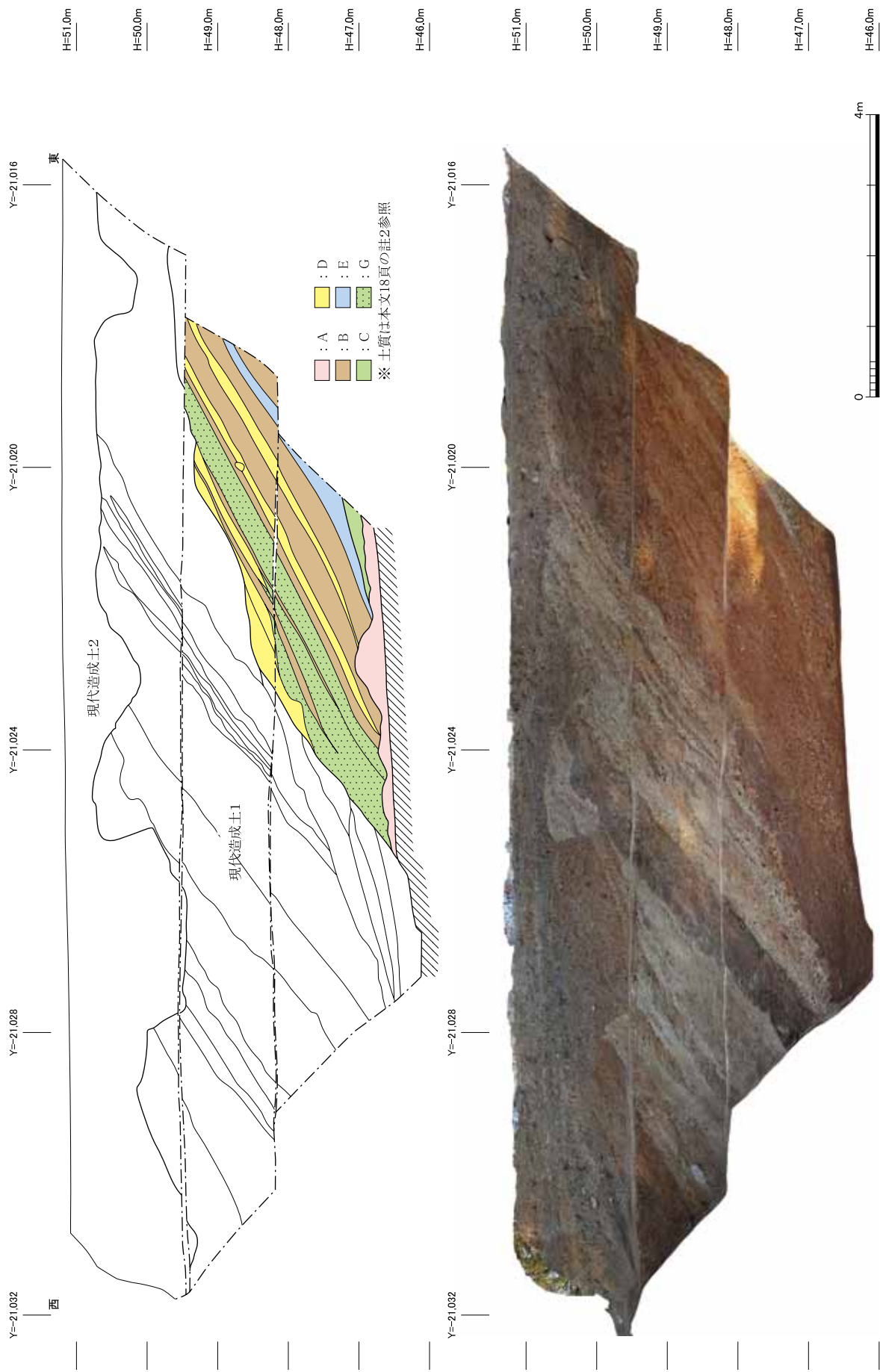


1区・2区平面図 (1 : 200)

図版2 遺構

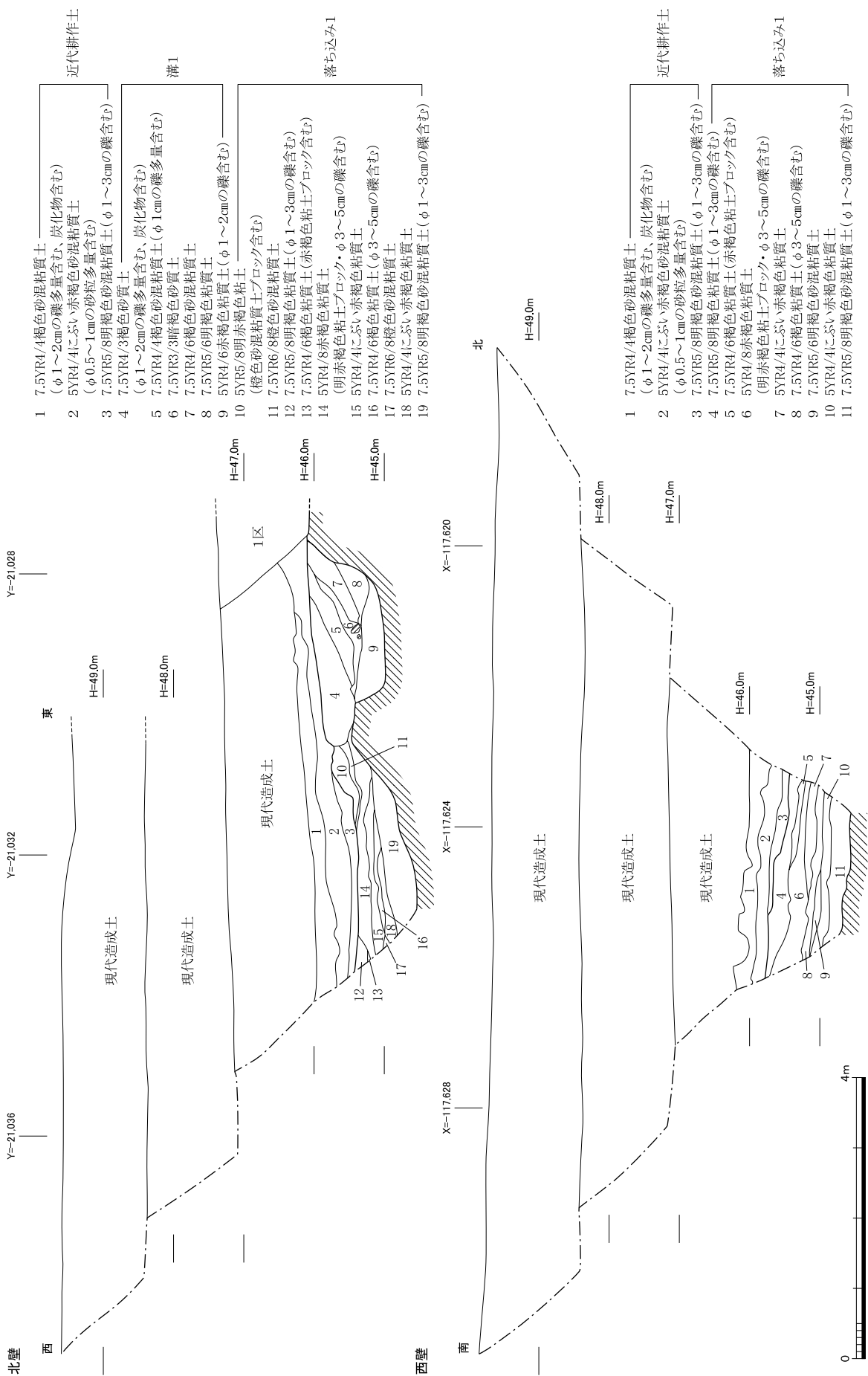


1区北壁断面図・オルソ画像1 (1:80)

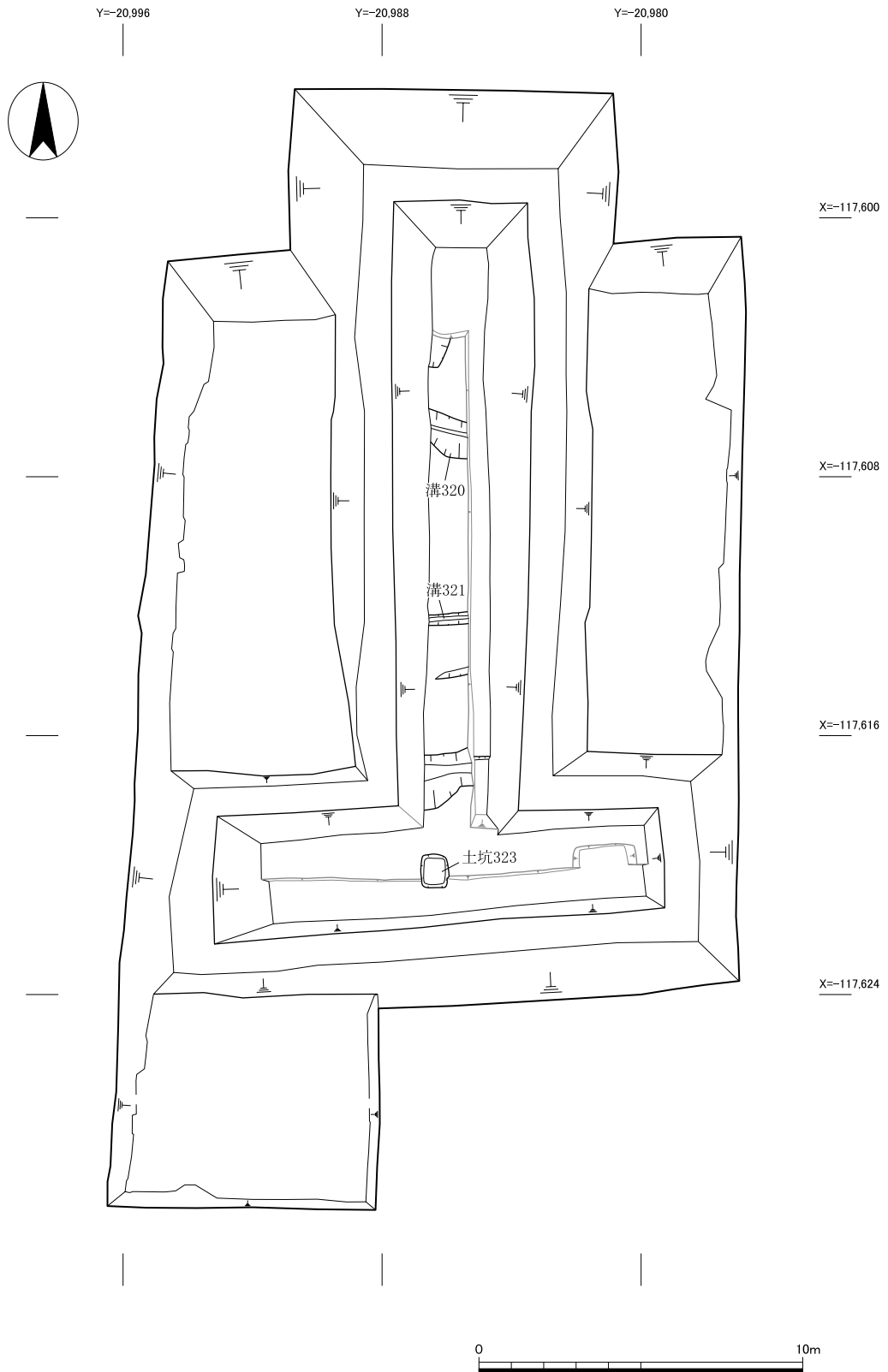


1区北壁断面図・オルソ画像2 (1:80)

図版4 遺構

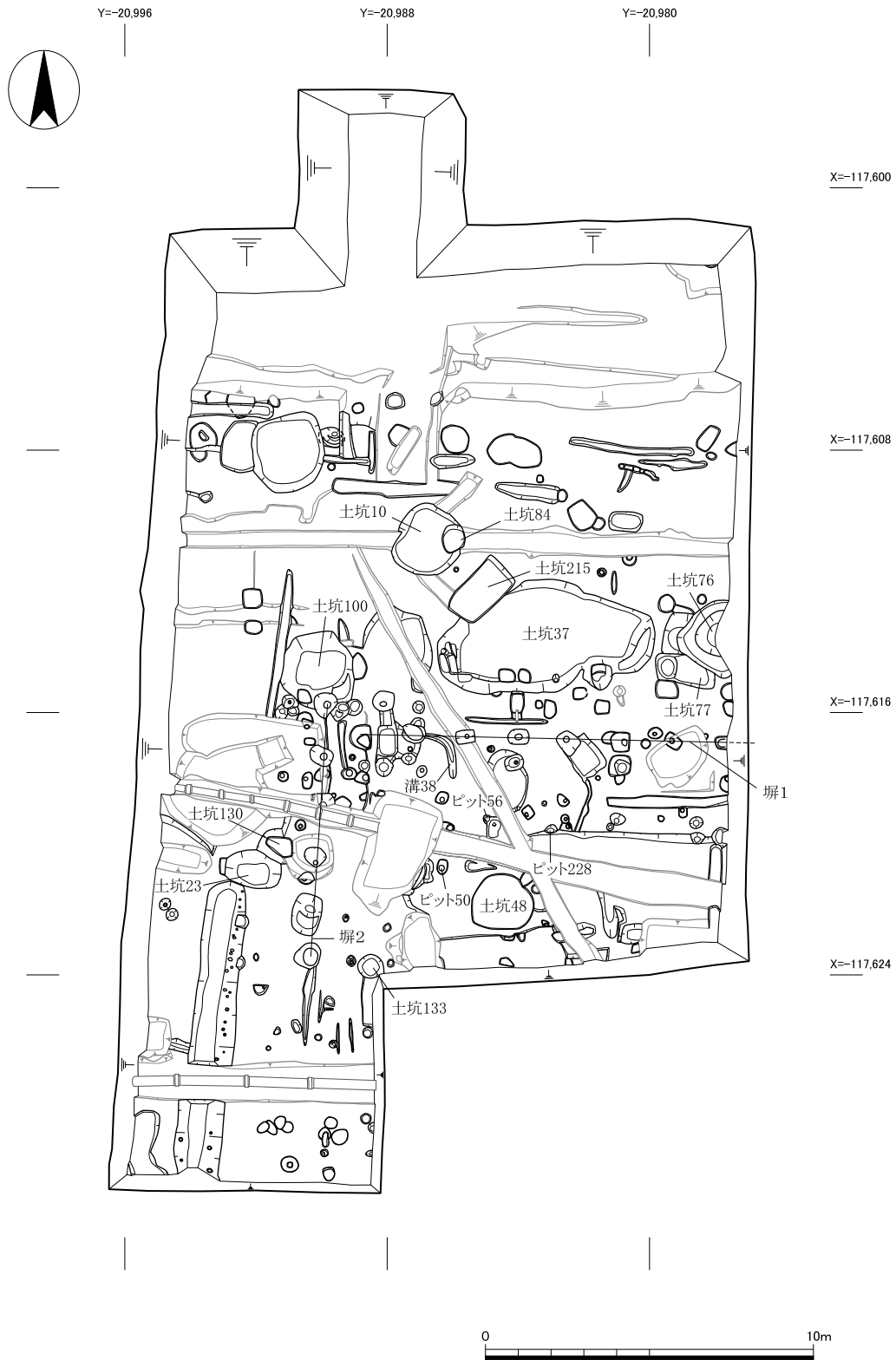


2区北壁・西壁断面図 (1:80)

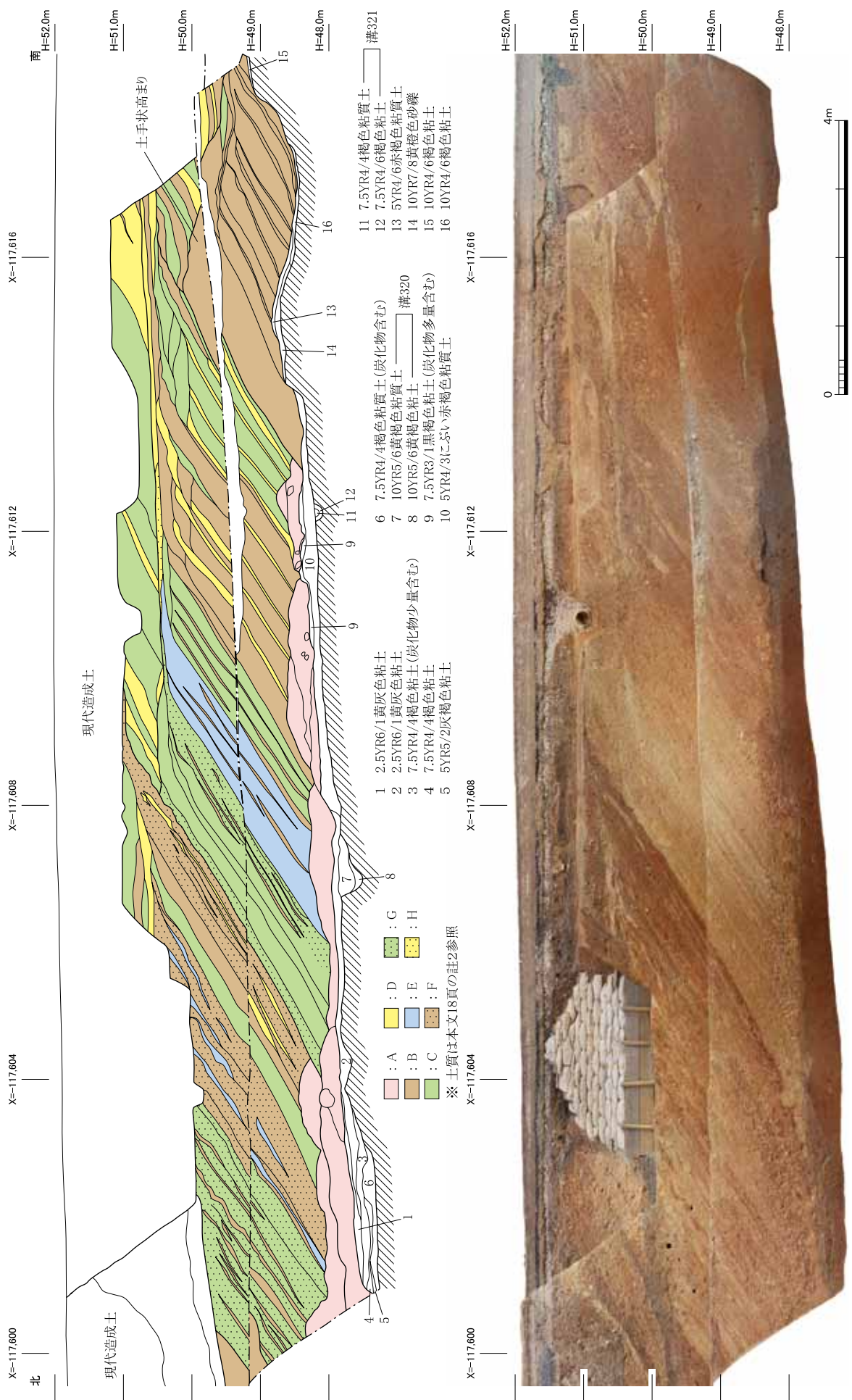


3区第2面平面图 (1:200)

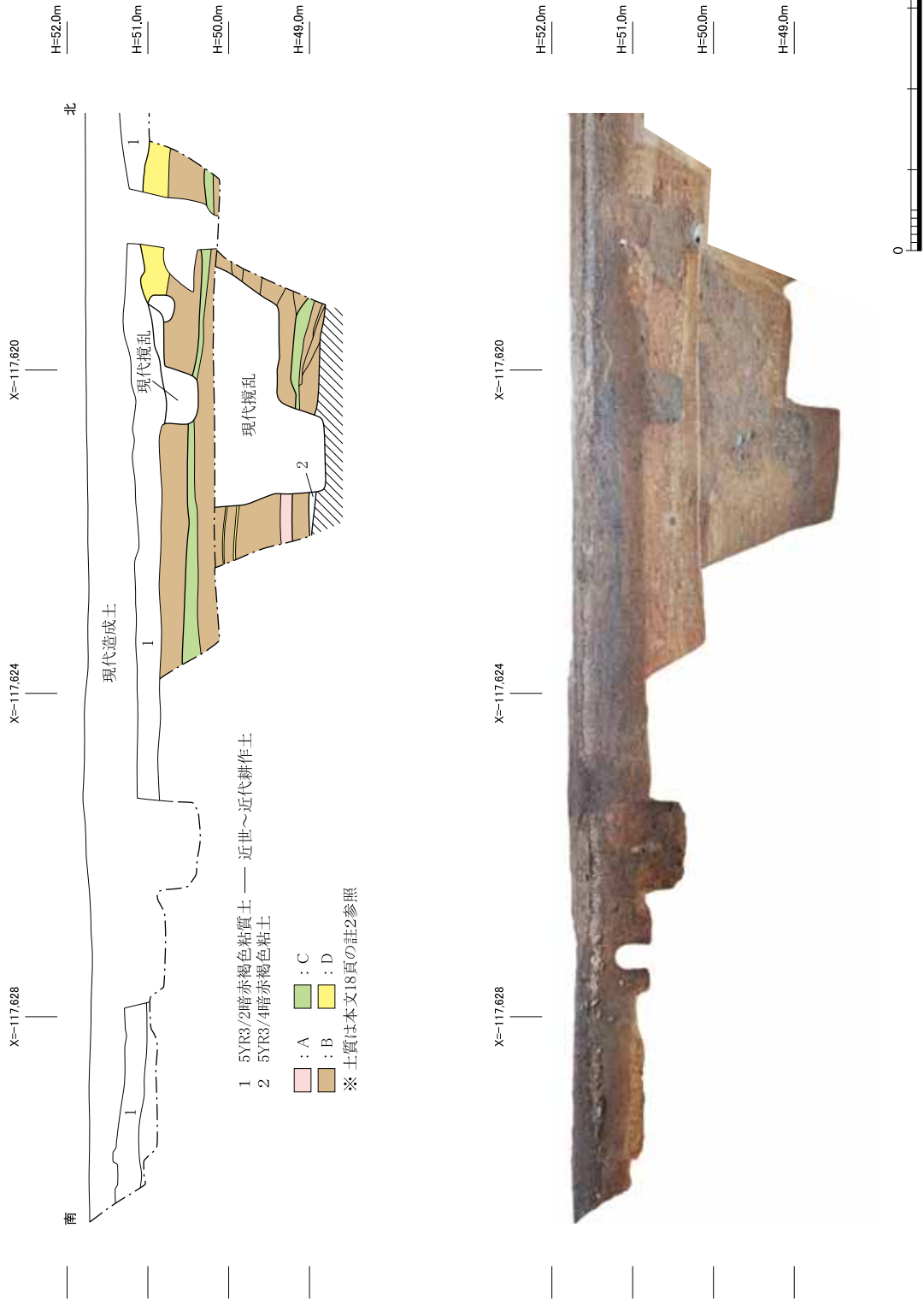
図版6
遺構



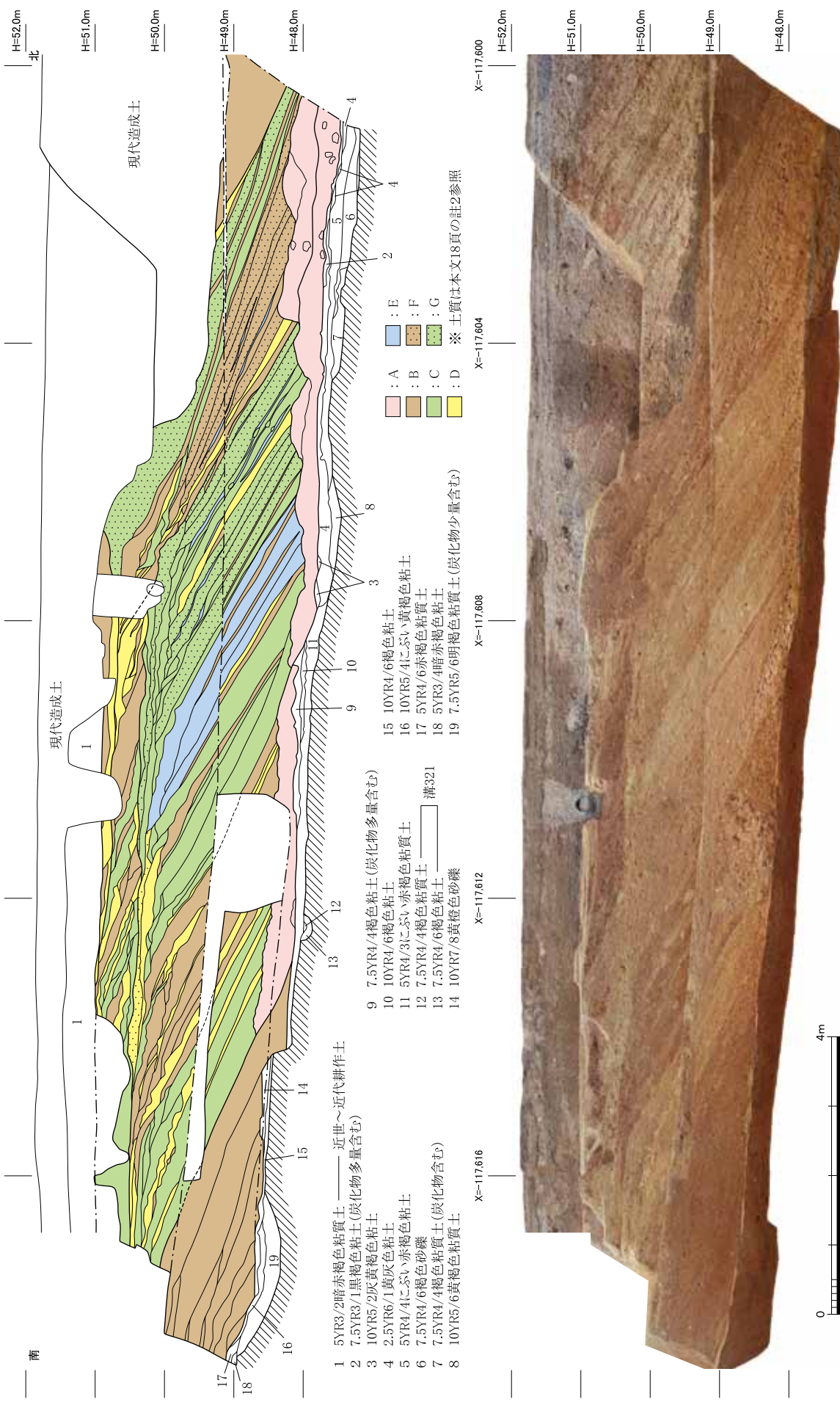
3区第1面平面図 (1 : 200)



3区東壁断面図・オルソ画像 (1:80)

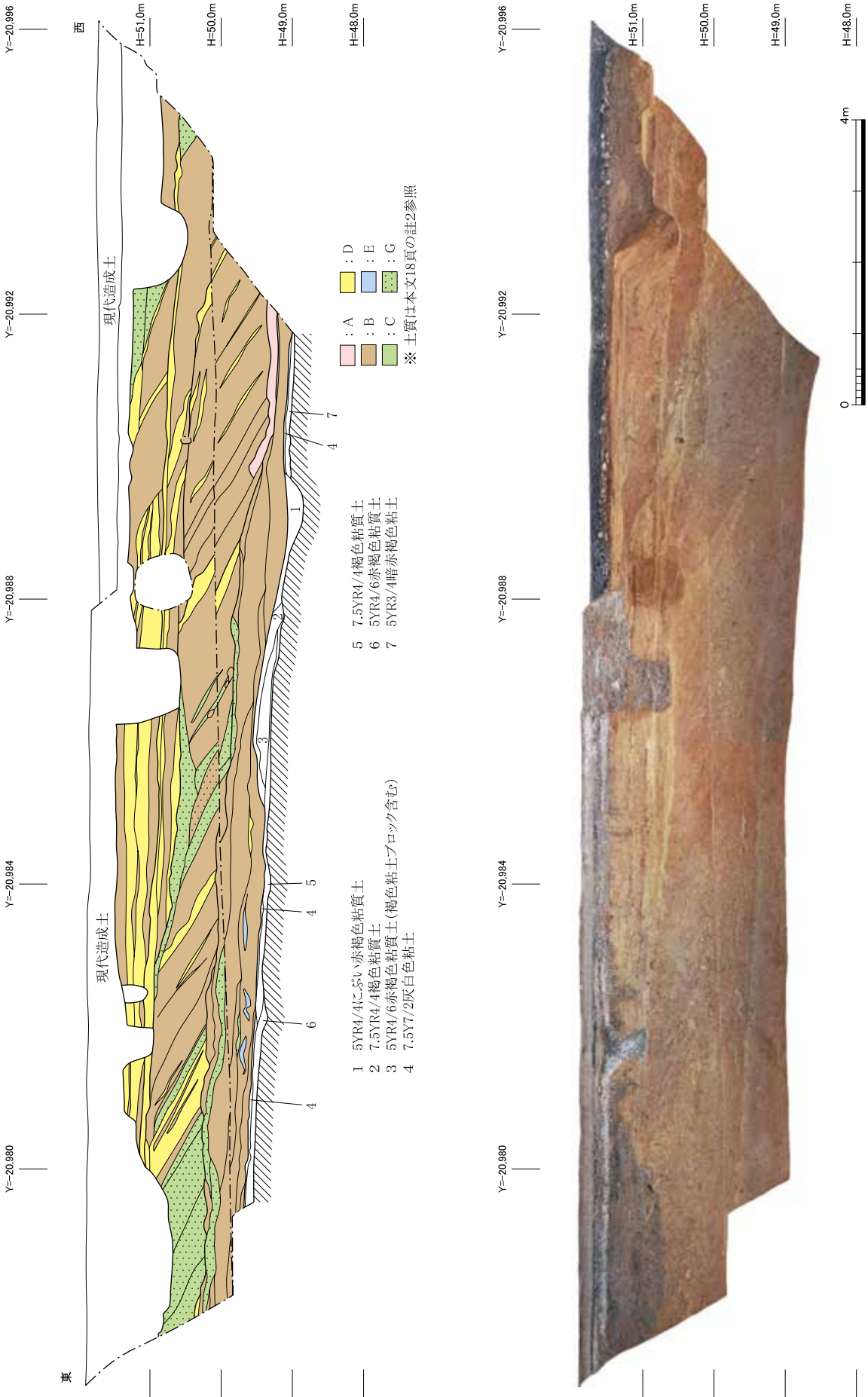


3区西壁断面図・オルソ画像1 (1:80)

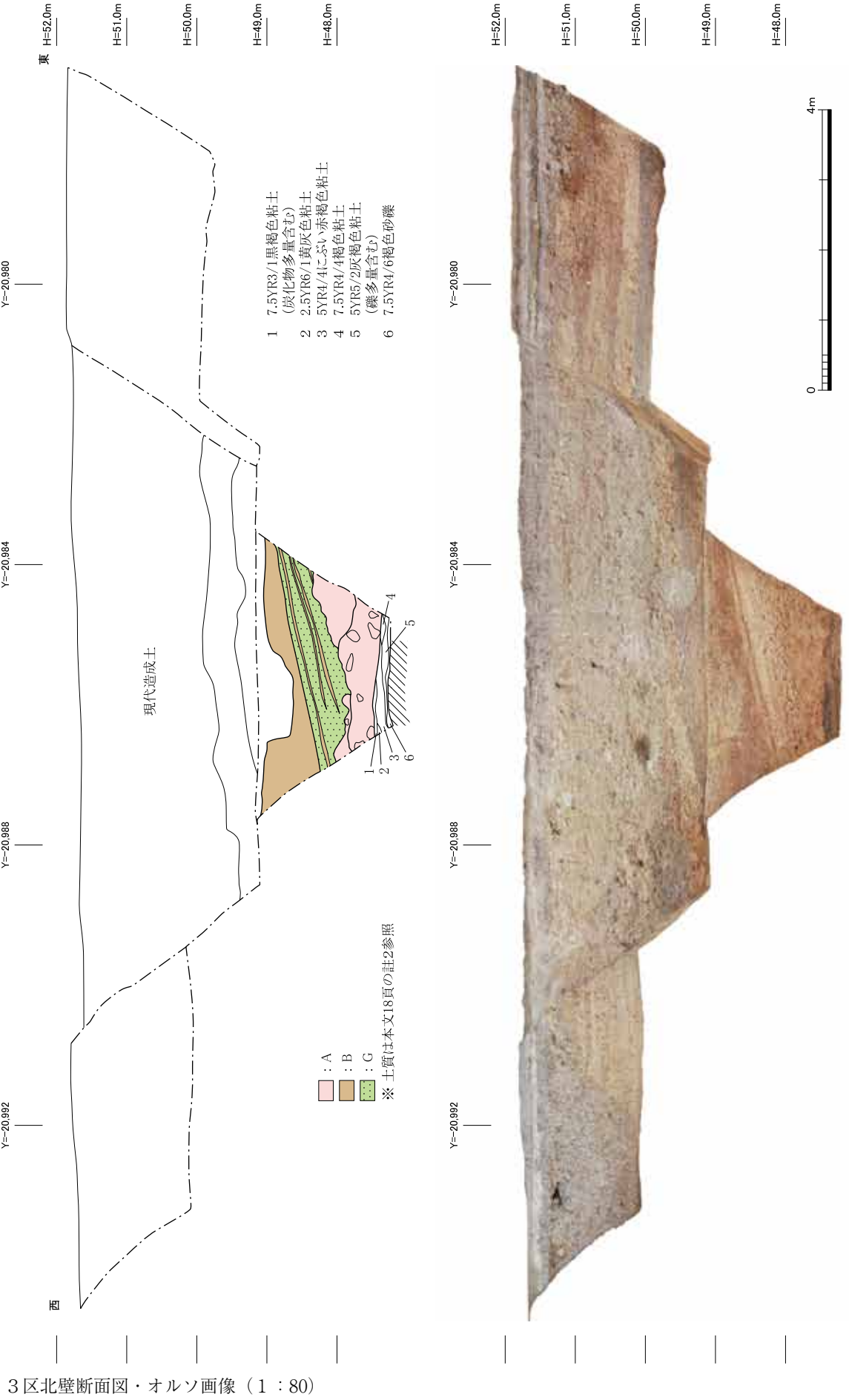


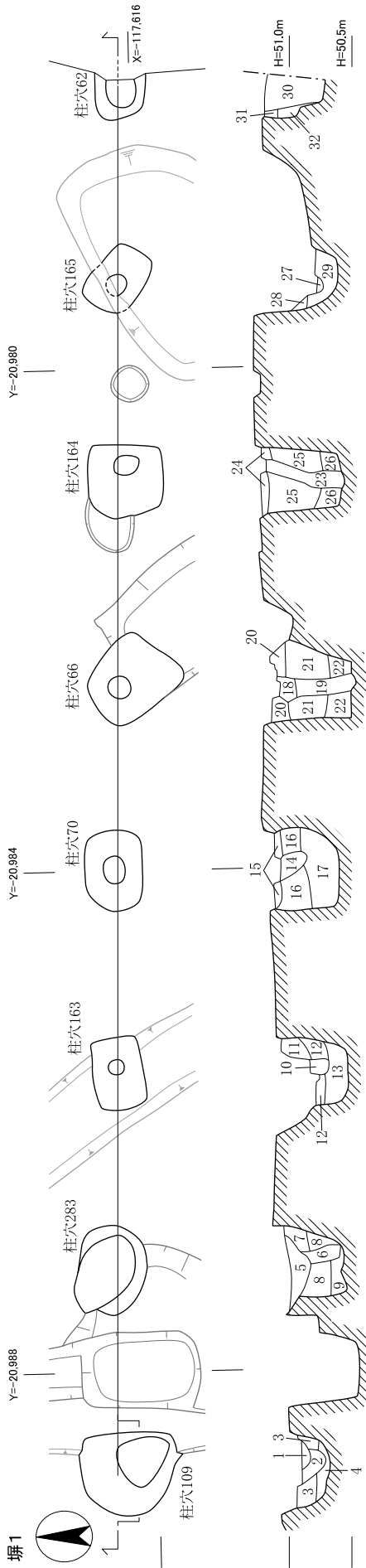
3区西壁断面図・オルソ画像2 (1:80)

図版10 遺構



3区南壁断面図・オルソ画像 (1:80)





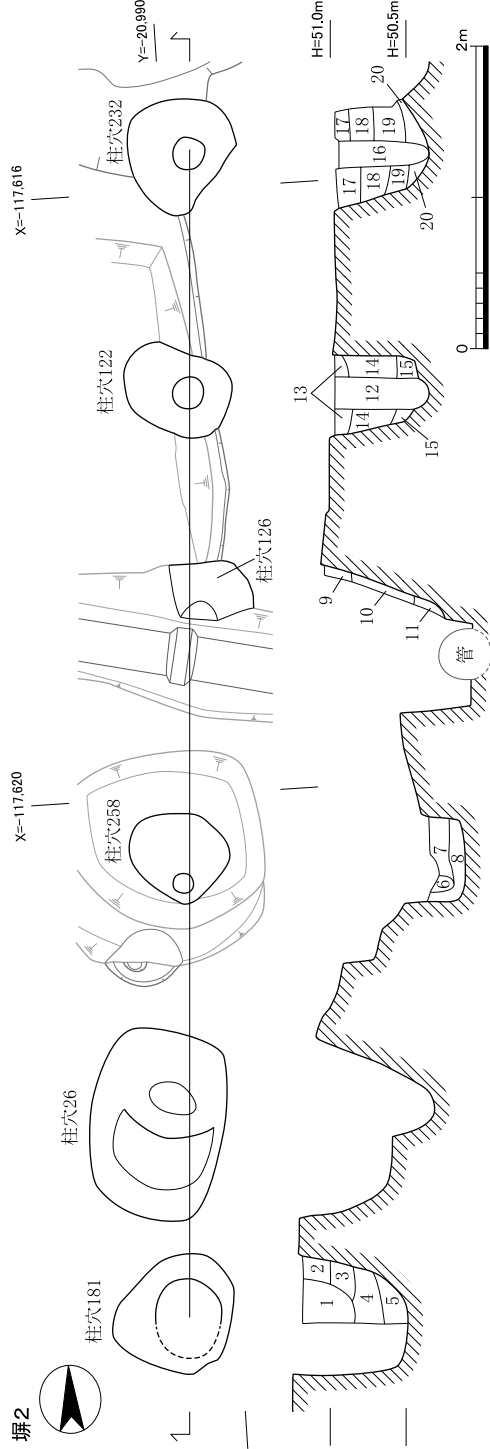
3区堀1・2実測図 (1:50)

- 柱穴109 1 7.5YR5/8明褐色粘質土
 2 10YR4/6褐色砂混粘質土
 3 7.5YR6/6褐色砂混粘質土
 4 7.5YR5/6明褐色粘質土
 柱穴283 5 7.5YR6/8褐色砂混粘質土
 (φ0.5cmの礫含む)
 6 10YR3/4暗褐色粘質土
 7 5YR6/8褐色粘質土
 8 10YR6/6明黄褐色粘質土

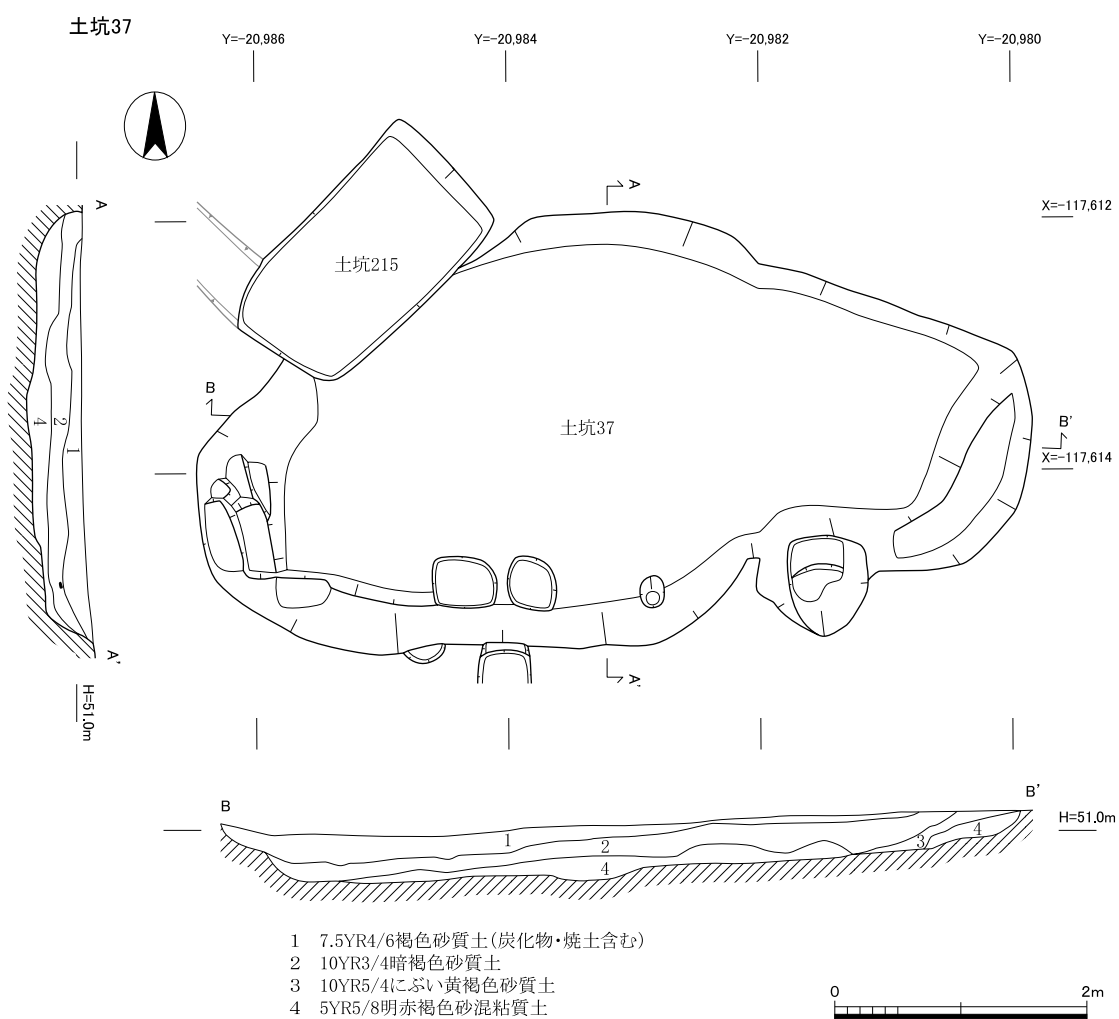
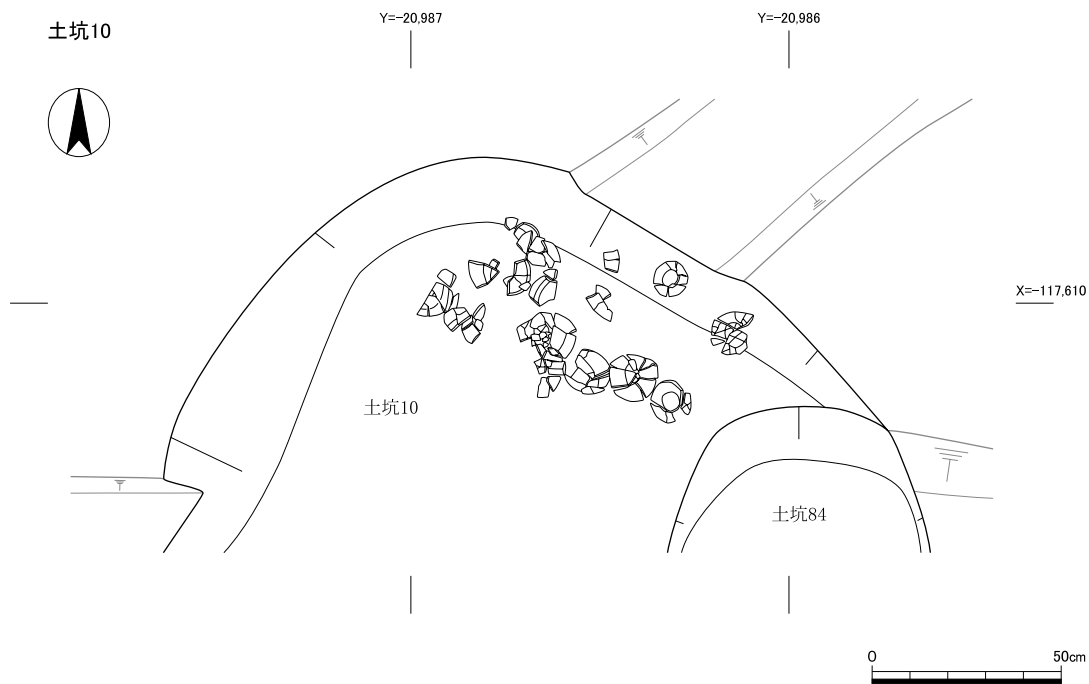
- 柱穴163 9 7.5YR6/8橙色砂混粘質土
 10 10YR3/4暗褐色粘質土
 11 5YR5/6明赤褐色粘質土(粘土ブロック含む)
 12 7.5YR4/6褐色砂混粘質土
 13 7.5YR5/8明褐色粘質土(粘土ブロック含む)
 柱穴70 14 10YR3/4暗褐色粘質土
 15 7.5YR5/8明褐色粘質土
 16 7.5YR4/6褐色砂混粘質土
 17 7.5YR5/8明褐色粘質土(粘土ブロック含む)

- 柱穴66 18 10YR3/4暗褐色粘質土
 19 7.5YR4/4褐色砂混粘質土
 20 7.5YR5/6明褐色粘質土
 21 7.5YR6/8褐色砂混粘質土(赤褐色粘土ブロック含む)
 22 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土
 柱穴164 23 10YR3/4暗褐色粘質土(φ1~2cmの礫含む)
 24 7.5YR5/6明褐色粘質土
 25 7.5YR6/8褐色粘質土
 26 7.5YR6/8褐色粘質土

- 柱穴165 27 10YR3/4明褐色粘質土
 28 5YR5/8明赤褐色粘質土
 29 7.5YR6/8褐色中砂(粘土ブロック含む)
 30 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土
 柱穴62 31 5YR4/6赤褐色粘質土(砂混粘土含む)
 32 5YR5/8明褐色中砂(粘土ブロック含む)

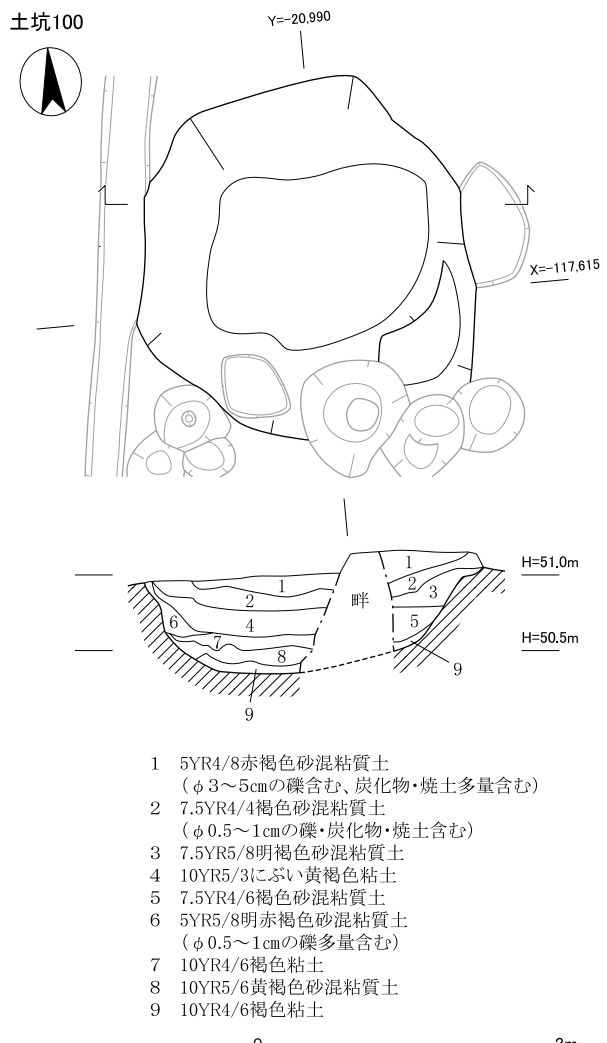
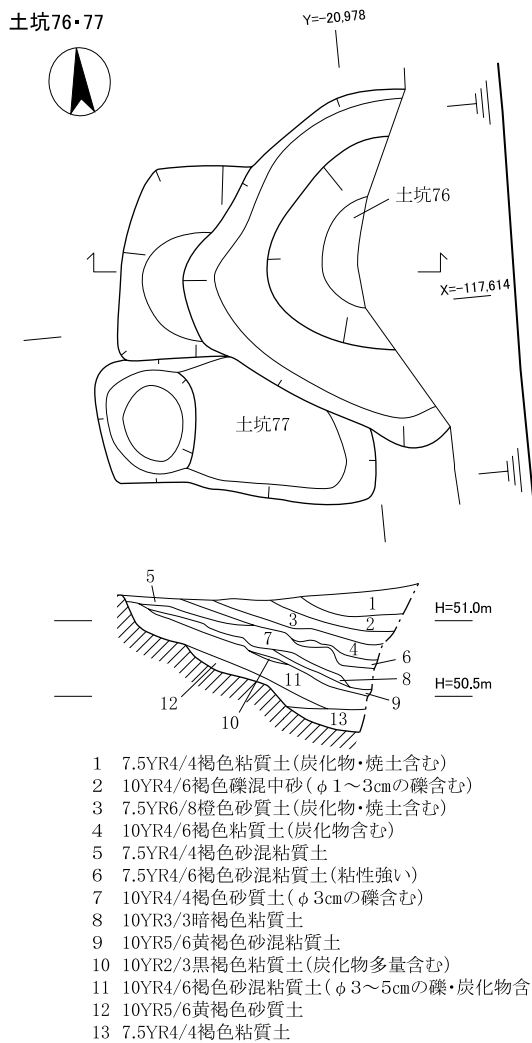
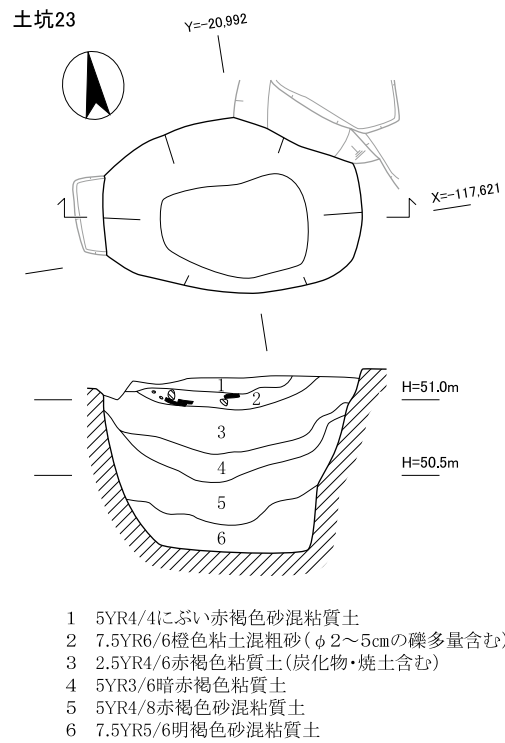
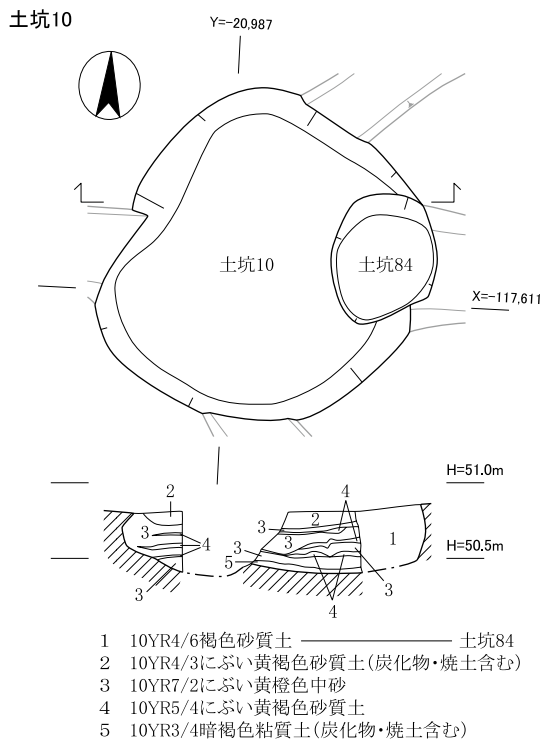


- 柱穴181 1 7.5YR5/8明褐色粘質土
 (φ0.5~1cmの礫含む)
 2 7.5YR6/8褐色粘質土
 3 5YR5/8明赤褐色粘質土
 4 5YR4/8赤褐色砂混粘質土
 5 5YR4/4こぶい赤褐色粘質土
 柱穴258 6 7.5YR4/6褐色粘質土
 7 7.5YR5/8明褐色粘質土
 8 5YR5/6明赤褐色粘質土
 柱穴126 9 7.5YR5/8明褐色粘質土
 10 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土
 11 5YR5/6明赤褐色粘質土
 柱穴122 12 7.5YR6/8褐色粘質土
 (φ1cmの礫・粘土ブロック含む)
 13 5YR4/8赤褐色粘質土
 14 7.5YR4/6褐色砂混粘質土
 15 5YR5/8明赤褐色粘質土
 柱穴232 16 7.5YR4/6褐色粘質土
 17 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土
 18 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土
 19 7.5YR6/8褐色粘質土
 20 5YR3/6暗赤褐色粘質土

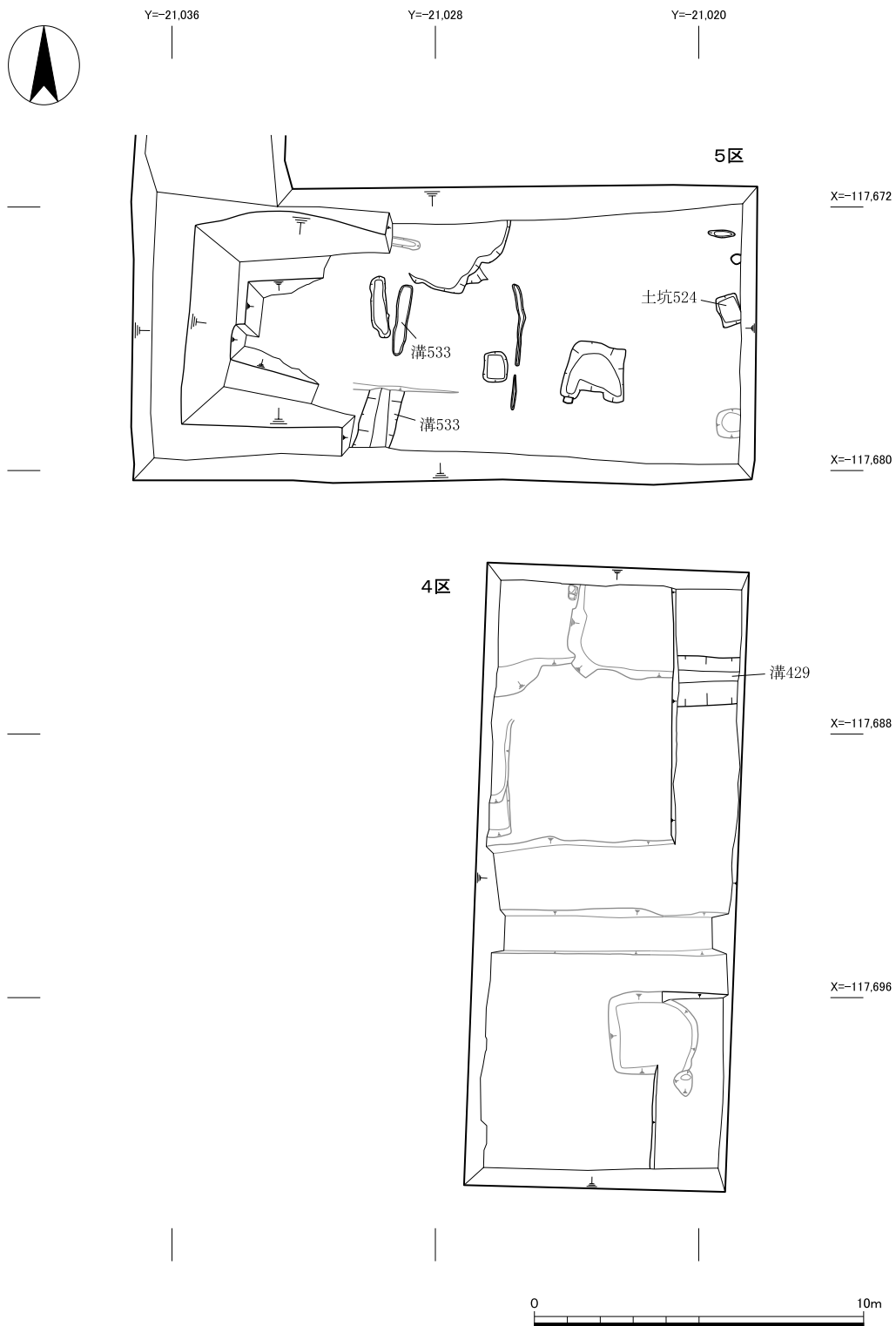


3区土坑10遺物出土状況平面図（1：20）、土坑37実測図（1：60）

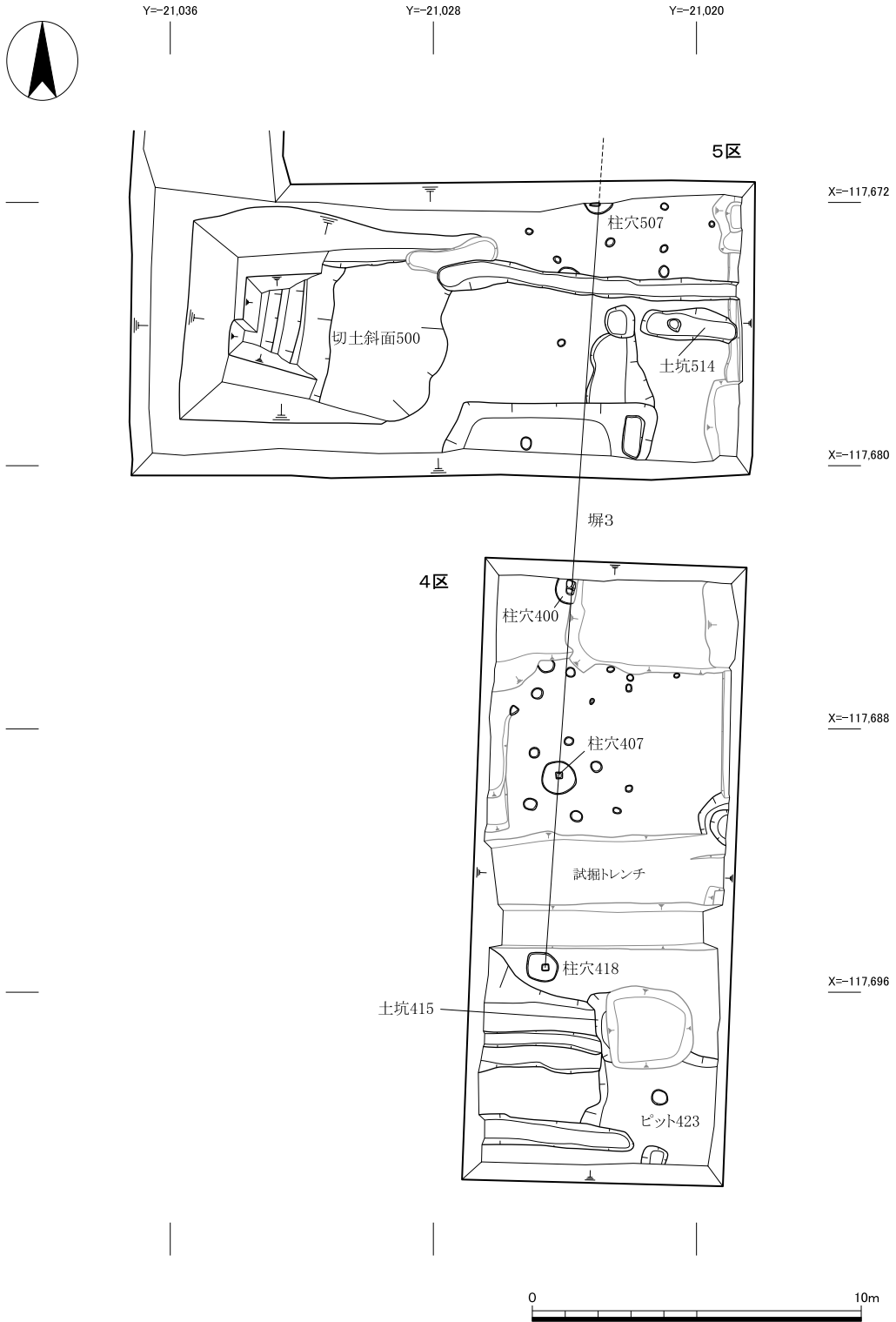
図版
14
遺構



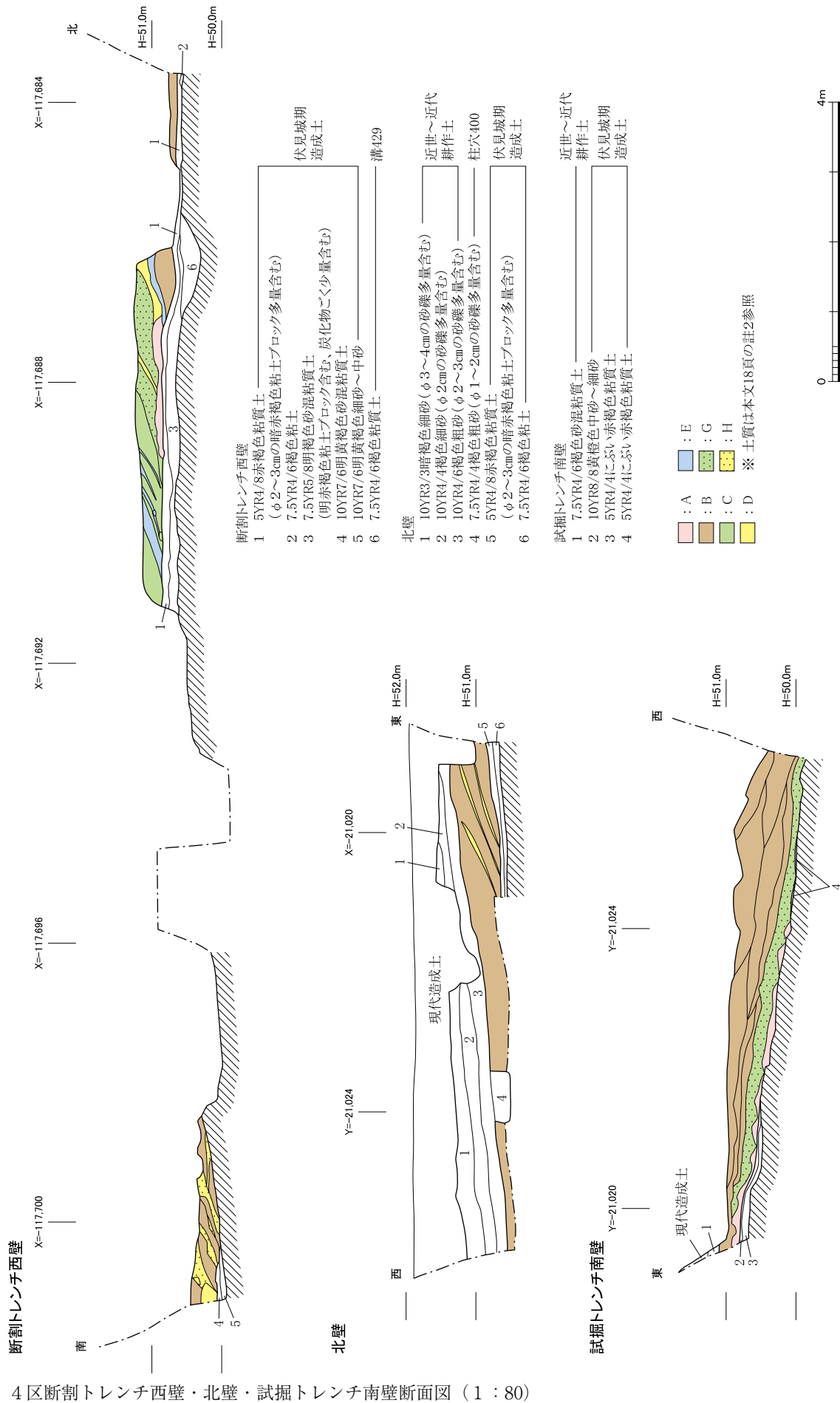
3区土坑10・23・76・77・100実測図(1:50)



4区・5区第2面平面图 (1:200)



4区・5区第1面平面図 (1 : 200)



4区断割トレンチ西壁・北壁・試掘トレンチ南壁断面図 (1:80)



5区北壁断面図 (1:80)

- 1 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(φ0.5~1cmの礫多量含む)
- 2 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土(φ0.5~1cmの礫多量含む)
- 3 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(下面に炭化物層 φ1cmの礫含む)
- 4 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(φ3~5cmの礫少量含む)
- 5 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(φ1~3cmの礫少量含む)
- 6 7.5YR4/6褐色粘質土(φ3cmの礫含む)
- 7 5YR4/6赤褐色砂質土
- 8 7.5YR4/6褐色砂質土(炭化物多量含む)
- 9 7.5YR5/8明褐色砂質土
- 10 7.5YR5/8明褐色粘質土(礫多量含む)
- 11 7.5YR5/6明褐色粘質土(礫多量含む)
- 12 7.5YR5/8明褐色砂質土

近世~近代耕作土

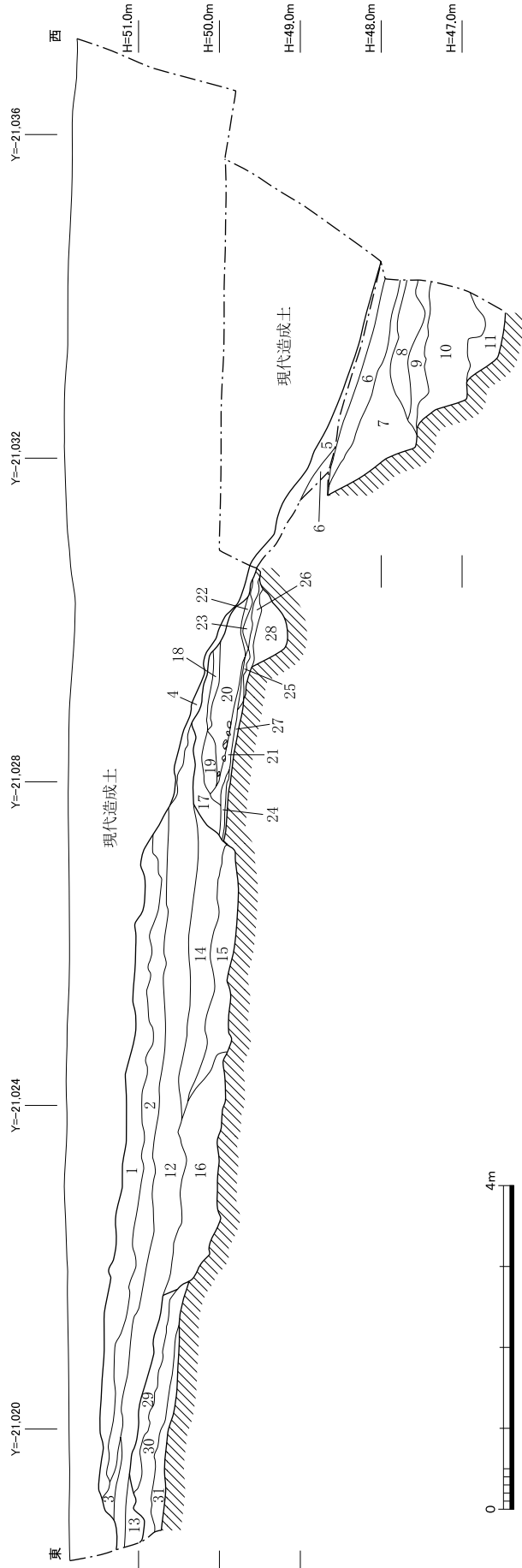
切土斜面500埋土

柱穴507

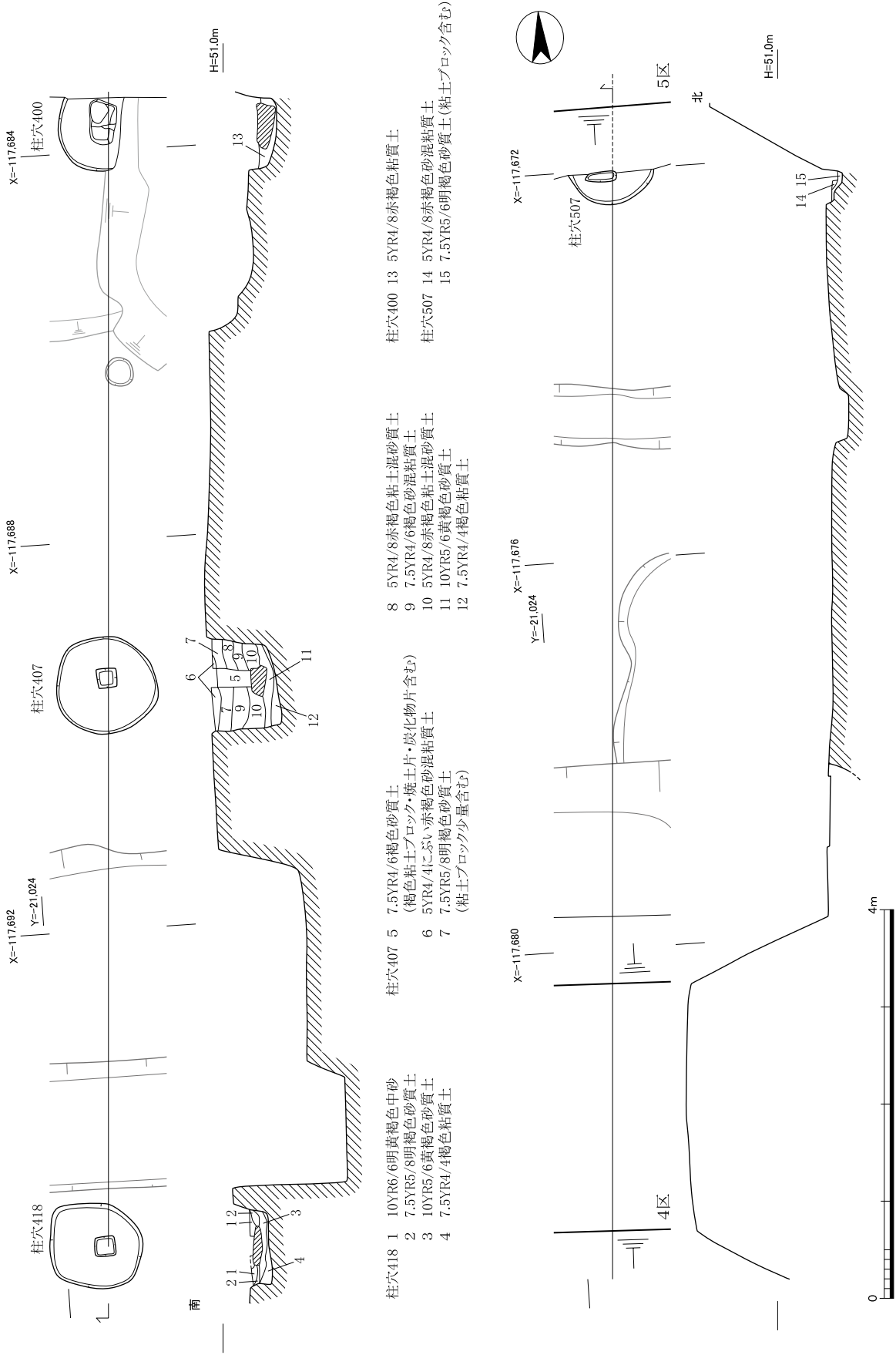
- 13 5YR4/8赤褐色砂混粘質土(φ1cmの礫少量含む)
- 14 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土(φ0.5cmの礫多量含む、φ3cmの礫少量含む)
- 15 7.5YR5/6明褐色砂混粘質土(φ0.5~1cmの礫多量含む)
- 16 7.5YR6/8橙色細砂(赤褐色ブロック・φ1cmの礫多量含む)
- 17 7.5YR6/8橙色砂礫(赤褐色粘質土(黄褐色砂少量含む)
- 18 7.5YR5/8明褐色粘質土(黄褐色砂少量含む)
- 19 5YR4/4こぶい赤褐色粘質土
- 20 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土
- 21 7.5YR6/8橙色中砂(φ0.5cmの礫多量含む)
- 22 7.5YR6/8橙色粘質土
- 23 5YR6/8褐色粘質土
- 24 7.5YR5/6明褐色粘質土
- 25 5YR6/8褐色砂混粘質土
- 26 7.5YR7/8黄褐色細砂~中砂(φ0.5cmの礫多量含む)
- 27 7.5YR6/8橙色細砂~中砂(φ0.5cmの礫多量含む、赤褐色粘土ブロック含む)
- 28 7.5YR6/8橙色砂礫(赤褐色粘質土)
- 29 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土(φ1cmの褐色粘土ブロック多量含む)

伏見城期造成土

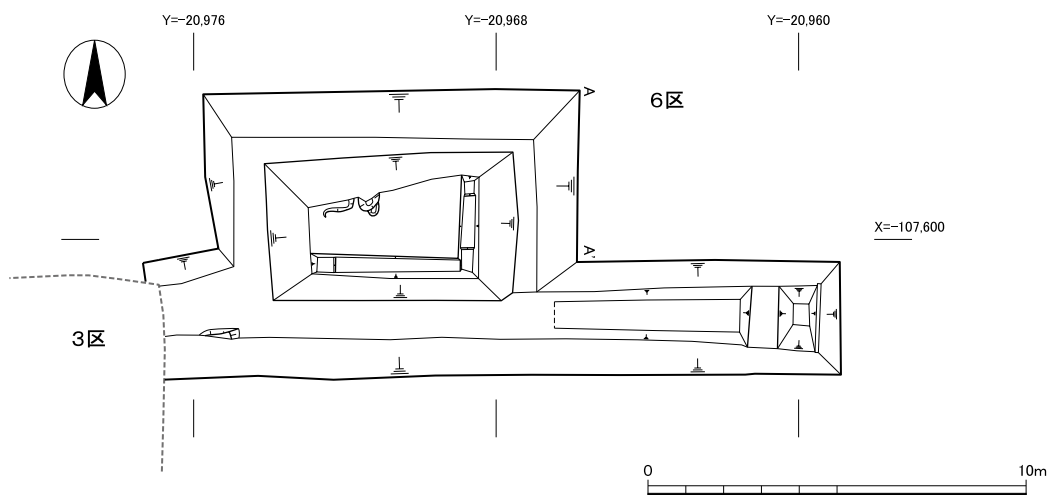
5区南壁断面図 (1:80)



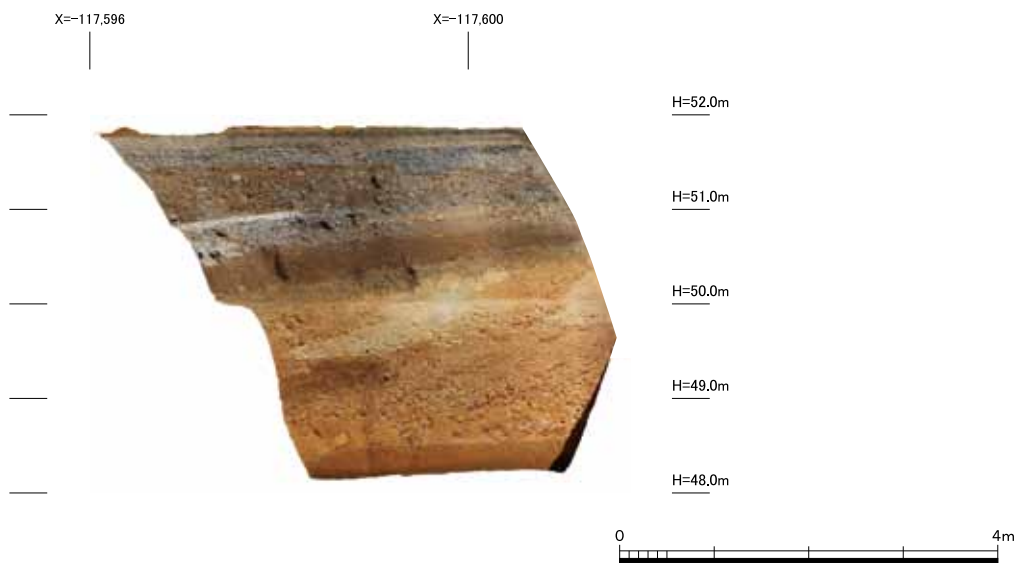
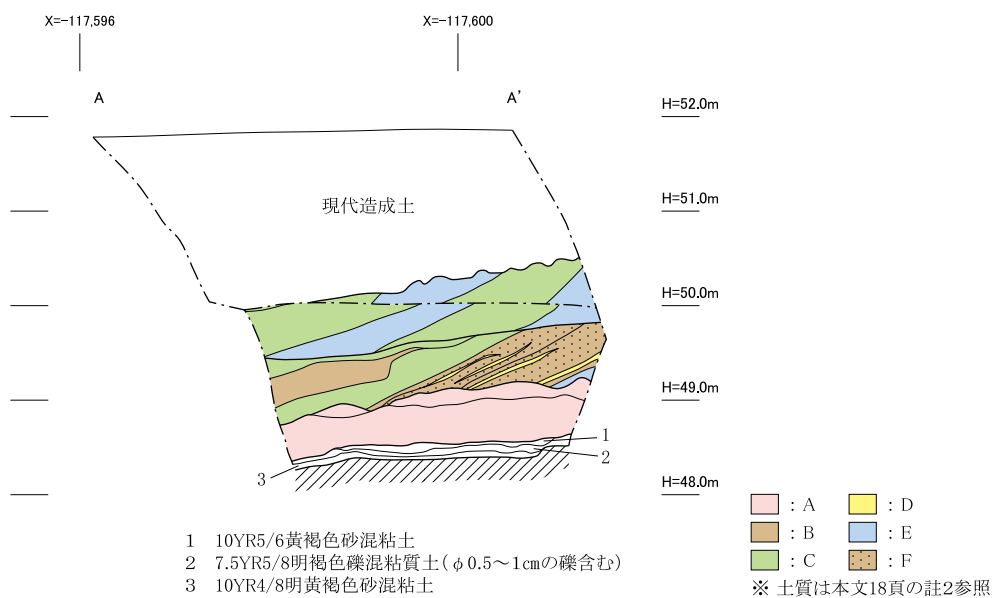
- | | | | |
|---|--|--|--|
| <p>1 5YR4/8明赤褐色砂混粘質土</p> <p>2 7.5YR5/6明褐色砂混粘質土</p> <p>3 5YR4/8明赤褐色砂混粘質土</p> <p>4 7.5YR4/3褐色砂質土(φ0.5~1cmの礫多量含む)</p> <p>5 5YR4/6赤褐色砂混粘質土</p> <p>6 7.5YR4/3褐色砂質土(φ0.5~1cmの礫多量含む)</p> <p>7 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(φ1cmの礫含む)</p> <p>8 7.5YR4/6褐色砂混粘質土(φ3~5cmの礫少量含む)</p> <p>9 7.5YR5/8明褐色砂混粘質土(φ1~2cmの礫含む)</p> <p>10 7.5YR4/6褐色粘質土(φ1~3cmの礫少量含む)</p> <p>11 7.5YR4/6褐色粘質土(φ3cmの礫含む)</p> <p>12 5YR5/8明赤褐色砂礫混粘質土</p> <p>13 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土</p> <p>14 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土</p> <p>15 5YR4/8赤褐色粘質土</p> <p>16 5YR5/8明赤褐色粘質土</p> | <p>近代～近代耕作土</p> <p>致差500埋土</p> <p>近代～近代耕作土</p> | <p>17 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土
(φ1~3cmの礫多量含む、φ1cmの褐色粘土ブロック含む)</p> <p>18 7.5YR4/6褐色砂混粘質土</p> <p>19 5YR4/8赤褐色砂混粘質土
(φ3~5cmの礫・φ1~3cmの褐色粘土ブロック多量含む)</p> <p>20 5YR4/8赤褐色粘質土(φ1cmの褐色粘土ブロック多量含む)</p> <p>21 7.5YR7/8黄褐色砂混粘質土(φ1cmの褐色粘土ブロック・黄褐色細砂多量含む)</p> <p>22 5YR4/4こぶい赤褐色砂混粘質土</p> <p>23 5YR4/6赤褐色粘土(褐色粘土ブロック含む)</p> <p>24 7.5YR5/8明褐色粘質土</p> <p>25 7.5YR5/8明褐色粘土(浅黄色細砂含む)</p> <p>26 5YR4/6赤褐色粘質土</p> <p>27 10YR7/4こぶい黄褐色砂混粘土</p> <p>28 5YR4/3暗赤褐色粘質土</p> <p>29 5YR4/8赤褐色粘質土(φ1cmの褐色粘土ブロック多量含む)</p> <p>30 5YR4/6赤褐色粘土(φ1cmの礫少量含む)</p> <p>31 5YR5/8明赤褐色砂混粘質土(φ1cmの褐色粘土ブロック多量含む)</p> | <p>土手状の高まり</p> <p>伏見城期造成土</p> <p>溝521</p> <p>伏見城期造成土</p> |
|---|--|--|--|



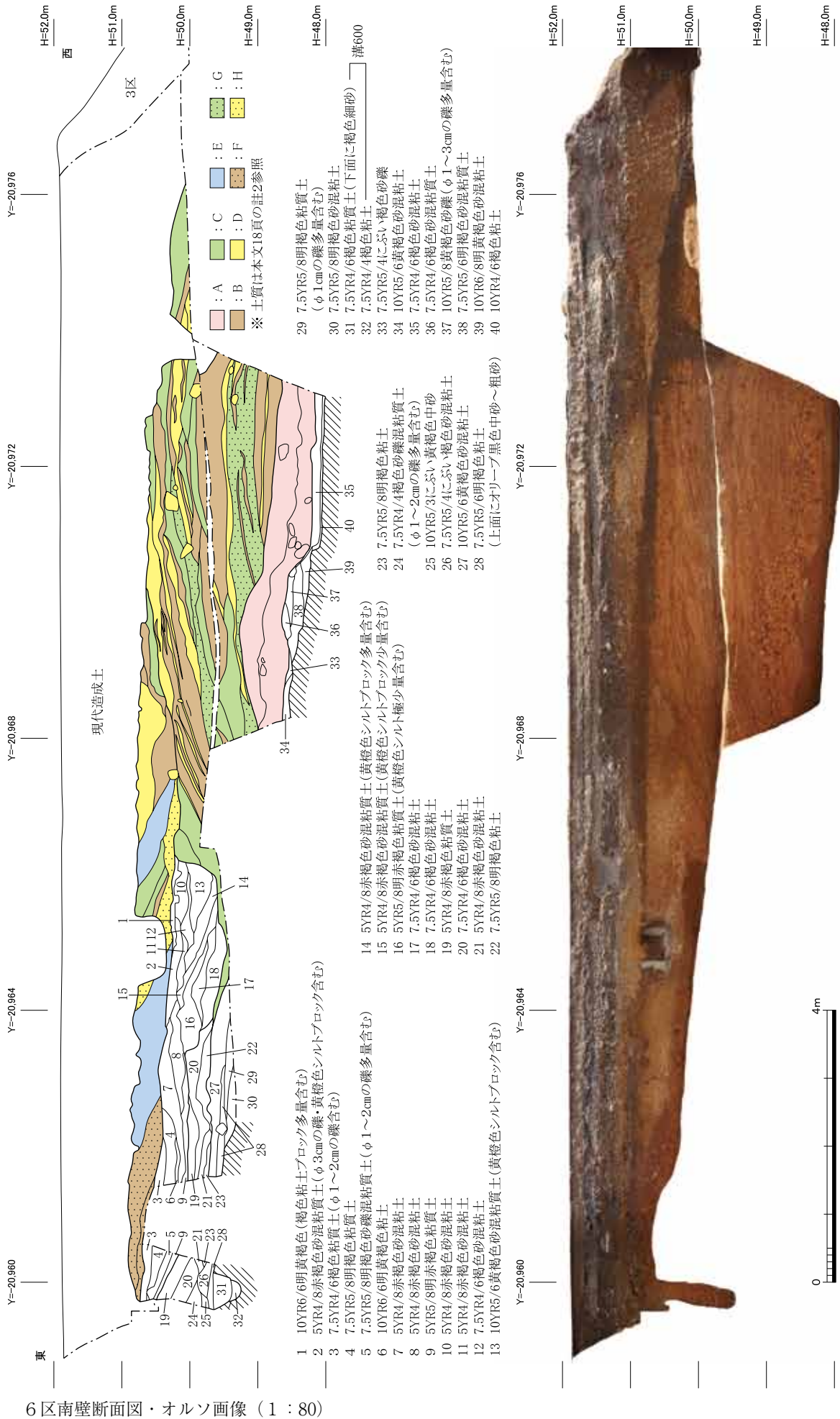
4・5区塀3実測図 (1:60)



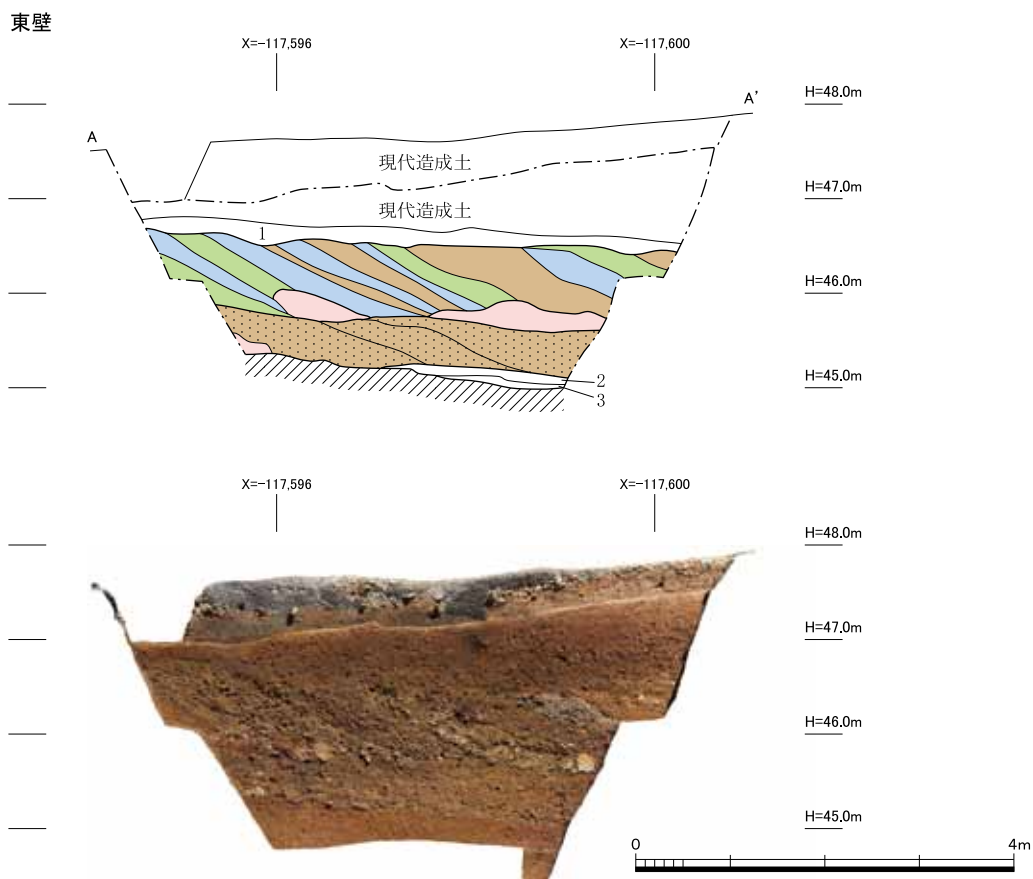
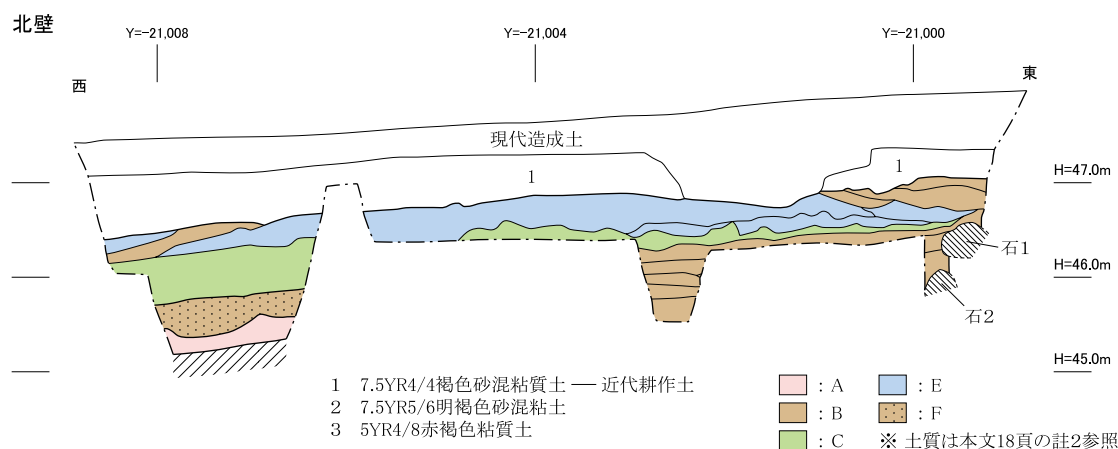
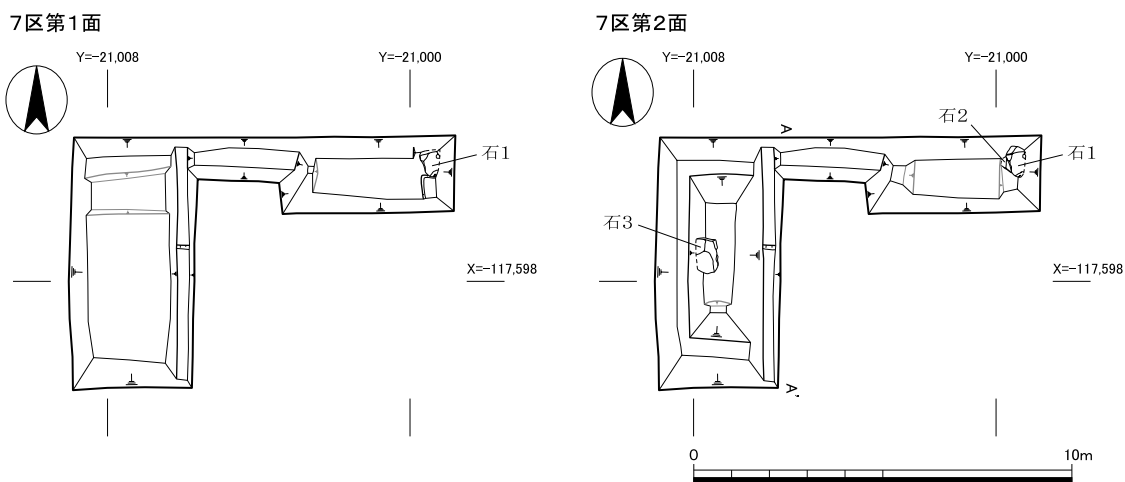
東壁



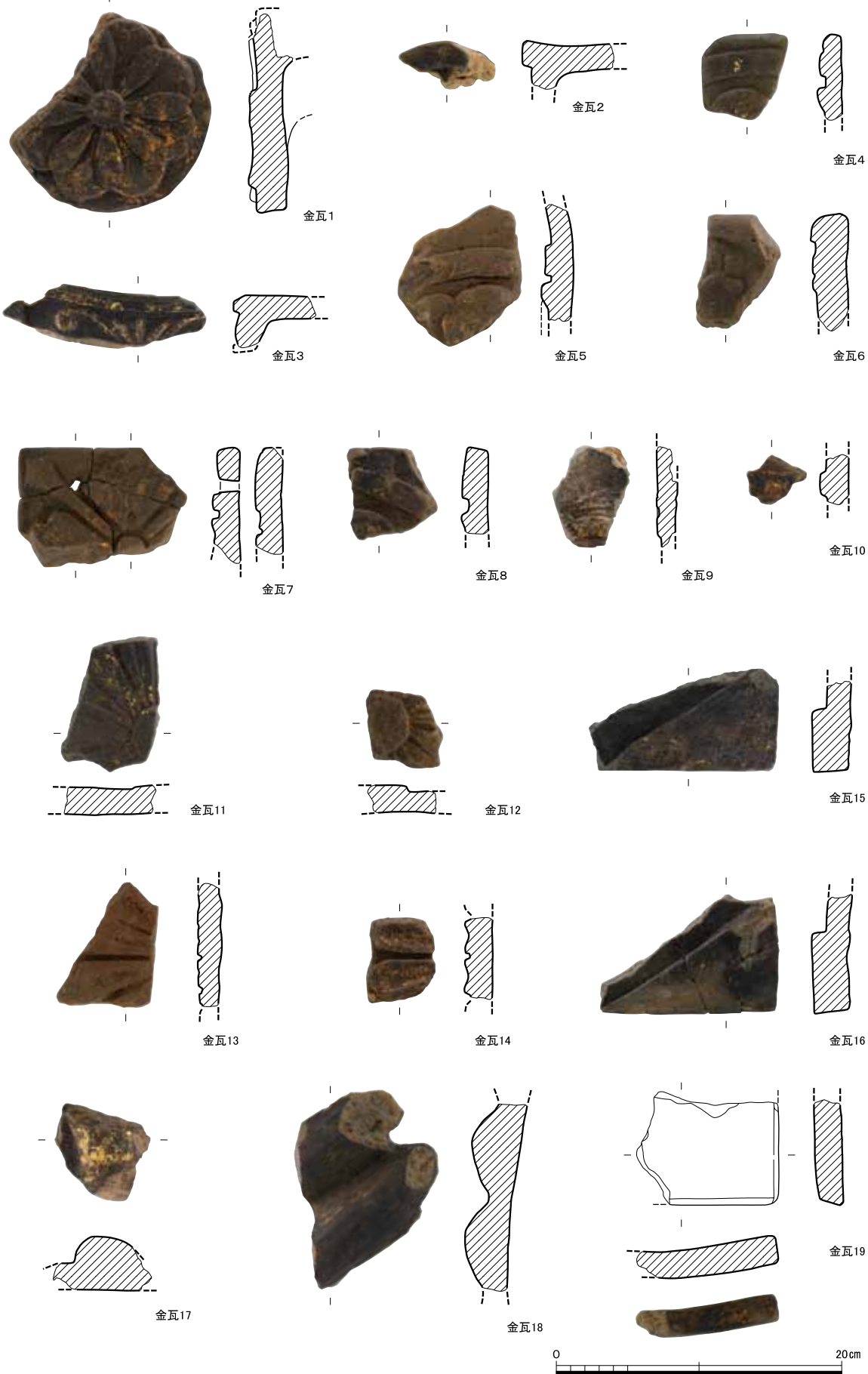
6区平面図(1:200)、東壁断面図・オルソ画像(1:80)



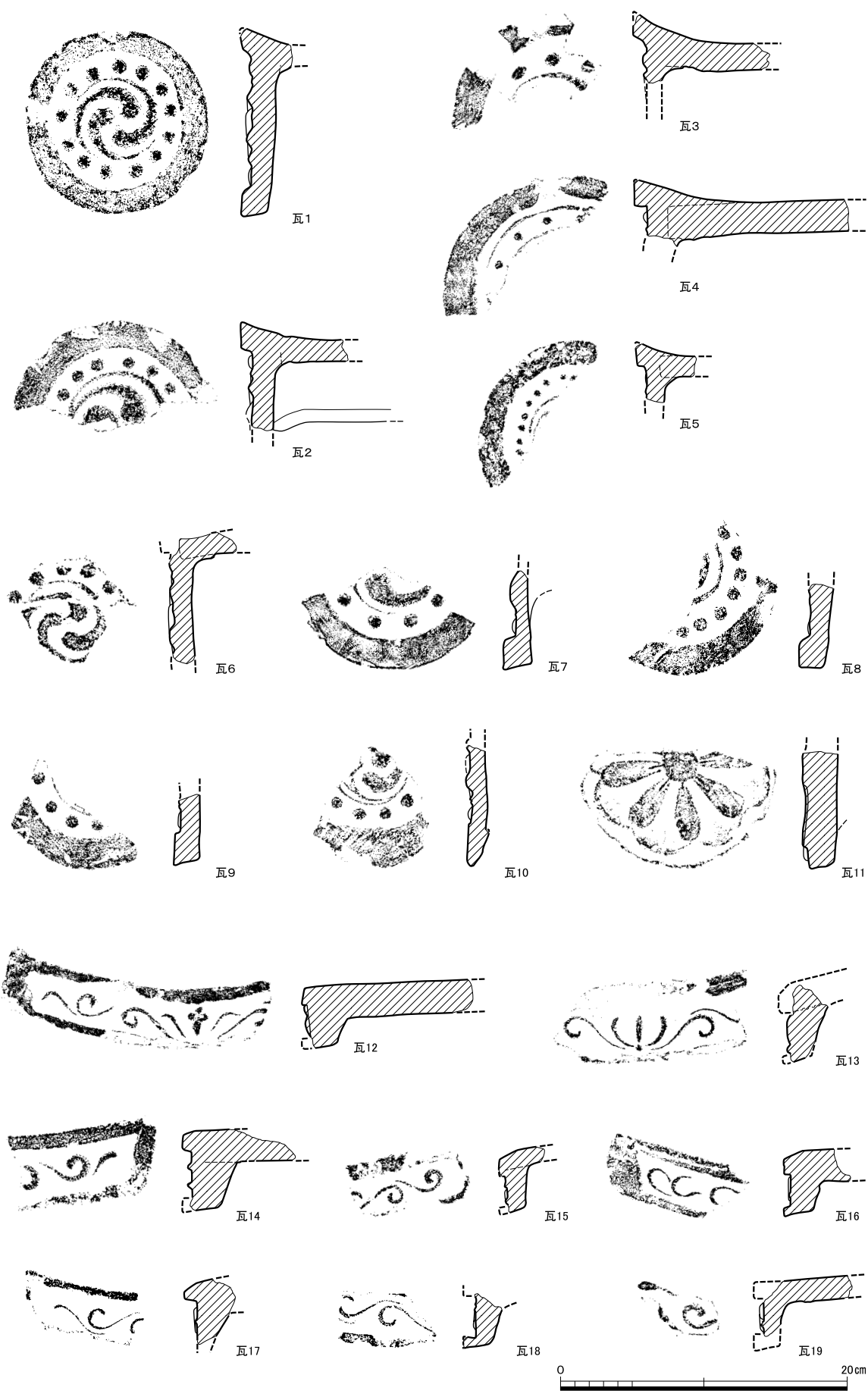
6区南壁断面図・オルソ画像(1:80)



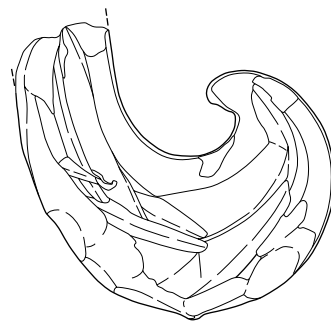
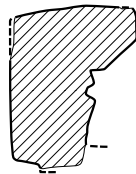
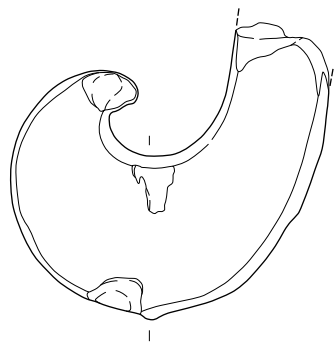
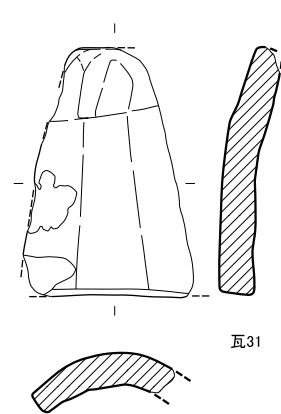
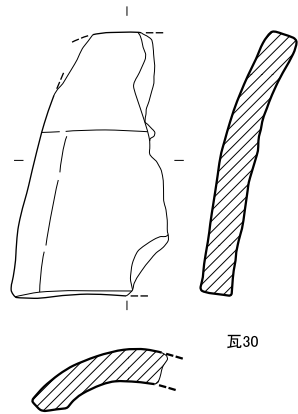
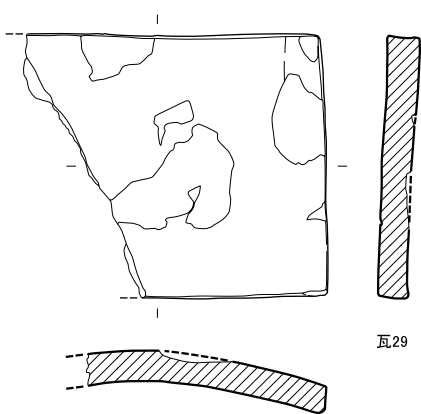
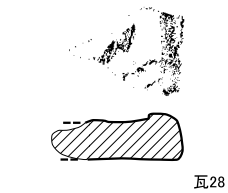
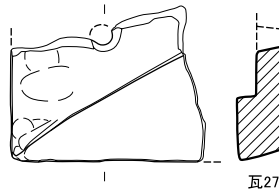
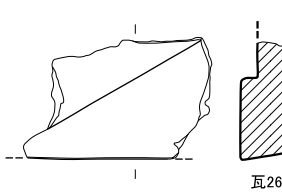
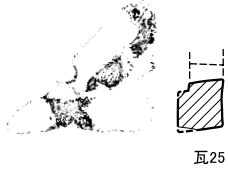
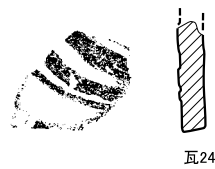
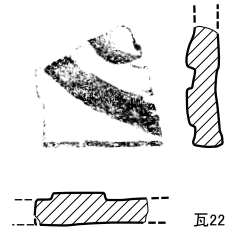
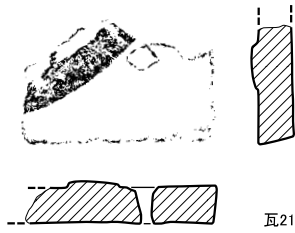
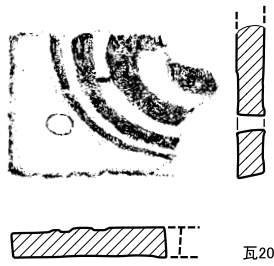
7区平面図 (1 : 200)、北壁・東壁断面図・オルソ画像 (1 : 80)



金箔瓦実測図 (1 : 4)



瓦拓影及び美測図1 (1 : 4)



瓦拓影及び実測図 2 (1 : 4)



1 1区南壁断面（北西から）



2 1区土手状高まり1断割状況（北から）



1 2区第2面全景（南東から）



2 2区溝1掘削状況（北東から）



3 2区溝2掘削状況（北東から）



1 3区第2面東壁土手状高まり（北西から）



2 3区第1面全景（南西から）



1 3区塀1 検出状況（西から）



2 3区塀1 完掘状況（西から）



3 3区塀2 完掘状況（北から）



1 3区塀2柱穴284断面(西から)



2 3区土坑23金箱瓦出土状況(東から)



3 3区土坑37断面(南西から)



4 3区土坑37金箱瓦出土状況(南から)



5 3区土坑48遺物出土状況(南から)



6 3区土坑77東壁断面(西から)



7 3区土坑10(南西から)



8 3区土坑10遺物出土状況(南東から)



1 4区第2面全景（北東から）



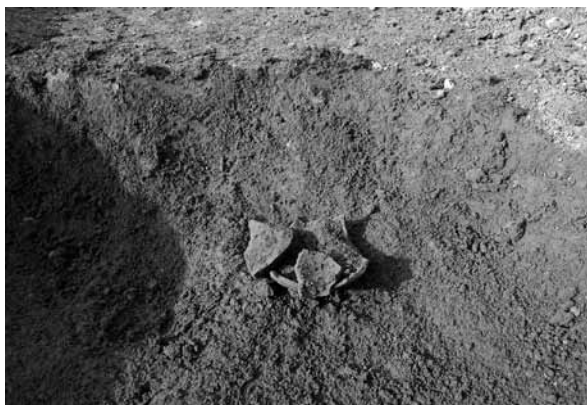
2 4区第1面全景（北東から）



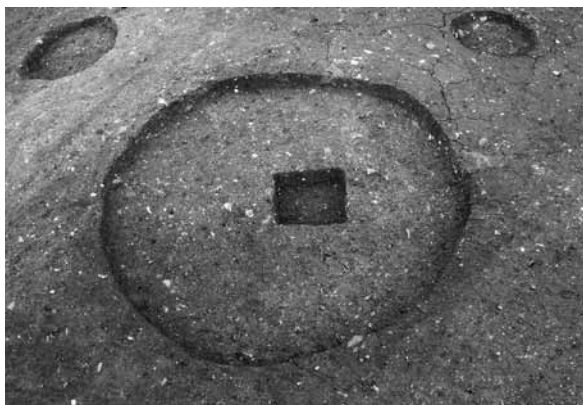
1 4区第1面の造成単位（北東から）



2 4区試掘トレンチ南壁断面（北東から）



1 4区伏見城期の造成土遺物出土状況（南から）



2 4区塀3柱穴407検出状況（東から）



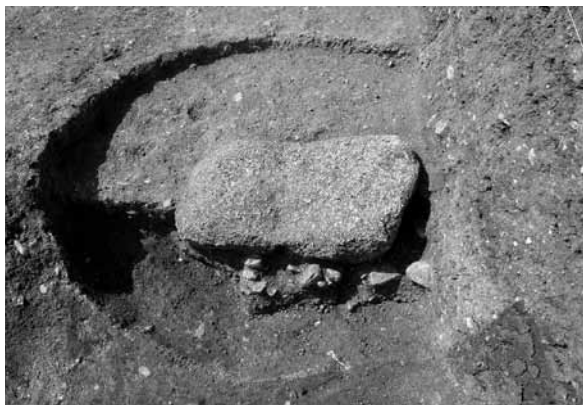
3 4区塀3柱穴407掘削状況1（東から）



4 4区塀3柱穴407掘削状況2（東から）



5 4区塀3柱穴400検出状況（東から）



6 4区塀3柱穴400掘削状況（東から）



7 4区塀3柱穴418掘削状況（東から）



8 4区土坑415遺物出土状況（南から）



1 5区第2面全景（西から）



2 5区切土斜面500検出状況（北西から）



3 5区第1面全景（西から）



1 6区全景（北西から）



2 6区東壁断面（西から）



3 6区遺物出土状況（北から）



1 7区第2面全景（南西から）



2 7区第2面石1・2検出状況（南西から）



3 7区第1面全景（北西から）





瓦1



瓦20



瓦2



瓦25



瓦11



瓦27



瓦12



瓦28



報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと・ふくしまだゆういせき							
書名	伏見城跡・福島太夫遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2021-5							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2021年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区	26100	1172	34度	135度	2020年10月 5日～2021 年4月30日	1,460m ²	学校整備 工事
ふくしまだゆういせき 福島太夫遺跡	ももやまふくしまだゆう 桃山福島太夫 きたまち 北町52番地		1174	56分 23秒	46分 13秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伏見城跡	平城跡	伏見城期以前	土坑		土師器、須恵器		基盤層に盛土・切土を施すことで、伏見城城下町を造成する様子を確認した。	
福島太夫遺跡	集落跡	伏見城造成時	土手状高まり、段差、切土斜面、溝、石、造成盛土		石製品			
		伏見城期	塀、土坑、ピット、溝		土師器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、磁器、瓦類、金属製品、貝類			
		伏見城廃城後	土坑、ピット、溝、落ち込み		施釉陶器、染付、磁器、金属製品、銭貨			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-5

伏見城跡・福島太夫遺跡

発行日 2021年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961